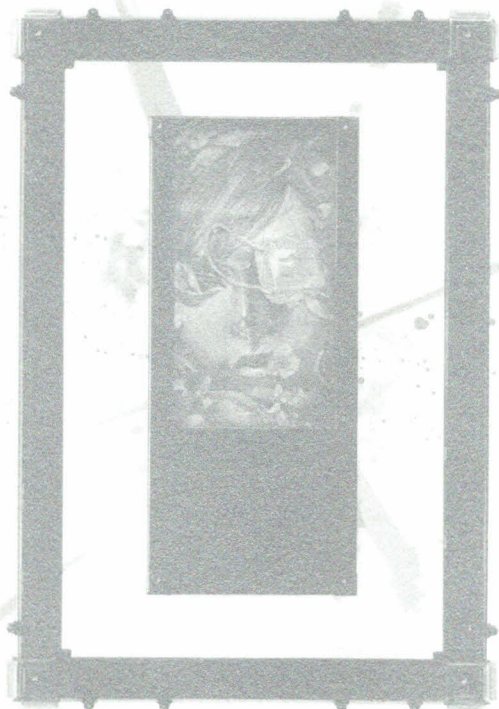
顔のない独裁者
「自由革命」「新自由主義」との戦い
さかき漣 著
三橋貴明 企画 監修
PHP

日本が終わりの見えない不況に陥ってから随分と長い時が過ぎ、その間、多くの悲劇が起き続けたとも聞く。そういった中、世界を席巻しつつある、いわゆる「新自由主義」や「グローバリズム」が、いかに人間らしい暮らしを破壊する危険性を孕んだ思想であるか、この点をデフォルメし、エンターテインメントとして世に訴えかける。それが、今回の私のなすべき仕事だった。
本書は経済評論家の三橋貴明先生による企画のため、むろん、政治経済の問題をメイン・イシューとして筆を進めた。しかし、私が個人的に描きたかったのは、ひたすら人々の苦悩のありようだった。（さかき漣／「あとがき」より抜粋）

顔のない独裁者

「自由革命」「新自由主義」との戦い

さかき漣 著
三橋貴明 企画・監修

PHP研究所

顔のない独裁者

目次

主要登場人物

秋川　進　大エイジア連邦政権下の第三地域（旧：日本）市民だったが、抵抗組織「ライジング・サン」の一員として日本奪還のために戦う。国土交通省道路交通局所属の官僚。

涼月　みらい　進とともに戦う女性。「ライジング・サン」諜報部長、総務省報道局准将、国営放送局ホウライ・チャネルのキャスターなど、複数の顔を持つ。

駒ヶ根　覚人　「ライジング・サン」を指導するリーダー。通称〝ＧＫ〟。事業家でもある。

恵那　「ライジング・サン」諜報部副長。

乗鞍　「ライジング・サン」諜報部メンバー。

涼月　忍　「ライジング・サン」創立者。多額の資金提供をするとともに、駒ヶ根を組織のリーダーに抜擢した。涼月みらいの実父。博士（政治学）。

空木　豊作　憲政党総裁。

西崎　亨　憲政党衆議院議員。政務調査会長。

榛名　良之助　民主博愛党総裁。大エイジア連邦第三地域内閣総理大臣。

那須　尚志　民主博愛党議員。衆議院議長。

千畳敷　勇三　黎明大学教授。経済自由化政策の論客として政府中枢に食い込む。

真砂　茜　平安大学土木工学専攻の教授。経済自由化委員会委員。

サミュエル・グエン　ＢＯＪ（日本国中央銀行）総裁。

甲斐　宗太郎　ＢＯＪ企画局副局長。

中津川　国土交通省道路交通局局長。

高尾　国土交通省道路交通局所属の官僚。秋川進の同僚。

穂高　奥羽州政府職員。国土交通省東北整備局に出向中。

有明　官邸警備隊大尉。「ライジング・サン」元メンバー。

九重　総務省報道局中佐。総務省におけるみらいの直属の部下。日本と米国の混血。

アンドリュー・モラレス　自由ガーディアンズＣＥＯ（最高経営責任者）。

丹沢　なお子　駒ヶ根の幼年時代に憧れだった少女。

装画　鈴木康士
装丁　森　裕昌

第一章

日本奪還

響くシュプレヒコールのなか、進とみらいは夜空を照らす火を眺め、佇んでいる。歴史がまさに目の前で動いている様を、ふたりは見つめている。
昨日までの〝ここ〟は、大エイジア連邦主席という独裁者によって、支配されていた。祖国を奪われ、「大エイジア連邦の第三地域市民」として生きることを余儀なくされた人々。彼らはかつて、確かに〝日本人〟と呼ばれていたはずなのだ。しかし、その二千六百有余年の長き歴史において初めて国なき民となり、あまつさえ酷く虐げられ続けた彼らは、もはや民族の誇りを持たず、ただ蠢く烏合の衆にも見えた。
大エイジア連邦とは、ユーラシア大陸東部に建国された人工国家である。が、はたしてその実態は国家ではなかった。単に各民族の尊厳が極限まで踏みにじられた、歪な政治形態にすぎなかった。連邦の内に生きる人々は、「大エイジア連邦に栄光あれ」という老爺のしわがれ声を聞くことを日常とし、声の主への呪いを込め唾を吐いた。
この十数年の歳月は多くの民にとって、まさに暗夜だったのだ。それはもちろん、今ここに並んで立つ男女、進とみらいにとっても。

すべての始まりは、２０１Ｘ年に勃発した、日本と中国による尖閣諸島の領有権争いだった。複数の史書において日本固有の領土であると明記されていた尖閣諸島。しかし中国

漁船の大群が尖閣諸島に押し寄せ、そのうちのひとつ魚釣島に上陸したときから、日本国は実に70年ぶりに、穏やかならぬ戦火にその身を投じることとなった。後に言うところの「極東戦争」である。

日本の海上自衛隊の練度は、中国海軍のそれをはるかに上回り、当初の戦況は日本有利で進んだ。開戦当初、東シナ海を舞台に繰り広げられた複数の戦闘では、ロシア製ディーゼル潜水艦が主力の中国軍に勝ち目などなかったのだ。世界屈指の対潜水艦能力を持つ海上自衛隊のＰ－３Ｃ哨戒機の前に、中国海軍ではとうてい、太刀(たち)打ちできない。

しかし中国側に同盟国として参戦していた朝鮮民主主義人民共和国が発射した、一発の核ミサイルが戦況を一変させる。小型化に成功した核弾頭を搭載した北朝鮮製ミサイル「正日1号」が、寧辺(ニョンビョン)のミサイル基地から発射され、日本列島を横断。駿河湾の中心部に着弾し、核爆発を起こしたのだ。しかしこれはあくまで海上着弾であり、人的被害はほとんどなかった。が、当然ながら多くの日本国民はパニックに陥った。

恐怖した日本人は、アメリカとの軍事協定に、自らの安寧(あんねい)の理由を求めた。が、本来は日米安全保障条約に基づき日本側に加勢するはずのアメリカは、あろうことか、在日米軍を自国領内まで引かせてしまったのである。日中間の軋轢(あつれき)への自国による軍事介入に、大統領が難色を示した結果だ。なんともはや、日米安全保障条約が単なる抑止力にすぎず、

実際に戦争が始まった場合には無効になる可能性がある、という事実が、ここで初めて日本国民に明らかになったわけである。

アメリカ軍が極東戦争不参加を決め、その旨が公式発表された日、日米安全保障条約の具体的な内容について、とくに問題を多く孕（はら）む〝第五条〟の存在について、初めて日本人は知ることとなる。

「日米安全保障条約　第五条

各締約国は、日本国の施政の下にある領域における、いずれか一方に対する武力攻撃が、自国の平和及び安全を危うくするものであることを認め、自国の憲法上の規定及び手続に従つて共通の危険に対処するように行動することを宣言する。

前記の武力攻撃及びその結果として執つたすべての措置は、国際連合憲章第五十一条の規定に従つて直ちに国際連合安全保障理事会に報告しなければならない。その措置は、安全保障理事会が国際の平和及び安全を回復し及び維持するために必要な措置を執つたときは、終止しなければならない」

「自国の憲法上の規定及び手続に従って共通の危険に対処するように行動する」……その

日まで、日本国民の多くは、緊急時には日米安全保障条約が自動的に発動するものと思い込んできたのである。しかし現実には、日本に安全保障上の危機が生じたとしても、アメリカは無条件に軍事力を行使するのではない。あくまで「アメリカの憲法上の規定及び手続きに従って」アメリカ軍が動くことになると、条文で定められていた。

アメリカ憲法上の規定、手続きとは、アメリカの戦争権限法である。戦争権限法とは、アメリカ大統領の軍に対する指揮権を制約するものだ。軍事介入した際に、アメリカ大統領は、「事前の議会への説明の努力」「事後48時間以内の議会への報告」「60日以内の議会からの承認取り付け」、以上三点の義務を課せられている。

しかしこの極東戦争の際、大統領はその前段階の「軍事介入」から拒否したのだ。彼は一片の躊躇(ちゅうちょ)もなく、「辺境の島国の、さらに辺境の、人っ子ひとりも住まぬ島。それを守るために米国兵士の血を流すという判断を、わたくしはできない。愛すべきアメリカ、自由の国アメリカ、それを支える若者に、無駄死にさせるのはわたくしの良心が許さない。わたくしの一個人としての同義に反するのだ」と、テレビカメラに向かいのたまった。

厚顔無恥の会見の裏側で、実はアメリカ議会の一部の議員たちは、日本の同盟国として参戦することに前向きだったのだ。しかし初期の段階で自国リーダーが軍事介入を拒否した以上、アメリカの国家としての意向は、参戦拒否に傾かざるを得なかった。「いくら同

盟国といえど、アジアの辺境の島を守るために核保有国と戦争をするのでは、アメリカの国益に損なうところが大きすぎる」との世論が、国内に拡がっていった。この厭戦気運はもちろん、アメリカ以外の国籍を持ちながらアメリカ全土にわたり暗躍する、親中派ロビイストの活動に起因するところも大きかった。

アメリカの参戦拒否は、日本国民をまさに奈落の底まで突き落とした。

呆然自失のまま為す術を持たない日本人。彼らの動揺に加え、多くの政治家も動揺した結果として、日本の政界に大激変が起こることとなる。

極東戦争終盤に行われた総選挙において、「極東戦争の即時終結」という、わかりやすすぎる公約を掲げた民主博愛党が圧勝し、実際に早期停戦は実現した。日本人が望んでやまなかった、平和の時代が到来したのだ。

しかし民主博愛党政権は、いざ政権の座を得ると、件の公約についていっさいの口を噤んだ。それどころか、博愛精神遵守法、異邦人地方参政権付与法、環境保護新法、改正上級公務員法など、耳慣れない呼び名の法案を精力的に実現させていったのだ。もともと国民が民主博愛党に求めていたのは、戦争終結の一点であったはずである。これら新法案の成立など、国民の多くにとって寝耳に水であった。

「改正上級公務員法」とは、官僚職の外国人への開放である。「多文化共生社会とは、外国人であろうとも自国の高級官僚として受け入れる度量がある社会である」というのが、民主博愛党政権の言い分であった。

もうひとつ、「環境保護新法」とは、凶悪犯罪をなした男性に対し、断種手術を強制する法律である。犯罪者でなくとも、一般の日本人男性に対し断種手術を受け入れるよう、環境委員たちが各家庭に推奨（すいしょう）して回った。環境委員たちは環境保護新法に基づく断種手術について、「自然と調和するための環境対応」と呼んだのである。

民主博愛党による改革は、留まるところを知らなかった。政権は平壌（ピョンヤン）で開かれた極東戦争の和平会議において、平壌条約を締結。北東アジア（日本、中華人民共和国、大韓民国、朝鮮民主主義人民共和国）の一体化を推進する「大エイジア連邦」の創設、アジア中央銀行及びアジア共通通貨ＡＣＵ（アキュ）の設立などが定められた。それどころか、なんと日本政府は憲法の「条約は政府の専権事項」という記述を盾に取り、わずか2日間にすぎなかった平壌会議において合意をまとめ、いっさいの国内論議のないままに、日本の大エイジア連邦加盟を国会で議決してしまうに至ったのだ。

一連の政策は、明らかに日本国憲法に反していた。

「日本国民は、正当に選挙された国会における代表者を通じて行動し、われらとわれらの子孫のために、諸国民との協和による成果と、わが国全土にわたつて自由のもたらす恵沢を確保し、政府の行為によつて再び戦争の惨禍が起ることのないやうにすることを決意し、ここに主権が国民に存することを宣言し、この憲法を確定する。そもそも国政は、国民の厳粛な信託によるものであつて、その権威は国民に由来し、その権力は国民の代表者がこれを行使し、その福利は国民がこれを享受する。これは人類普遍の原理であり、この憲法は、かかる原理に基くものである。われらは、これに反する一切の憲法、法令及び詔勅を排除する。

日本国民は、恒久の平和を念願し、人間相互の関係を支配する崇高な理想を深く自覚するのであつて、平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した。われらは、平和を維持し、専制と隷従、圧迫と偏狭を地上から永遠に除去しようと努めてゐる国際社会において、名誉ある地位を占めたいと思ふ。われらは、全世界の国民が、ひとしく恐怖と欠乏から免かれ、平和のうちに生存する権利を有することを確認する」

この憲法の前文を都合よく解釈した民主博愛党幹部は、「大エイジア連邦の思想こそが、

『諸国民との協和による成果』であり、『平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、安全と生存を保持する』道だ」とすら強弁した。
さらに、「そもそもの前提として、日本国憲法には、国名の規定がない」という理由に基づき、民主博愛党は「呼称正規化運動」を進めていった。「呼称正規化」とは、アジアの同胞である連邦市民のために、各呼称を正規化し、わかりやすい呼称に呼び換えようとする運動である。これの施行に伴い、中華人民共和国は「第一地域」と呼び換えられ、また、北朝鮮が大韓民国を吸収する形で成立した大朝鮮民族主義高麗連邦は「第二地域」と変わった。
そして、日本国は「第三地域」と呼ばれることとなった。日本という呼称は、「無用にナショナリズムを高めてしまう」という、政府高官による弁もあった。国民は「市民」、大エイジア連邦加盟国の外国人は「地域外連邦市民」、連邦外の外国人は「連邦外市民」と変更される。「日本国民」は、第三地域に住む「市民」、つまり「第三市民」と改称された。
大エイジア連邦、民主博愛党、さらに政府の共存共栄委員会による国民の改造は、その後も絶え間なく続いた。呼称正規化が一通り完了した後、続いて「第三地域」において文字の改革が行われたのだ。「漢字仮名が入り混じった第三地域の文字は、他民族には読み

難い」という理由で、「ゆとり文字化運動」が始まった。「ゆとり文字化」とは、学習に時間がかかる漢字の利用を制限し、ひらがなとカタカナのみで単語や文章を書き表そうという運動であった。第三地域のありとあらゆる場所から漢字が消えていく。

さらには、沖縄・対馬特別法に従い、住民投票が強行された。その結果として、沖縄は沖縄省として第一地域に、対馬諸島は対馬道として第二地域に編入されることが決定した。戦後初の住民投票において、異邦人地方参政権付与法により新たに地方参政権を認められた地域外連邦市民が大いに活躍したのだった。

そしてついに、第一地域国家主席は宣言した。

「これより、我々はひとつだ。『大エイジア連邦』が、今ここに成った」

日本国民は、連邦の事実上の支配者である連邦主席という、たったひとりの独裁者を戴(いただ)くこととなった。

他民族による独裁という暗黒の日々が延々十数年も続き、多くの日本人が諦めかけていたころ、第一地域における北京派と上海派による権力争いが、これまでにないレベルでの暴走を始める。さらに、長年にわたり人民を苦しめていた環境汚染や格差拡大が限界に達したことで、シナ大陸全土が動乱の渦に巻き込まれていく。

それまでも、年間10万件を超える暴動が発生していた第一地域ではある。が、ここで暴動規模は拡大の一途を辿り、各地で100万人規模の暴動が多発するようになる。一般の人民同士が北京派と上海派に分かれ、互いに互いを殺し合う衝突が全土で頻発した。

混乱が拡大する中、北京派と上海派は、共に「人民を守る」というお題目を掲げ、自派の軍隊に敵対派閥の人民を襲撃させる事態に至る。暴動は「人民対人民」の構図から、「人民対軍隊」へと変貌を遂げ、死傷者数が爆発的に増えていった。

そして大暴動開始から数カ月後、とうとう、連邦主席に対する暗殺未遂事件が発生。天安門広場前の正陽門が、なんと主席の演説の最中に爆破されたのである。連邦主席は奇跡的に一命を取り留めたものの、随員が10名以上も死亡するに及んだ。しかし、世界中から取材に押し寄せていた各国のマスコミが、「連邦主席、暗殺さる」という誤報を流した。

独裁者死去の報せに応え、シナ大陸のみならず第三地域や第一地域台湾省においても、大規模な反第一地域デモ、反連邦デモが始まる。その直後、主席暗殺は誤報であると明らかになったが、各地に沸き起こった〝自由への熱〟が収まることはなかった。大エイジア連邦、崩壊のときが始まったのだ。

さて、もともと連邦主席は北京派に属していた。この暗殺未遂事件について北京派は声高に、「上海派が暴挙に及んだ」と糾弾し、対して上海派は、「上海派を貶めるために北

京派が仕組んだ自作自演である」と主張した。暗殺未遂事件は、両派の政治闘争を最終段階まで持ち込んだ。

暗殺未遂から2カ月の後、ついに上海派は支配下にあった南京軍区と広州軍区の実働部隊を動かし、第一地域は事実上の内戦状態に突入する。上海派は「上海福建連邦」の独立を、対抗する北京派は「華北共和国」の建国を宣言。内戦は数回の軍事衝突を経て、双方が互いの急所を握った形でこう着状態に陥る。散発的な地上戦が繰り返され、山東省南部で北京軍区と南京軍区の軍隊による睨(にら)み合いが続いた。

すでにこの時点で、連邦主席、つまり〝ビッグブラザー〟の権威は見る影もなく失墜(しっつい)していた。第三地域で「国家復興」の運動が拡大し、同時に、台湾省でも「民国回帰」運動が始まる。その他の地域においても、国家回復を求める市民運動が、次々に発生していく。

かつての日本国、つまり連邦政権下における第三地域でも、これまでの鬱積(うっせき)を爆発させるかのように、地域外市民に対する批判活動が始まった。身の危険を感じた第一市民、第二市民が、我先にと東京から逃げ出していく。そんな中、多くの第三地域市民がその目を疑う事態が起こった。これまで噂でしかなかった伝説の組織、大エイジア連邦に対する抵抗組織が、その存在を世に現したのだ。

名を、ライジング・サン、という。
「ライジング・サン」は、諜報員、情報工作員、武力戦闘員等を多数有す、超武装レジスタンスである。彼らはこれまで静かに培ってきた能力を、発散する瞬間を待っていたのだ。今がまさに、その好機だった。
ライジング・サンが民衆を煽り起こさせた大規模デモは、時間を経るごとに膨れあがり、やすやすと国会議事堂を包囲する。革命の火は燃え盛り、夜空をも焦がす。
「虚像の大エイジア連邦よ」
まばらな叫びは徐々に、大きなひとつの意志に統合されていく。
「我々の手に、日本を再び！」
革命を真正面に見下ろす民主博愛党の榛名良之助内閣総理大臣は、警察部隊にデモ鎮圧を命じる。が、再三の要請にもかかわらず、警察は動こうとしなかった。押し留める者もなければ当然、この熱く猛る人の流れは止まない。国会議事堂、議員会館、そして首相官邸までもが、デモに参加する一般の人々で埋め尽くされた。
首相官邸が包囲されたことを受け、極限状態まで追い込まれた榛名は、ついに自衛隊に治安出動を要請する。だが、待てども待てども、自衛隊からの反応はなかった。

暗夜の決壊。〝ニホンジン〟を苦しめた巨大な幻、大エイジア連邦が今、崩れようとしている。国会議事堂を取り囲んだ群衆は、かつての祖国の呼び名「日本」を叫び続ける。治安維持の名目で出動した自衛隊と警察は、戦車の上で、祝砲を交互に打ち鳴らしている。二度と来ないこの夜の、火の粉飛び散る巨炎を見つめる、ふたり。

進とみらいは、ライジング・サンの一員として、共に日本奪還のため戦ってきたのだ。

後に「自由革命」と呼ばれる、この政治動乱の牽引役を務めたのは、大エイジア連邦に対する抵抗勢力のひとつ、アメリカの全面的支援を受けた組織、ライジング・サン。

ライジング・サンはシナ大陸の混乱の機を逃さず、大規模ゼネストを組織した。さらに、一部の工作員が第一地域の構築した大規模フィルタリング・システム「イントラネット・グレイト・エイジア」を破壊し、自由な情報をインターネット上へ流通させることに成功した。ライジング・サンの呼びかけは主にネットを通じて拡散され、祖国を取り戻すべく数百万の日本人が動きはじめ、国会議事堂包囲にまでこぎつけたのだ。

東京駅のすべての改札が開け放たれ、膨大な数の人が絶え間なく吐き出されている。幾多のプラカードが掲げられ、「祖国を我らに」と書かれた巨大な横断幕を持った一団が道路を横切る。「日本」の名を叫び続ける若者が、躍るように跳ね続けている。

突如、その大騒乱の中に、激しい歓声が沸き起こった。
東京駅駅舎の真正面に建つ、レンガ造りの瀟洒な洋館。この洋館の2階のテラスに、ひとりの男が現れたのだ。数名の屈強な武装戦闘員に囲まれ、しかし一際異彩を放つ、長身の姿。ほかでもない、ライジング・サンのリーダー、〝GK〟である。
周囲から自然と、GKコールが沸き起こった。
「……GK！　GK！　GK！　……」
遠くに見え隠れするGKのしなやかな立ち姿に、進が感極まったように叫んだ。
「GK、なんて最高なんだ、あんたは！　……僕は彼についてきて正解だった、本当のカリスマだ！　男が惚れる男って、GKみたいな人のことなんだよ」
「確かにあれほどの人材、今後の日本の歴史にも二度と出てくることはないでしょうね」
武装組織の長でありながら、攻撃性の微塵もなく、あくまで紳士的な男。人々の声援に、丁寧に応え、両手を振り続けている。と、GKはいったん後ろを振り返り、部下から大きな箱を受けとると、再び群衆に向き合った。そして手にした箱から、何かを撒いた。それは、百合の花だった。芳しい香りを周囲に撒き散らす、大振りの花。その無数の白い花弁が東京駅前に舞い、ただでさえ熱狂する人々をさらに眩惑させた。
みらいはそんなGKの姿を見つめ、

「まさに寵児、神が私たちの時代に与えたもうた落とし子なのだわ」
と口にした。そこには、独特の熱い響きがあった。

ライジング・サンの本拠地は、東京駅前の日本産業クラブ内にある。もとは大企業の経営者たちが集うサロン的空間であったのが、日本産業クラブ自体、数年前からライジング・サンに接収されている。
ライジング・サンを指導するリーダーGKは、その本名を駒ヶ根覚人という。〝駒ヶ根〟は事業家であり、その敏腕ぶりから日本産業クラブの役員も務めていたほどだ。つまりGKは、レジスタンスの長と実業家というふたつの顔を、器用に使い分けてきたのだ。
GKの華々しいデビューを済ませ、昂揚感冷めやらぬまま、ライジング・サンの課報部東京本部メンバーは、本拠地内の課報室に集まっていた。
「俺、涙が出たよ。泣くことなんか、二度とないと思っていたのに」
「……俺も泣いた」
「これから、日本の快進撃が始まるんだな」
次々に控えめな喜びの台詞を口にするが、この十年来の彼らに染みついていた陰鬱な空気は、簡単に拭い去れはしない。互いにうわずった明るい言葉がけをし、自身が今直面し

ている景色が現実であると、確認しようというのか。
その不慣れな努力に水を差すように、PC(パソコン)のメール電子音が室内に鳴り響いた。みらいがソファに身を預けたまま、ごく薄いポータブルPCを取り出す。と、続いて、進の端末も同様の音を立てる。さらには順に他のメンバーのPCにも、アウトルックの着信音が鳴った。みらいが進を見つめ、皆一様に顔を見合わせた。
件名「caution」。不気味な時間が流れるが、しかしすぐに諜報部トップであるみらいが、件(くだん)のメールを開いた。
するとそこにあったのは、たった一行の英文だった。

The next big brother has no face.

「……今度の独裁者(ビッグブラザー)には顔がない?」
進が大きく声をあげた。
「何を言っているんだ? 独裁者はもう、消えたじゃないか。今日のような輝かしい日

に、なぜこんな水を差すようなことをするんだ!?」
「進、いきり立つほどのことでもないわ」
明らかに怒りを滲ませながら言葉を並べ立てた進を、みらいが制した。ライジング・サン課報部サブ・リーダである恵那も、みらいに続いて静かに口を開く。
「それに注目すべきは内容よりも、俺たち全員の連絡先を知っている人物からのいっせい送信、という点だ」
恵那に応え、課報部メンバーである乗鞍がすぐさま続けた。
「メンバーによる行為か、もしくは外部に個人情報が漏れているかの、どちらかということですよね」
みらいに倣い文面を確認し終わった面々は、これまでの陰惨の時代とまったく変わらぬ暗い雰囲気に戻り、黙りこくった。進はといえば、釈然とせず、しかしその苛立ちをぶつける対象も考えつかず、やはり黙るしかなかった。
すると、ポータブルPCを再び開き、画面に見入っていたみらいが、驚いたように声をあげた。
「GKから指示が出てる、いますぐに執務室に向かわなければ……進、随行してくれるかしら。こんなときにひとりで行動するのは避けたいもの。あなたたちもそう思うでしょ

う？」
　諜報部室内の面々を見渡したみらいだったが、メンバーは返答に窮したのか、一様に沈黙した。皆の戸惑った視線を受けた恵那は、数秒の思案の後に、肯いた。みらいは素早くソファから立ち上がり、進についてくるように促す。刺さるような視線を背に受けたまま諜報室を後にしたふたりは、靴音が大きく響く石の廊下を進み、続いてこちらも石の螺旋階段を、無言で上りはじめた。
　瀟洒なレンガ造りの洋館には、広いテラスが多数つくりつけられている。先ほどGKが〝降臨〟したのとはまた別のテラスに、進とみらいは連れ立って出た。秋の冷たい夜気が肌に迫り、眼下にはいまだ蠢く群衆の姿がある。
「これが、私たちがこれから生きていく世界よ、進。革命を成し遂げたことで、これまでの敵は消えた。しかしすべての害悪が消えたわけではない。今後も様々な障害が目の前に現れる……もしかしたら、ただ戦う相手が変わった、というだけのことかもしれないわ。おそらく今後の私たちは、目の前に現れるすべての人を敵か味方か疑い、常に神経を尖らせて生きていくことになる」
　みらいは、ここで声の調子を落とした。
「日は確かに上った、でもまだ見えないものが多すぎるわ」

みらいに応える言葉を見出せず、進の視線は虚空を彷徨った。
「みらい、ＧＫの執務室に行くんじゃなかったのか？」
「……」
みらいは答えず、進を真正面から見つめた。明らかな居心地の悪さを感じ、進は視線を逸らす。
するとは誰が打ち上げたのか、花火が空に輝きはじめた。色とりどりの大輪の花を咲かせ、周囲に爆音が響く。それに加え、群衆の中から爆竹の音すら轟いた。進は耳を塞ぎながら、暫くその音をやり過ごそうとした。
小玉が連続して上がった後、一際巨大な音が周囲に響き渡った。音の主である三尺玉の火の粉が辺りに注ぎ落ちる中、小休止に入ったのか、爆音は収まった。その隙を待っていた進は、口を開いた。
「聞いていいかい、みらい。なぜ君まで悲観的なことを言うんだ？　夢にまで見たこの夜に。僕ら、この日のためにずっと戦ってきたんじゃないか」
大いに迷った末、進はみらいの両の手を取った。
「もうここ何年も、僕は、君の本当の笑顔を一度でいいから見てみたいと思って、戦ってきたんだ」

「……そう、こんな話、今日のところは確かに野暮だわ。でもね、これだけは言っておきたいの」

みらいは静かに進の手をほどき、群衆を見遣った。と、思い直したのか、今度は自発的に進のほうへ手を伸ばした。初めは進の首筋に軽く触れ、そのまま細い手指を滑らせ、顎を撫で伝い、頬まで辿り着く。進の心臓が大きな音を立てる。

「私は最後まで必ず、あなたの味方よ、進。これから世界に何が起ころうとも、私があなたを見捨てることは決してない」

そのとき、背後に物音が響いた。咄嗟に後方を振り返った進は、その胡乱の音の元へ走り出す。が、彼が標的に辿り着く直前に、鋭い銃声が辺りに響いた。視線を落とせば足元にはすでに、浮浪者のような風貌の中年男が倒れている。

進は驚きを隠せず、ただぼんやりと、男の薄汚い背に鮮血がじわりと拡がりゆく様を見つめた。するとその血染めの体軀を踏みつける、美しい脚があった。みらいの、折れそうに細い、白い脚。男の身体を蹴って転がし、器用に仰向かせる。

みらいの手に持つ短銃から硝煙が上がっている。彼女の濡れた唇が進を再度捉え、先ほどの言葉の続きを紡ぐ。

「覚えておいて」

第二章

救世主ＧＫの立った日

「自由革命記念日」。
これは、日本の誇る悠久の歴史において初めて完全なる革命が成立したことを祝し制定された、国民の記念日だ。毎年巡りくるこの喜ばしき日に、人々は革命の覇者、GKの名を誇らしげに口にする。GK、あなたはまさに救世主、と。

あの革命の日、東京に多くの血が流れたのは記憶に新しい。
撃ちて止まむ、とばかりに、デモ隊は国会議事堂に突入した。その様子はまさに、巨浪だった。デモ参加者も傍観者も一様に、まるで熱病に侵されたかのように、その大きなうねりを見つめ、あるいは身を任せた。押し留めることができない歴史の流れ、というものが確かに存在するのだと、人々はその重みに震えた。
彼らが求めていたものは、贖罪にほかならない。暗黒の歴史を創り出した犯人に、自らの罪を認めさせ、償わせるのだ。人類を永らく見守る〝歴史の神〟もきっと、それをこそ求めている。巨浪は国会議事堂の正門を突破し、広大な前庭を駆け抜け、中央玄関から議事堂内になだれ込んだ。堅牢な門戸を、荒ぶる波は何の躊躇いもなく呑み込む。
贖罪を求められた民主博愛党議員の多くは、しかしすでに、近い将来に訪れるであろう陰惨な運命に脅え、日本各地に散っていた。革命の火燃え盛る東京からできるだけ離れ、

わずかでもいい、自身が被る不幸の度合いが減るならば、と。
　東京駅周辺から日比谷、霞が関、永田町と、かつてまさに日本の中心だった街は、熱に浮かされた群衆で埋め尽くされていた。人々は怒り、同時に笑い、感情は昂りを増し続ける。
　逃げ遅れた与党議員の中には、一般人に成りすまし、群衆の波をかいくぐり首都を抜け出そうとする者も出てくる。しかしひとたび黒塗りの大型車で永田町近辺を走れば、すぐさま人の壁にとり囲まれるのだ。
「絶対に停まるな！　どかない奴は、ひき殺せ！」
　叫ぶ議員の声が響くが、ひるんだ運転手は思わず停車してしまう。途端、人々は暴徒と化した。車体にバットが次々に振り下ろされ、窓ガラスも割り尽くされれば、もはや鍵など用をなさない。顔面蒼白になった小太りの男が、後部座席から引きずりおろされる。
「おお、こいつ、テレビで見たことあるわ」
「売国奴だろ！」
　先頭に立った若者が、笑い声をあげた。その後、中年男性の粘るような呻き声が聞こえ、周辺には血飛沫が跳んだ。
　あの日の東京が大量の血に染まったのは、間違いだったのか。それとも崇高な目的の前

には、どのような残虐行為もあくまで正しかったのか。ただ脳裏には興奮のシュプレヒコールが、まざまざと蘇(よみがえ)る。同時に、決して消えない〝赤〟色も。

「ニホン」

「にほん」

「日本」

練り歩く人の発する声は共鳴し、東京の夜空に乱反射した。都心からいくぶん離れた下町においても、人々はその喧騒(けんそう)を耳にし、多くは喜びに打ち震えた。しかし中には、庭に掘ってあった手製の防空壕に逃げ込み、夜を明かした者もあった。

思えば、日本を覆(おお)っていた暗鬱(あんうつ)の曇天の期間が、あまりに長すぎたのだ。件(くだん)の暗黒時代に祖国の誇りを取りあげられ、第三市民という蔑称(べっしょう)に甘んじていた日本人が、古来の美徳であった穏やかさを失っていたとしても致し方あるまい。

国会議事堂の包囲を皮切りに始まった自由革命は、その終息まで実に5カ月の月日を要した。この期間、これまで革命を経験してきた幾多の他国の歴史同様に、日本も無法地帯となったのだ。第一市民、第二市民も大いに脅えた。命さえ残ればよいと、彼らは全財産を放り出してまで母国へ逃げ帰った。

自由革命は、議事堂包囲の翌日にはすでにそのクライマックスを迎えていたのだ。アメリカの一部エスタブリッシュメントからの多大なる支援を受け、自由革命を初期段階から主導していたライジング・サン。そして、そのレジスタンス・グループのリーダーであった通称ＧＫ。つまりは駒ヶ根覚人という男が、新たに立ち上げた政党、「新党自由日本」の党首として、国会議事堂に軽やかに舞い降りた。

見上げるような長身、穏やかな目、他者を広く受け入れる優しげな風貌。まさに誠実そのものの雰囲気を身にまとう駒ヶ根だ。凡人にはあり得ない高いカリスマ性を誇り、その立ち姿だけで多くの人を惹（ひ）きつける。

新党自由日本所属の議員候補やライジング・サンの戦闘員らを多数引き連れ、駒ヶ根は議事堂内の廊下を進んだ。国会議事堂は大エイジア連邦時代に建て直され、以前の古風なレンガ造りの議事堂とは似ても似つかぬものに生まれ変わっている。コンクリ打ちっぱなしの壁ばかりが目立つ、無味無臭の近代的デザインのビルである。やはりコンクリむき出しの階段を上るたびに、一団は大きな靴音を周囲に響かせ、本会議場へ向かった。

広さだけは昔と変わらぬ本会議場は、すでに一般群衆で埋め尽くされていた。様々の年齢、服装。てんでバラバラの人々が、ひとつの目的のためにこそ集まっている。議会において圧倒的多数を占めていた民主博愛党議員らは、今日の議場にはまるで姿が見当たらな

い。屋外からは変わらずシュプレヒコールと雑音とが聞こえてくるが、場内の群衆は不気味に静まり返っている。

本会議場の演壇の上に、凛々しい立ち姿が映える。駒ヶ根は、いやGKは、静かに目の前の同志らを見つめる。

「……我々は、日本人だ」

やっとのことでGKは、その重い口を開いた。穏やかなバリトンの声。あまりに静かな声音に、拍子抜けする者も出るほどに。

ライジング・サンの情報工作部の手配により、ここ現場の状況はネットを通じて全国にリアルタイムで届けられていた。GKの第一声が響くと、デモを続けていた民衆も立ち止まり、各街頭やビルの壁面に設置されたスクリーンに目をやった。これらスクリーンは、大エイジア連邦時代に、市民へ定期的な洗脳を行うために設置されていたものだ。自らの治世の安定のための装置が、自らを断頭台へ誘うのだ。

駒ヶ根は顔を上げた。雄々しい力強さとともに、再び口を開く。

「同志よ、日本人としての誇りを取り戻そう！　我々の手に、真の自由を取り戻そうではないか！　日本国民を屈辱の第三市民と蔑んでいた、魔の大エイジア連邦は終わったのだ、今、我々の眼前で、確かに！」

全国津々浦々、日本国民の住むところすべてに、人々の歓声があがった。さらに声の調子を強く変え、ＧＫは続ける。

「悪魔の連邦は、本日以降、存在しない。我々は祖国を取り戻したのだ。異郷の支配から脱し、自由を取り戻した……わたくしは名づけよう、これは〝自由革命〟である！　今日、この日を、自由革命記念日とわたくしは呼ぶ！」

両手を広げて叫ぶＧＫの姿が、画面にさらに大写しになった。

「唱和せよ、万歳と！　天皇陛下、万歳！　自由なる我々の祖国、日本よ、万歳！」

指導者に倣い、多くの人が万歳を叫んだ。歓喜の歌が日本の空に響き渡り、ここに革命は成就した。日本国において史上初めて成功した革命、後に言うところの「自由革命」である。

壇上のＧＫの周囲を固めるのは、新党自由日本やライジング・サンの身内ばかりではない。国内最大野党である憲政党の幹部もまた、感動と恐怖とに綯い交ぜとなりながら、議事堂に集結した群衆の熱狂を見つめていた。

脇に立ち演説を見守っていた初老の男が涙ぐみ、ＧＫの肩に手をやった。憲政党総裁の空木豊作である。通常であれば柔和な笑みを絶やすことのないベテラン政治家が、普段の顔を崩し、感極まった様を露わにしている。画面を見つめる中高年の人々も、空木の様

子に、さらにこの革命の意義を思った。どこの馬の骨ともわからぬと、〝ＧＫ〟という男に明確に悪印象を抱いていた世代も、空木の涙には心を動かさざるを得なかった。

　空木の後方には、かつては憲政党所属の衆議院議員であった、西崎亨の姿が見え隠れし、ここで多くの日本人は画面にかぶりつきとなった。愛国心の強い政治家として著名な西崎であったが、それゆえ、これまで幾度も暗殺死の噂があがっていたのだ。西崎が公衆の面前に姿を現すのは、実に10年ぶりのことである。ＧＫの斜め後方に見える西崎にはしたたか苦労の跡が感じられ、以前は碧いまでの黒髪の持ち主であったのが白髪が増え、いまや銀髪にしか見えないほどだ。それでも眼光は昔と変わらず鋭く、彼の持つ不屈の精神が滲んでいる。

　人々が西崎の一挙手一投足に視線を注ぐ中、画面の端に、変化が起きた。屈強な若者ふたりが、中年のスーツ姿の男を壇上へ引きずり上げたのだ。大エイジア連邦第三地域内閣総理大臣、榛名良之助である。スリーピースから鎖がぶら下がり、金の懐中時計が揺れている。文字盤には貴石があしらわれているのか、遠くから見つめる人にも、その煌めきがいやに目立った。

　榛名はＧＫから押しつけられた詔書を捧げ、議長席に向かった。簡素な椅子と机のみ設置された議長席に座るのは、衆議院議長、那須尚志。

極度に脅える榛名から書類を受け取った那須は、こちらは恐怖心を露わにしてはいなかった。が、それでも宣する声は、ビブラートがかかったように大きく震えている。
「ただ今、議長の下に詔書が届けられました。日本国憲法第七条に基づき、衆議院を解散します」
「……万歳！」
榛名はひとり全力で叫び、両手を上げた。しかし当然のごとく、本会議場を埋め尽くした群衆も、新党自由日本や憲政党の政治家も、誰ひとり唱和しなかった。ただただ、男の哀れな末路を見つめた。水を打ったような議場の静けさに気づくと、榛名は慌てて両手をおろし、大きく項垂れた。
那須による衆議院解散宣言を受け、翌日、〝日本国〟に総選挙が公示された。
日本国はまこと久方ぶりの選挙の季節に突入した。憲政党は総選挙の公示当日、新党自由日本との全面的な選挙協力を決定。すべての小選挙区に両党の候補者が立った。
衆議院が解散され、状況がやや落ち着いたと勘違いしたのか、浅はかな民主博愛党議員らが東京に戻りはじめた。しかし古来の日本人の美徳はまったく発揮されず、旧与党所属の議員は物理的暴力の対象になった。選挙一色に染まった列島において、彼らは総選挙に

立候補するどころか、街を歩くだけでも人々から罵声(ばせい)を浴びるほどだった。卵を投げつけられるくらいのことは日常茶飯事だった。それどころか各所の交番には、元議員らの捜索願いが、壁に所狭しと貼られるのが日常になっていた。彼らの身体はどこに消えたのかと、若者は時に口にした。

対して旧野党側、とりわけ新党自由日本の候補者らの演説には、熱に浮かされた群衆が集まり、声援を浴びせ続けた。とくに、選挙戦最終日。渋谷駅前におけるＧＫの街頭演説では、ハチ公前の広場からスクランブル交差点までをぎっしりと人が埋め尽くし、彼らはこぞって大歓声をあげた。日本の誇り〝ＧＫ〟の生の声を聞こうと、集う人の声は渋谷駅前にいつまでも響いたのだ。むろんＧＫは、その支援者の声に丁寧(ていねい)に応えた。

勝者のわかりきった総選挙は、しかし粛々(しゆくしゆく)と行われ、当然の結果として、新党自由日本は友党の憲政党と合わせ、３２０議席という圧倒的な多数を確保する。そしてこれも当然の帰結として、ＧＫが内閣総理大臣に選ばれた。まさに、新時代の幕開けだった。多くの国民の頬は感動の涙に濡れたが、我らの愛すべき指導者ＧＫ、あなたにはあくまで笑顔が似合う。

駒ヶ根内閣は組閣後に開かれた臨時国会において、博愛精神遵守法、異邦人地方参政権

付与法、改正上級公務員法、環境保護新法など、日本の国柄を破壊した数々の悪法の破棄を宣言。十分な議論もないままに採決が行われ、これら闇の時代を象徴する法律群は即時の廃止が決まる。

さらに、駒ヶ根内閣は数々の法案を議会に通す。日本国旧呼称復活法、ゆとり文字法廃止、公職からの第一・第二市民の追放、国旗・国歌法制定、さらに自衛隊を解体し、「新自由国軍」設立を閣議決定。立て続けに保守的な政策を打ち出し、実際に法律改正に邁進する駒ヶ根内閣は、国民からの圧倒的支持を日々強固にし続けた。

さらに駒ヶ根内閣は、支持率97%という高支持率を得ると同時に、新党自由日本への他党所属参議院議員の引き抜きを始める。連邦隷属（れいぞく）の時代にあっても決して小さくない勢力を保持していた憲政党との協力体制を鮮明にし、両党合わせて、参院議席の実に9割を獲得するにまで至る。

そして、運命の3月1日。衆議院は「首相公選制」と「参院廃止」の憲法改正動議を可決する。その翌日には参議院においても、これらふたつの憲法改正が決議された。

参議院議員は自ら無職になる道を選んだことになる。かような事態がなぜすんなりと進んだのかといえば、当時は誰も「自由化」の美辞に逆らうことができなかったがゆえだ。参議院議員本人が、参院廃止の憲法改正決議に反対姿勢を示すことがどうしてもできな

い。それほどに〝自由〟とは美しく、抗い難い言葉だった。
むろん、すべての者が諸手を上げて賛成したのではない。与党の一角をなす憲政党内においても、一部の参議院議員らが参院廃止の憲法改正に反対する姿勢を見せた。しかしGKは、造反予備軍の議員ら相手に、こう訴えたのだ。
「衆議院と参議院とのねじれ状況がいつでも発生しうる環境、その脆弱で不安定な環境こそが、政治を無力化し、連邦加盟などという民族的不幸を招いたのです。権力は可能なかぎり集中させ盤石と成し、かつ国民がそれを直接選べるようにしなければ、真の自由なる国家は実現できません。……先生、そうは思われませんか？　あなたは、良心を持ち合わせてはいらっしゃらないのですか？　あなたは、わたくしたちの国〝日本〟を、愛してはいないのですか？」
こう問われれば、最後まで踏ん張った反対派も黙るしかなかった。
GKの言葉はある意味、麻薬だった。いまだ大エイジア連邦の悪夢に苦しむ日本人の多くが、彼のレトリックに熱狂した。国会議事堂を囲むように、多くの国民がデモを行った。数百万にものぼる人々が連日のように、首相官邸から国会議事堂、霞が関までの街路を隙間なく埋め尽くした。彼らは、指導者GKに加勢しようという思いはもちろんのこと、「真の自由を国民の手で成し遂げたい」と願うからこそ、永田町に集結したのだ。他力

本願に生きることを恥とし、喉が潰れるまで声を張りあげ、力のかぎりに日の丸を振り続けた。

あまりに膨大な、参院廃止を求める声、声、声。そのうち、ひとりの参議院議員、黒部伍郎の遺体が議事堂前広場で発見された。訃報が永田町を駆け巡った直後、日本国の国会議員らは全員が、参院廃止の意向に流れることとなる。

その夜、亡くなった議員の通夜がしめやかに執り行われた。白黒の幕の内に姿を現したGKに、ネット中継をしようとライジング・サンの情報工作部やそれ以外にも支援者の多くが、カメラを向けた。しかし人々はほぼ同時に、我を忘れてGKを見つめることとなる。

……なんとGKは、その両の目を真っ赤に腫れさせていたのだ。GKに心酔する若者も、またあまりに早急にやり過ぎるとGKに苦言を呈しはじめていた老年世代の者も、一様に息を呑んだ。

「まず、お亡くなりになった黒部先生に、心より哀悼の意を捧げたく存じます。……皆さん、わたくしは確かに、愛する日本国の再生のために、強行突破と無謀とを繰り返してきたかもしれない。しかしだからといって、犠牲が生まれて良いと思ったことは、ただの一度もないのだ！　わたくしは悔しい……人は、人は、その命は尊いのだ！」

GKの両眼から、大粒の涙が溢れた。

「国民の皆さん、本当にこの死は必要だったのか？　そうではないだろう、黒部先生にも、長年連れ添った奥方、ご子息夫妻、さらには三人のお孫さんまでいらしたのだ……今日の悲しみは、彼らだけのものではない、わたくしたち日本人すべての悲しみでもあるのだ！　そう、そうではないか!?」

永田町から霞が関に集っていた猛る若者らも、国旗を静かに下げ、その場に座り込み、あるいは立ちすくんだ。ネット中継を見る人も、そのほとんどが、掲げていた拳をおろした。列島からあまねく熱狂が取り去られ、島は一瞬間のうちに火が消えたように静かになった。まさに、すべての国民が、沈黙した。

「……心ある国民の皆さん。わたくしとともに、黙とうを捧げよう」

大衆は指導者に倣い、完全なる静寂が日本を覆った。わずか1分間にすぎなかった黙とうだったが、多くの国民には数十分にも感じられるほどの。

ＧＫは再び目を開き、カメラを一つひとつ丁寧に見遣った。すべての国民が、ＧＫと視線が確かに合った、と感じた。まるで神聖な一陣の風が上空を吹き抜け、日本国の積年の汚れをすべて拭い去っていったかのようにも、人々には感じられた。

黙とうの余韻も止むとＧＫは、今度はこれまでとは打って変わったように、雄々しい声を発す。

「さて参議院の廃止が可決されようとしている。黒部先生と同様に、自己犠牲に徹した参議院議員の先生方。先生方にわたくしは申し上げたい。先生方は、自由を実現した英雄として、必ずや後世に語り継がれる。わたくしの愚眼には、その栄光の未来が見える、見えるのです！」

GKは賛成に寝返った者を称賛する言葉を重ね続けた。議員らも、それに握手と笑顔と、そして咽（むせ）ぶ涙とで応えた。

感動的、ともいえるシーンの連続。結果、国会議事堂に集った参議院議員たちは、昂揚した気分と焦点の定まらない目とで、自らの失職のための憲法改正案を可決する。そのわずか2カ月後には国民投票が実施され、史上初の本格的な憲法改正と言われた「首相公選制」「参院廃止」が断行される。国会の内閣不信任決議は廃止され、総理大臣には拒否権が与えられた。これら二法案の施行により、首相というひとりの人間の権力は、およそ3倍程度にまで高まることとなる。が、そんなことは多くの国民にとってどうでも良いことだった。

その後も駒ヶ根内閣及び新党自由日本は、立て続けに、「経済自由化」なる政策群を推し進めていく。「経済自由化」とは、つまり、新古典派経済学の理論に基づきGKにより進められた、経済政策の総称である。

〝経済自由化改革〟を進めるにあたり、ＧＫは再度、国民に向けて大演説をぶった。
「非効率にならざるを得ない政府の機能は、可能なかぎり縮小する。これはデータに基づいて理論的に考えるならば、至極当然のことではないでしょうか？
そこでわたくしはまず、自ら血を流す意味において、国会議員の定数を大幅に削ることをここに宣言したい。具体的には、参院廃止に成功したことに続き、衆院定数も削減する。社会保障や公共事業などに代表される、税金の無駄遣いを削る。これらの政策を、スピーディに行っていきたい。
国民に痛みを与えるというのなら、まず先んじて、国と政治家と官僚が身を切らねばならない。わたくしは、皆で平等に痛みを分かち合いたいのです……どうだろう、国民の皆さん。わたくしとともに、素晴らしい新世界をつくるための、有志の一団となってはくれないだろうか」
ＧＫの演説が絶大なる効果をもたらすのは、誰の目にも明らかだった。
「政府の無駄を排そう、未来の日本国民のために」という美しいことこの上ない文句。この美辞の下で、衆議院の定数削減、さらに大選挙区制が実現される。衆議院の定数を３００にまで縮小し、選挙区については小選挙区が廃止され、全国区のみとなる。
人口比例選挙が実現することで、すべての国民は、価値が同じ一票を持つことになっ

た。いわゆる〝一票の格差〟が消滅したのだ。国民はGKの革命的な選挙改革を褒め称え、国内大手紙はこぞって、「一票の格差が解消され、国民一人ひとりが同じ権利を持つことになった我らが日本国こそが、全世界において最も民主主義の理想を実現させた、真に自由なる国家である」と、駒ヶ根内閣を褒めそやす社説を掲載した。

GKへの絶賛の嵐の中、駒ヶ根政権は、選挙改革と同時に「道州制」を導入するとも宣言する。

「地元の意見を国会議員が吸いあげるという、悪しき慣例は、もうそろそろ止めるべき頃合いではないでしょうか。日本国はいまや、世界で最も自由と独立が進み、真の覇権国としてその歩を進めつつあるのです。以前までの旧態に留まっている必要はもはやない。国会議員は、国家のために仕事をするからこそ、〝国〟会議員と呼ばれる。今となっては、国と道州は切り離されてしかるべきではないでしょうか。

国民の皆さん。皆さんは、地元を愛しているでしょう？　ご自身の生まれ育ち、感性や能力を育んでくれた故郷こそが、愛すべき土地であるでしょう。それは人間にとって、非常に大事な感覚です。失ってはならない、ルーツを守るための本能の叫び……。

各道州は独立採算を徹底し、地域の意見を域内で集約し、その地域のための事業を行う。これこそ、先進の叡智と自身のルーツの重要性の、まさに融合であると、わたくしは

考えています。日本を守るという、信念によってこそ」

喝采（かっさい）のうちに閉幕した演説の後、駒ヶ根内閣はすぐさま道州制基本法を制定した。

駒ヶ根政権は太平洋連合（Pacific Union）、略してＰＵと呼ばれる、環太平洋地域の自由貿易協定への率先参加や、道州制の導入、負の所得税制度の導入など、新古典派経済学の理論に則（そく）した施策を次々に打ち出していく。

日本国民は、連邦から解放された歓喜に咽（むせ）ぶと同時に、社会の激変によるショックを大いに受けていたのだ。だからこそ、このショックを活用し、国の構造を抜本的に改革し、日本を世界一の国家に成さなければならない。今がその最大にして最後の好機だと、ＧＫは気づいていた。

「それこそが〝自由〟、人間の真に自然な姿なのだ。愛する日本を、絶対の理想郷に仕上げる。俺の夢も、やっとここまで来たということか……」

このときのＧＫの恍惚（こうこつ）たる台詞（せりふ）と表情とを、私は今でも鮮明に覚えている。

経済自由化の美名の下で、電力完全自由化、公務員自由化、自由賃金制度、自由雇用基準法、公共事業コンセッション方式、学校教育自由化、自由診療拡大、自由医療制、自由農地制など、様々の政策が推し進められた。

つつがなく、５年の歳月は経過した。
「以上が、革命以降の日本国が歩んできた歴史です。救世主であるＧＫが推進した数々の政策は、我が国に大きな革新をもたらしました」
色鮮やかなツートンに染めあげられた旭日旗をバックに、女性教師はほがらかに続ける。
「自由こそ人間の自然な営みであるにもかかわらず、哀れにも日本人はその宝を奪われてきました。日本は長らく、不自然に生きてきたのです。しかしＧＫによって、まさにライジング・サンのときが、日本国に訪れました」
ここは国立帝都大学に付属する小学校の、第一学年のクラス内である。美しく整えられた教室には、所属する数十人の児童のために、人数分の机と椅子が並んでいる。机の上には人数分の大判ＰＣが設置され、画面上には写真やグラフ、年表などがスライドショーで繰り返し流される。
しかし児童らは必ずしも着席しているわけではない。窓枠に腰かけて校庭を眺めている者もあれば、床に寝そべり絵を描く者もいる。絵を描くといっても、クレパスや絵の具を使うのではない。薄型ポータブルＰＣには高性能ペイント・ソフトが標準装備されている

ため、絵筆でカンヴァスに描くのとほぼ同等の絵が、デジタルでも描けるのだ。この時代にわざわざ、よけいな手間を必要とする旧態然とした作品制作が行われることはない。

「皆さんは真に自由な時代に生まれたことに感謝すると良いでしょう。ただ、この感謝についても、他から強要されるべきではありません。皆さんは〝自由〟なのですから。……それでは、今日の授業を終わります」

ターコイズ・ブルーのワンピースを軽やかに翻し、教師は教室を後にした。彼女の背中に、児童の一部から声がかかった。

「See you, Ayako」

菓子を片手に、女児が明るい声で挨拶をしたのだ。噛み砕いた菓子の残骸が口中に大きく覗く。

帝都大付属小学校では、混血児童に対して広く門戸を開いている。各児童の持つ色とりどりの髪色、肌色がそれぞれに自己主張しているため、教室内は一見して華やかだ。加えて学校制服も完全廃止されて久しく、児童の多くは低価格かつ高品質の海外大量生産メーカーの服にその身を包み、それらはたいていが鮮やかな色合いである。校内公用語は英語であるが、耳に入る言葉はほとんどがスラング。

しかし、彼らは確かに日本人なのだと、私は知っている。

第三章

自由を守る者

空を見上げていると、広い青色のうちに白雲がゆったりと流れくる。それは太古の日本と寸分違わぬ景色なのだろうと、進は思う。〝変わらないもの〟も確かにあるのだ。自分の置かれている境遇は様変わりしたが、持てるひとつの悩みは永遠に変わらないように。

「秋川。今日も停電だ」

靴底を引きずりながら歩く進に、声をかける男がいる。同期の高尾だ。通路脇のベンチに腰かけ、進に向かい煙草の箱を差し出してきた。彼の咥える煙草から灰が落ち、足元には吸い殻の山ができている。進は1本貰うと、やはりやる気なさげに斜めに咥え、火を点けた。煙が二筋、並んで立ちのぼる。

かれこれ4年以上もの間、休むことなく推進され続けている経済自由化政策は、日本社会に少なからぬ影響を及ぼした。繰り返し電波に乗って振り撒かれる「あらゆる分野に聖域なき自由化を」という訴えは、いつしか社会全体に、「自由化に反する者は、日本の敵」というイメージを浸透させた。進の現在の生活に直結する〝公務員自由化〟についても、ごく自然な流れのひとつとして実現された。

公務員の自由化。役所の行政業務、電力サーヴィスに代表される公益事業のみならず、防衛や警察、消防といった、国民の安全保障にかかわる分野においてまで、民間企業が自由に参入することを可能としたものである。

かつてはライジング・サン構成員のひとりであり、かの悪名高きフィルタリング・システム、「イントラネット・グレイト・エイジア」破壊テロに挑んだ、それほどの過去を持つ青年、秋川進は、昨年の春より国土交通省の一部署に職を得ていた。ライジング・サンあるいは新党自由日本から指令を受け、その業務の一環として送り込まれたのではない。単に公務員選抜試験に合格したのである。しかし進が入省して半年も経ったころ、“公務員自由化”推進に繋がる各種法案が国会にて可決された。

日本の輝かしい夜明けであった自由革命から、はや5年の歳月が過ぎようとしている。自身の青春のすべてを捧げたライジング・サンも、組織解体されて久しい。一般人として普通の生活に戻った今、あの戦々恐々たる日々ははるか遠く、まるで夢だったかのように朧だ。

進は立ち上がり煙草を踏み消すと、まだ灰を落とし続けている高尾を残し、国交省の正面玄関をくぐった。セキュリティ・チェック機器の液晶画面に、「error」と表示が出ている。高尾の言のとおり、省内は停電しているようだ。

「……セキュリティも何も、あったもんじゃないな」

現在、国内の送電環境は常に不安定だ。

一連の経済自由化政策会議において、真っ先に白羽の矢が立ったのが、日本の電力サー

ヴィスだった。これまで電力会社という括りの中にあった業務を、発電部門、送電部門、配電部門と三分割し、それら一つひとつを株式会社とした。株式会社であるため当然、PU加盟国であれば外国企業からの投資も可能である。結果的に、国内の電力事業を地域ごとに担っていた9つの電力会社は、30以上の株式会社に分割された。むろん、電力会社はもともと株式会社だったのだが、言うなれば、より〝自由化が進んだ〟のだ。

　電力自由化政策において負の影響の大きかったものとして、送電会社からユニヴァーサル・サーヴィスの義務が削除されてしまった点が挙げられる。ユニヴァーサル・サーヴィスとは、「全国どの地域にあっても、消費者が望む場合は必ず、安定した電力を適正価格で提供する」という義務である。ユニヴァーサル・サーヴィスの義務が外された結果、各地域の送電株式会社は利益追求のために、さらに言えば「株主利益の最大化」のために、送電網を整備、運営、管理するようになった。利益や配当金を増やすには、コストを削ることが手っ取り早い。結果、日本は停電が頻発するのが当たり前の国となった。

　それでもまだ、都市部は良い。たとえば進の住む東京であれば、日中のビジネスアワーの半分以上の時間帯において、電力供給が保障されているのだ。今朝は確かに省内は完全に停電しているが、あと数時間もすれば復旧し、その後3～4時間は仕事を進められる。

　日本の中枢機関が集う霞が関でさえ、停電との共存が当然の昨今だ。世界最高峰の電力

環境を誇った過去は遠く、いまやPU加盟国ワーストの座を他の加盟国と争うほど。

ある時期から送電株式会社は、僻地への電力供給を渋るようになった。人口が少ない地域へ電力を供給しても、コストを賄えないからである。さすがに人道的な観点から、「コスト割れしている地方への電力供給を断つ」という発表はなされなかったが、しかし、送電網の整備は疎かになったのだろう。結果、首都圏外の地方においては、通電される時間よりも、停電の時間のほうが多くなった。昼夜問わず電力供給が不安定となった僻地は、さらなる人口減に見舞われている。

このような状況を憂える声は多いはずだった。しかし、GK。現在の日本国の礎を築き、民を率いてきたカリスマである駒ヶ根首相はこう言った。

「僻地の人口減少は、市場競争の結果である。市場が、その地域に人は住むべきではないと、我々日本国民に教えているのだ」

GKがそう言えば、懸念を口にしかけた人々も一様に口を噤んだ。

かつての上司GKのこの発言を聞いたとき、進は大いに愕然とした。いったいGKは、何を言っているのか？　GKの欲しかったものとは、強靭で豊かな、古き伝統を愛する日本国ではなかったか？

……ライジング・サンに身を置いた日々、僕は日本のために戦った。しかしそれだけで

はない、自分は、指導者がＧＫだったからこそ、彼の理想の成就のためにこそ、戦ったのだ。あのころのＧＫは熱く、まさにカリスマで、ある意味〝完璧〟な男だった。それが今は……。

先ごろも、嫌な事例を見たばかりだ。

電力自由化により国内に発電会社が乱立した結果、発電サーヴィスの競争も激化の一途を辿った。各社が猛烈にコストカットを繰り返した。先日はとうとう、価格競争に耐えきれなくなった発電会社のひとつが派手に倒産するまでに至った。この突然の倒産を受け、一部の送電会社において、電力確保が不可能となる事態が発生する。結果として、東日本の広い範囲で電力供給が止まった。しかし発電部門を持たない送電会社には、為す術はなかった。

しかし昨年のことを思い起こしてみると、当時はエネルギーのコスト上昇を受け、発電会社が発電サーヴィス料を引き上げるという事態も起きていたのだ。中東の戦乱により天然ガスの輸入が止まり、発電会社はサーヴィス・フィーに転嫁せざるを得なかった。発電会社の値上げに伴い、送電会社も消費者価格を吊り上げる。当然ながら家庭も企業も、あらゆるサーヴィス受給者が、突然のコスト上昇に動転する。

事態を重く見た日本の中枢道州のひとつである東海州の政府は、送電会社、配電会社に

料金の抑制を迫る条例を定める。ところが、東海州政府は電力の小売価格は条例で低く抑え込んだものの、発電事業については手を付けなかった。発電コスト上昇の逆ザヤを吸収しきれなかった、東海州の送電会社「中部送電株式会社」は採算割れに追い込まれ、倒産寸前の状況に陥った。

結果、電力供給の不安定化を懸念した東海州内の大企業らは、続々と他道州やPU加盟国へと拠点を移した。当然のごとく、東海州の経済は大いに沈滞化した。東海州民が狼狽える中、しかし駒ヶ根は語ったのだ。

「東海州における電力供給の不安定化は、東海州政府の自己責任である。各州の失策の挽回は、あくまで各州政府の努力によりなされるべきだろう」

つまりは、中央政府から地方道州への支援について、明確に拒否の意を示したということだ。

思い返すほどに、進の胸中には負の感情が押し寄せる。駒ヶ根内閣が導入した道州制は、国の負うべき義務を減らし、それどころか国家に、民に対する責任放棄の道筋をも許しただけではないのか。独立採算とはいうものの、時には道州政府の手に負えないような事態も発生するだろう。それでも中央政府が手を差し伸べないのでは、すでに国の体を成していないのではないか。

進は首を振った。これは、考えてはならない問題だった。思考の矛先（ほこさき）を変えなければならない。自分のデスクに腰を落ち着け、暗いままのPCを見つめる。

駒ヶ根内閣の「聖域なき自由化」路線は、進が所属する部署にも影響を及ぼした。進は本年4月より、道路交通局に籍を置いている。部署の所管となる公共事業分野にも、駒ヶ根はコンセッション方式を大々的に導入させたのだ。

コンセッション方式とは、公共インフラの資産保有者は政府のままとし、運営権を民間の株式会社に委譲する公共サーヴィスの供給方式である。運営を民間に委（ゆだ）ねることによって、公共インフラの効率化を図ることができる、という触れ込みの代物（しろもの）だ。

運営権を落札した企業は、その地域のインフラ・サーヴィスにかんし、独占的に事業を展開することが可能だ。「経済自由化」の美名の下、上下水道をはじめ、高速道路、空港、港湾、橋梁（きょうりょう）といった公共サーヴィスの運営権が民間の株式会社の手中に収まっていった。すでに現在の日本では、全国の橋梁、大小の如何（いかん）にかかわらずすべての橋梁において、通行料を徴収することが検討されている。自由化以前には、住民が無料で渡っていた橋である。それに加え、間もなく一般道路もコンセッション方式になり通行料を徴収される可能性があると、先日、進は上司から聞かされたばかりだ。

本来、公共サーヴィスとは、名前のとおり、公共のための事業であるはずだ。それが現

実には、各種インフラの利用料を原資に運営株式会社の利益を膨らませ、株主である資本家に対し巨額の配当金が支払われている。

公共インフラの利用料をユーザーから徴収することで利益をあげる運営会社の株主には、PU加盟国の外国人投資家や外資系企業も含まれている。むろん「電力自由化」で誕生した多数の発電会社にも、PU諸国の投資家は金を注ぎ込んだ。言ってみれば、電気代が上昇すればするほど、投資家に多額の配当金が支払われる仕組みになっているのだ。投資家にとって重要なのは、電力やインフラ・サーヴィスが国民へ「安価、高品質、ユニヴァーサル」に提供されるかどうかではなく、投資した企業の利益と配当金がいかに上昇するか、という点である。

進はまた憤懣やるかたない気分に陥る。彼の目には、電力自由化や公共事業のコンセッション方式の拡大は、レント・シーキングとしか映らない。

元来のレントとは、地代を指す言葉だった。農家が地主から農地を借り入れ、農産物を収穫する。農産物を売ることで得た収入は、農家の所得となる。この農家の所得から、地主が地代として一部を分配してもらうというお金の流れ。地主は、何らかの新たな付加価値、つまり新たなモノやサーヴィスを生み出したのではない。既存の農家の所得というパイがあり、その一部が地主にレントとして渡るだけで、国民経済全体の所得が増えるので

もない。
新たな付加価値を生み出さない企業や投資家が、政府に「自由化」「民営化」を迫り、法律を変更させ、所得のパイの一部を配当金や超過利潤として獲得するのが、現代社会におけるレントだ。企業や投資家が政治家や官僚と結びつき、市場のルールを変え「経済自由化」を実現し、利益や配当金として、本来は他の国民が得るべき所得を収奪する。レント・シーキングとは、レントを生み出せる産業を探し出しては同様の手法を繰り返す、卑賤のビジネス・スタイルだ。
進がふと顔を上げると、いつの間にか高尾も入室し、席に着こうとしているところだ。しかし閑散とした雰囲気にはいくらも変わりない。室内には30ほどのデスクが並ぶが、ふたり以外には人気が皆無なのだ。停電している省内に出入りする者は少なく、皆思い思いの場所で勝手に時を過ごすのが常態化している。こんな時代だ、一般庶民からは完全に覇気が剝ぎ取られ、それぞれが惰性の内に生きているのだ。もちろん、人間らしく生きたいと願い、虚像の幸福のモチーフにしがみついている者もわずかにはあると言うが、多くはとうに挫折していた。諦めがついているのだ。
そんな中にあって進は、仕事上で与えられた書類やデータをつぶさに読み込むことに執心していた。目の前の情報をあまねく脳に刻むという行為が、なぜか進に深い安堵を与え

たのだ。もしかしたら、自我を正常に保つ意味もあったのかもしれない。高尾に至ってはその方法を咥え煙草に頼っているのだから、較べてみれば前者は異常なほどに健全だろう。
今、進の目の前には、国内の建設事業者からの陳情書が置かれている。PCの電源も入らない時間帯、これらを細微まで吸収し尽くす余裕がある。頁を繰ってみれば、その多くは、公共事業における「完全自由競争入札」廃止を求める陳情書の数々である。
コンセッション方式導入と同時に、国内の公共事業には、「完全自由競争入札」が義務づけられた。完全自由競争入札とは、公共事業の入札に際し、価格以外への考慮を禁ずる入札制度である。つまり、落札会社の実績や規模、主とする取引地域等を評価対象にしてはならないというのだ。
「完全に自由な公共入札は、政府の予算を最も切り詰められるため、財政均衡、プライマリーバランスの黒字化を達成できる。公共事業の価格も『市場』が決めるのが最善であるのだ」と、経済自由化を推奨する学者らは主張した。しかし建設産業従事者や、国土交通省の古株たちはまったく相反する主張を繰り返す。
経済自由化を推し進める者は、「品質は市場が決める。品質が悪い事業者は市場から淘汰される」という、市場原理主義の思想を声高に叫ぶ。が、自由競争入札制度では、過去に低品質なインフラを建設した企業であっても、入札から排除されることはない。どれほ

ど悪評高い業者であったとしても、その業者が最安価格を提示しさえすれば、落札は可能なのだ。

当然ながら、公共事業に高い品質は保ち難い時代になった。国内にはいまや、低価格、低品質のインフラがごまんと溢れている。各地で「橋梁崩落」「道路陥没」「トンネル崩壊」が相次ぐようになり、久しい。質の低いインフラストラクチャーは、人を無為の死にも追いやるというのに。

先週、東京州の北部において震度5弱の地震が起きた。その際、東北自動車道は鬼怒川トンネルで大規模な崩落事故が起き、惨事に繋がった。由々しきことにはこのトンネル、つい1カ月前に大々的なメンテナンスを終えたばかりであった。

鬼怒川トンネルのメンテナンスにかんする公共発注の入札は〝完全自由競争入札〟で行われたため、PU加盟国の業者らも当たり前に顔を連ねた。その中に、なんとシンガポールに本社を置く建設事業者も参加していたのだ。シンガポールといえば、地震が非常に少ないことでも有名である。当然ながら同社の設計ノウハウからは、耐震という概念が大きく除外されていた。件のシンガポール企業が最安価格を提示したことで、鬼怒川トンネルのメンテナンスは同社が請け負うことが至極フェアーに決まった。

結果的に、鬼怒川トンネルは崩落した。なんともはや、震度5クラス程度の地震にすら

耐えきれなかったのだ。しかも運悪く、日光観光から東京に戻ろうとしていたツアー旅行のバスがその崩落に巻き込まれ、三十数名が死亡するに至った。

自由化。日本を取り戻すための自由化。規制緩和。現実には、「日本のための自由化」などの文言で済まされる話ではないと、進はいたく理解している。しかし今の自分では、なんら為す術がない……さらに、さらに大元を辿るならば、あの奇跡の誕生劇には自分も大いにかかわったのだ……！

進は今日も、触れてはならない禁断の淵に手をかけてしまう。

日本を導くカリスマ、その地位を盤石と成したのは、ほかでもない、僕らではなかったか。神であり、救い主であった、指導者ＧＫ。そのＧＫが、今はどこに向かい走っているのか……？

進の現在はそのほとんどを懊悩の内に支配され、まさに灰色の昼夜の連続なのだ。が、辛うじてひとつ残された楽しみもあった。それは〝みらい〟の存在だ。

今は昔、進の戦った日々。当時みらいは、ライジング・サン諜報部の長であった。可憐な美女であったみらいが、なぜそのような危険な部署を束ねていたのかといえば、彼女の父親である涼月忍が、実はライジング・サンのパトロンだったということも大きな理由だ。今は亡き涼月の持つ潤沢な資金を頼りに、旗頭にＧＫを据え、ライジング・サンは

つくられた。そして、日本のために戦った。
数カ月続いた自由革命も終結の後、工作員らが次の拝命を待つ中、突如、組織は解体された。ＧＫによるライジング・サン解体声明の発表が為されたのだ。
「今後、戦闘員は日本のためにこそ、猛る刃を収めたまえ。これまでの君たちの勇気と献身を心より讃する。高らかに唱和せよ、日本国、万歳、と」
これまでの扇情的な演出は皆無の、実に淡々たる声明だった。
以来、みらいとの縁は完全に途絶えた。進より５歳ほど年長であった、彼女。命を懸けてまで祖国奪還のために戦った日々に、一度も触れること叶わず、ただ焦がれただけ。みらいは昔も遠かったが、いまやより遠くに隔たれた存在だ。現在の彼女に会おうとするならば、それは毎日でも可能だ、しかし電波の上に限られている。
「涼月閣下、本日の企画も素晴らしき内容と、不肖は感銘を受けている次第であります」
直属の部下である九重が話しかけてくる。
「そうかしら」
日本でも最も有名な顔のひとりである涼月みらいは、国内最大手メディアであるホウライ・メディア・ホールディングスの看板ニュース番組において、キャスターを務めている。

略してホウライ・チャネルと呼ばれるこの巨大メディアは、実は総務省報道局管轄の官営組織である。当然、みらいもただのキャスター・タレントなどではなく、国家最上級公務員であり、その内でもさらに特別職である、総務省報道局〝准将〟である。しかし表向きには、みらいは単なる一美人アナウンサーであり、ホウライ・チャネルはあくまで公共放送と銘打たれている。みらいの位階に言及すること、またホウライが国営である点に公(おおやけ)に触れることは、公然たる禁忌(タブー)なのだ。

政府直轄のホウライ・チャネルが安定的な放送事業を継続している一方で、他の民放はことごとく電波障害に苦しめられている。視聴者が番組を鑑賞していても、数十分ごとに必ずと言っていいほど放送が途切れるのだ。当然ながら日本国民は無意識のうちにホウライ・チャネルを優先的に選ぶようになり、いつしか同チャネルが視聴率で他の民放を圧倒するようになった。涼月みらいが日本で最も著名なキャスターであることには、実はこの電力供給の不公平も大きく寄与していたのだ。

美しいみらいを前に、九重は感極まったように続ける。

「自ら企画立案して取材を遂行(すいこう)し、番組の構成までをも書かれ、さらに民に向かってご自身の言葉で話されるとは。これほどの仕事は、閣下以外にはとても為し得ない大業(たいぎょう)かと存じます」

今回の番組のメイン・イシューは、民営化軍隊「自由ガーディアンズ」の存在意義の掘り下げだ。中でも今から行うのは、自由ガーディアンズ株式会社代表へのみらいによる直接取材という、注目度の高い企画である。

みらいを乗せたロケバスの向かう先は、数年前に開設されたばかりの山手線の新駅、芝浦駅。その駅前の土地一帯が、芝浦セントラルパークと名づけられた新興開発地域である。パーク内でも一等地に建つ巨大ビルディングの最上階のフロア全面を、自由ガーディアンズ株式会社が借り入れている。

現在の日本では、西崎ら一部の憲政党議員が反発する類（たぐい）の〝自由化〟も行われている。つまり、軍事国防サーヴィス、警察サーヴィス、消防サーヴィスの民営化、自由化、市場競争の導入である。新たに警察署や消防署を建設するのはコスト高であるため、公共事業同様にコンセッション方式による自由化、民営化が進められた。

4年前の道州制の実現により、各種公共サーヴィスの権限は、中央政府から各道州政府に移管されている。道州政府は、駒ヶ根の「聖域なき自由化を」の声に従い、警察や消防等の公的意味合いの強い業務をも、次々に民間業者へ委託していった。

さらに、中央政府に残された数少ない義務である国防分野においても、軍事サーヴィス会社へのアウトソーシングが進んだ。むろん、新自由国軍を全面的に民営化したのではな

い。新自由国軍の規模が縮小され、一部の危険業務を外注することが一般化したのだ。現在、尖閣諸島沖の警備についても民間企業へアウトソースされている。
みらいと総務省報道局員を乗せた取材専用車は、高層ビル群前に到着した。これら芝浦駅前の高層ビルはすべて、アメリカ系不動産ディヴェロッパー「セントラル・グループ」の手がけたものだ。ビルの壁面には、太陽光パネルが隙間なく設置され、陽光を跳ね返し輝いている。
実はパーク地下には容量10万キロワットにものぼる巨大蓄電池が備えつけられ、ビル壁が発電した電力が随時蓄積されている。つまりパーク内においては、国内の他の電力サーヴィスがどれほど劣化したとしても、電力は安定供給されるのである。この点は芝浦セントラルパークの最大の売りにもなっているという。
みらいら総務省報道局一行の目的地は、セントラルが手がけた建造物としては日本最大のビル、芝浦一号館である。機材を担いだクルー共々、警備員から手渡されたセキュリティカードを首から下げ、エレヴェイタに乗りこむ。ふと見れば、その扉は異様に厚く、対テロ仕様となっているようだ。40階まで1分足らず。高速エレヴェイタは音もなく彼らを運んだ。
自由ガーディアンズ株式会社。日本国中央政府から尖閣諸島沖の防衛権を落札した、セ

キュリティ・サーヴィス会社である。本社を都内に置いてはいるものの、資本はすべてがアメリカ国内の民間防衛会社に占められている。完全なる外資企業だ。
最上階である40階フロアには、近代的デザインのオフィスが広がっている。その業態は極めて特異なものであるにもかかわらず、しかし社内には目立った特徴も見当たらない。至って普通の企業の雰囲気だ。エントランス脇のカウンターには若い受付嬢ふたりが座り、笑顔とともにみらいへ挨拶の言葉を投げかけた。これまた至極普通に整えられた応接室に通される。
カメラのセッティングも終わり十数分が経ったころ、恰幅(かっぷく)の良い白人男性が、応接室の扉口に姿を現した。アメリカ国籍を有する事業家、自由ガーディアンズCEOのアンドリュー・モラレスである。秘書らしき男女2名を後方に従えている。
「はじめまして、ミス涼月。ご活躍は拝見していますよ。画面の中のあなたも魅力的だが、実物はより美しいね。飛ぶ鳥を落とす勢いのあなたから取材を受けるとは、まったくもって光栄だ」
「こちらこそ光栄です、ミスタ・モラレス。過分なお褒(ほ)めの言葉を頂戴しましたが、私こそ御社の躍進ぶりに敬意を表しますわ」
モラレスは当たり前のようにアメリカン・イングリッシュで話し出し、みらいも英語で

応ずる。
ゆったりとしたソファに身を凭せるモラレスに、秘書がペーパーを差し出す。紙面を眺め幾度も首肯した後、モラレスは再度みらいへ向き合った。
「まずは弊社の創業よりの沿革について、ご説明いたします……自由ガーディアンズ株式会社は、2003年のイラク戦争の際にも活躍したPMC、つまりはプライヴェイト・ミリタリー・カンパニー『Black Knights Inc』の流れを汲んでいます。ああそうだ、弊社のシンボルマークはご覧いただきましたか？　エントランスに大きく掲げてあるものですが」
「もちろんです。しかしミスタ・モラレス、日本人で御社のマークを知らない者などおりませんわよ」
「はは、おっしゃるとおりだ。麗しく輝くエンブレムは、2003年当時から変わらず〝黒騎士〟をデフォルメしたものです」
モラレスはとくとくと、自由ガーディアンズのその後の歴史を語る。カシミール戦争、第二次希土戦争。ミャンマーのラカイン紛争。戦いの名が列挙され、そのたびに、徐々に時が現代に近づいてくる。
「さてミス涼月もご存じのとおり、弊社は2年前、日本国の防衛における東シナ海地区の

防衛事業を受注しました。つまり、現在の日本にとって最も危険な海域を担当することになったのです。尖閣諸島近海には上海福建連邦の軍艦が頻繁に出没し、日本漁船の拿捕など不法行為を繰り返していることは周知のとおり。

弊社はもちろん、危険を承知のうえで、尖閣海域における安全保障任務を請け負ったのです。いまや、シナ大陸はほぼ無政府状態と化しており、日中友好などとはお世辞にも言えない状況ですね。シナの混乱が続くかぎり、歯止めが効くはずもなく、尖閣諸島海域では日夜の戦闘が繰り広げられている。むろん、犠牲者も出ています。が、それを含めた我が社のサーヴィスを、日本政府に購入してもらったのです。

民主主義国家では、国民の戦死は政治的に大きなリスクとなります。しかし、戦死するのが、〝国民〟ではなく〝民間軍事会社の社員〟というのであれば、話は別だ。民間企業の社員が職務中に死亡したところで、有権者は気にしない。政治家は多大なるリスクを回避できるのです。さらにもうひとつ、ビジネスの観点から言えば、一般国民の死というリスク回避を重ねれば重ねるほど、弊社の売り上げが上がり、株主に利益還元もできる。

つまり、弊社と日本国民との間には、明確にウィンウィンの関係が成り立っているのだと言えましょう」

自社の「社員」に死者が出ることまでをも〝サーヴィス〟と言いきるアンドリュー・モ

ラレス。淡々とデータやグラフが提示され、モラレスの弁舌はさらに滑らかに、番組収録はつつがなく進んだ。
「素晴らしいシステムですね。我々日本人も、同朋の死は少なければ少ないほど嬉しいのは当然です。その点、御社との関係がうまく続けば、多くの日本人の命が守られるのですから」
「そう言っていただけるとわかっていましたよ、ミス涼月」
手元の資料に目を落としながら、みらいは、
「しかし中には、人道に反するという声もあるとお聴きしますが」
と何気なく口にした。
「……あなたは、どう思われますか?」
柔らかな声音と裏腹に、モラレスの表情は一気に強さを増した。淡い、向こうが透けて見えるように澄んだ碧眼がみらいを捉え、凝視している。
「人道に配慮するからこそ、御社のシステムは日本に必要なのです」
みらいは明朗闊達な口調で続ける。
「今の時代に自由ガーディアンズに反旗を翻す者など、世間を知らぬ子供ばかりでしょう。先の大戦でも民族の血は少なからず流れましたが、あのような酸鼻たる有様を二度と

子孫に経験させてはならない。御社による、日本人の〝無駄死に〟を排すという高貴な活動。世界にも周知のとおり、日本社会へのこの上ない貢献ですわ」
「ありがとう、ミス涼月。……あなたはやはり、素敵な女性だ」

灰色の朝の後には、灰色の夜が来る。
進は今日の勤務を終え、本庁から公民宿舎に向け重い足を引きずっている。この道をこれまで、幾度通ったろうか。
ライジング・サンが解体されたとき、進は19歳だった。GKによる解体宣言を聞いたとき、進にはそれが俄かには信じ難かった。これは何かの暗号だろうと思った。次の拝命を待つ間、何か有用な実績をつけたいと考えたが、世には日本奪還の喜びと、新たな建国への希望のみが漲っていて、正直なところ、進は大いに気後れした。何を為せば良いのか、皆目わからなかった。
進の両親は大エイジア統治時代に行方不明となったまま、消息は現在も杳として知れない。天涯孤独の彼には、道を示してくれる人などいない。目指すべき背中も、自分の周囲には見当たらないのだ。途方に暮れかけた、そんなとき、GKの経歴を初めて目にした。
44年前の晩秋。GKこと駒ヶ根覚人は、福島県の片田舎に生を受けた。地元の公立学校

に高校まで通った後、都心に広大なキャンパスを構える帝都大学に進み、経済学を修めた。学部卒業後にはアメリカに渡り、マスター取得のための勉学に励みながら、その一方で祖国への愛にも目覚めたと言う。

進はGKに倣(なら)って帝都大学を受験し、合格した。初めてまともに学校というものに触れることとなった。勉強とは進にとって容易(たやす)かった、なぜなら進には、目の前にある文字情報を瞬時に記憶し、すぐさま分析処理を終えるという能力が備わっていたからだ。それまでの進は、この能力は誰もが持つ当たり前のものだと考えていた。しかし事実は違ったのだ。学校という場は、進に自身の持つ特殊能力について認識を促したという意味でも、有意義だった。

そして能力を十分に使いこなし、飛び級をし、そのまま国内最難関であると教えられた最上級国家公務員試験を受け、全問正解にて合格した。いつかまた、GKからの指令が必ず下りると信じて。

しかし指令はなかった。その後の日々は、ただ灰色に塗り潰されている。

通いなれた、さらに言えば飽いた道。が、あるビルの前を通りかかり、進は珍しく足を止めた。つい先ごろ新設されたばかりの小ぶりな建物があるのだ。高層ビルがひしめく霞が関界隈(かいわい)にあって、わずかに5階建て。その小ささも目を引くが、何より特異であるのは

この低層ビル、入り口がどこにも見当たらないのだ。辺りには灯りのひとつもなく、この一帯だけが濃い闇に沈んでいる。

いや街灯はあるのだ、しかし電気は通っていない。昨今、送電会社は太陽光発電への依存を強めている。なぜなら、太陽光発電は、設備投資から実際の稼働までの期間が短く、わずかに2カ月で済むからである。しかし発電の源を太陽に頼っている以上、太陽光以外の発電の稼働率が落ち込むと、その夜は必ず計画停電が実施されることになる。

まるで箱のように奇妙なビルを眺め尽くし、その前を通り越すと、続いて闇の中から、ぬっと大きな橋が現れた。高速道路を渡るように架けられた、古びた橋梁だ。手すりの錆も目立っている。大規模なメンテナンスが必要なのは明らかだが、この橋を管轄する自治体にはその金がないのだ。

金がなければ、現状ではコンセッション方式を採用するしかない。そのうち民間企業が資金を投じれば、この橋も架け替えられることになるだろう。そうなれば当然、自治体は資金投入した企業に対して利用料を支払わなければならない。あるいは、橋の両端にゲートが登場し、通行人や自動車が通行料を徴収されることになるだろう。

ふと思い立ち、進は橋梁の脇の歩行者用階段を上りはじめた。円い壁に囲まれたこの螺旋階段は、国土交通省職員の進だからこそ知っている設備だ。一段上るごとに階段は軋

む。
橋梁の最上部に辿り着き扉を押し開けると、進の耳には、トラックの走行音が大きく響いてきた。先ほどの街灯と同様に、高速道路についても夜間の電力供給は不安定であるため、各車はヘッドライトのみを頼りに走っているのだ。どの車両も忙しくライトを上下させ、クラクションを派手に鳴らす。予算削減を理由に補修は先送りされ続け、そのしわ寄せに、国民は死のドライブに甘んじる日々なのだ。
またも苛立ちを覚え、進はその場に座り込んだ。欄干に身を凭せ、気を静めようと煙草の箱を取り出す。押し潰された箱の中に、最後の1本が顔を覗かせている。それを無造作に咥えると、続いて火を探し、衣服のポケットに手を突っ込んでは出し、また別のポケットを探す。
するとそのとき、進のごく身近な場所から、衣擦れの音が響いたのだ。同時に、辺りにふわりと広がった甘い香り。進は警戒心を一気に尖らせ、周囲を見渡した。
突然、闇の中から若い女性が姿を現した。驚いたことには、その女性、白い薄物の夜着を身に着けているのみで、身体の線が露わに透けて見えている。面食らった進が凝視する中で、彼女はそのまま歩を進め、なんと橋の欄干に手足をかけたのだ。事態を把握した進は、反射的に立ち上がった。どう考えても目の前の女は、橋を越えて飛び降りようとして

いるのだ。
声にならない声をあげながら、進は彼女の両腕を捕えた。目算でも、橋の高さは30メートルは優にある。さらに足元の高速道路には、無数のトラックが乱暴に走り抜けているのだ。もしも落ちたなら、即座に命を失うのは想像に難くない。
女性は進の腕の中でもがいている。その激しく暴れる様に、進まで欄干の向こう側に身体を半分投げ出す格好になる。が、何とか踏み留まった。橋桁を片手で掴みながら、進は女性を橋の真ん中まで投げ飛ばす。そしてすぐさま近づき、乱暴に組み敷いた。むろん、〝死なせないため〟だ。再度、彼女の両腕を捕え、進は叫んだ。
「君はもしや、死にたいのか？　そうなのか？　……大エイジアの悪夢によって多くの仲間が死んだ、あの時代を思い出せば、今この時代に自死したいなど、ただの甘えだというのに！」
進の剣幕に驚いたのか、女性の動きが止まった。と、ちょうどそのとき、ふたりの背後を乗用車が走り抜け、ヘッドライトが女性の顔を照らしたのだ。
「……！」
進は息を呑み、固まった。
そこにあったのは、見覚えのある姿。か細い肢体、憂いをその全身にまとう女性。進の

抱く、理想の女性像そのものの。

〝ミライ〟

進の頭の中に、その三音が繰り返し響いた。一瞬のことであるのに、まるで時が止まったかのように長い時間に感じられた。進の口から、ずっと呼びたかった名が、自然とこぼれ出る。

「みらい」

「……」

「本当に、みらいだ」

彼女は唇を微かに震わせた。

「……進……?」

確かに、〝ススム〟と呼んだ。

我に返った進はすぐさま、腕の中の女性の安否を確かめる。「病院へ」と呟き、進は元来た方向へ足先を向ける。と、みらいが叫んだ。

「やめて！」

驚き、進はみらいを見つめた。

「病院に行っては駄目。まず、私が今夜ここにいると、一般国民は誰も知ってはならないの。国家最上級公務員の高官位保持者以上にしか知らされない事情よ。あなたが私を病院に担ぎ込んだりしたら、すぐさま官邸警備隊に連行される」

みらいの醸すただならぬ雰囲気に、進は気圧される。

「じゃあ、どうすれば？　君、怪我は？」

「体には何の異常もないわ。それにあのビル」

みらいは、件の箱のような奇妙なビルを指差した。

「あれは最新設備が整うＶＩＰ専用の医院よ。私はもともと、あの建物内にいたのよ……いいの、今は少しだけ、ここで休ませて。落ち着いたらすぐに戻るから」

みらいに促され螺旋階段に戻ると、その壁のうちに身をひそめる。進は、みらいの細い肩を自分の上着で覆った。沈黙の時間が刻々と流れていく。彼女の呼吸が落ち着いたのを見届けると、進はやっとのことで口を開いた。

「まさか、こんな近くにいただなんて」

隣に身を寄せる女性の、人形のように整った横顔を見つめ、かすれる声を絞り出す。

「今、僕は国交省道路交通局にいる。国家公務員だよ、君みたいに官位を持つものではないが。……君とまた会えるとは思ってもみなかったから、僕は正直、興奮しているんだ、何から話せばいいのか……そうだ、君は本当に美しかった……僕のつまらない人生を照らしてくれた唯一無二の存在だったさ。あのライジング・サンで戦った日々だけが、僕が本当に生きていた期間だった。もう、あの日々を超えるときは二度と巡ってはこない、だから、今の僕は」

進は一気にまくし立てる。

「今、僕はもう、死んでるも同然だ」

「……そう」

みらいは微かな声で答え、うつむいた。そして顔を上げる。

「また会えるわね。明日ここで、同じ時刻に」

進は戸惑いながらもとりあえず肯く。進の首肯を見届けると、みらいは立ち上がった。

再び階段を上り、そのか細い後ろ姿は扉の向こうへ消え失せた。

経済自由化により日本国が多大なる変貌を遂げたことについて、問題視する政治家の数は相当数にのぼっていた。中には、勇気をもって実際に声をあげる者もわずかではあるが

存在した。その代表格が、憲政党の政務調査会長である衆議院議員、西崎である。
今日の西崎は日本橋本石町にあるバンク・オブ・ジャパン、略してＢＯＪ本社に降り立ち、砂利(じゃり)道を踏みしめていた。ＢＯＪ幹部とのアポイントを取り付けたのだ。
先ごろ、日本国中央銀行総裁には、ウォール街出身のアメリカ人であるサミュエル・グエンが就任した。むろん、西崎ら一部の憲政党議員は、外国人のＢＯＪ総裁就任に猛烈に反対した。しかし議会が紛糾する中、憲政党総裁である空木の言い分は、西崎らとはまったく異なるものだった。
「日本には古来から、長いものには巻かれろ、という諺(ことわざ)もありますし。なんと言っても今は、日本がきちんと大エイジアの悪夢から独立する、という大事な時期なんだから。だから、仕方がないこともあります、ねえ。大きなもの、つまり今回に限って言えば日本奪還ですが、これを得るためには、小さな犠牲はつきものです。歴史上、ある地域が独立を得る際には多くの犠牲を甘んじて受け入れてきた。ですから今回も、日本も歴史に学ぶべき、ということです……賢明な日本国民の皆さんは、わかってくれるでしょうとも、ねえ」
結局、空木の鶴の一声で、流れの大筋は決まった。衆議院において自分以外のすべての与党議員が賛成に回り、参議院もない今、西崎には逆らう術(すべ)もなかった。外国人の日本銀行総裁就任は決まった。同時に、日本銀行はその名を改め、ＢＯＪと広く呼ばれることと

なった。

さてＢＯＪに乗り込んだ西崎は、企画局の副局長室に通された。企画局とは、通貨発行の調節にかんする事項について、企画推進を担当する部署である。西崎は副局長の甲斐宗太郎の前に陣取り、大声をあげる。

「総裁の考えはおかしいやないか！　何が悲しうて、日本経済をさらにデフレ化させて、民を困窮させなあかんのですか？　なんで、この不景気下にわざわざ、通貨発行量を絞り込むような真似をしやはるんですか！」

グエンは就任早々、「経済はすべて貨幣的現象である」「デフレこそが国民経済を鍛える」「成長のためには、いったん、縮まなければならない」と主張を重ね、デフレ化政策を推進した。

その結果として、日本への円高圧力が高まり、企業、とくに大手輸出製造業は悲鳴をあげた。しかも、デフレによる国民所得の縮小は、賃金の切り下げ圧力となり、労働者の給与所得は減少し続けた。それに対しグエンは、「日本国民の所得水準が低下したということは、グローバルにおける国際競争力が高まることを意味する。国民の所得低下は、むしろ望ましい」と語り、デフレ促進政策を撤回することはなかった。

急激に進行する円高に対抗するため、財務省はいつしか為替介入を始めた。しかし日本

の財務省には通貨発行機能がないため、円安誘導のために、「国内で短期国庫証券を発行、つまりは政府の借入により日本円を調達し、ドルに両替する」という為替介入を繰り返すしかなかった。しかしこの為替介入は、マクロ経済的にはあまり意味をなさない。国内のデフレ政策が続き、円の価値が上昇を続ける以上、財務省の為替介入は短期的な効果しか引き出さない。一週間もすれば、為替レートは再び円高に戻ってしまうのだ。

それでも財務省による大規模為替介入は繰り返し実施され、ドルに両替された〝日本政府の借金〟が、米国債へと流れていった。財務省が為替介入をすればするほど、膨大な額の米国債が日本政府により購入されることとなる。

アメリカは日本政府に自国政府の借金をファイナンスさせ、自国経済の振興にお金を使う。デフレが継続する日本は、国民所得が下がり、グローバル企業の人件費削減へと繋がる。グローバル企業の人件費が下がれば、純利益が増え、グローバル投資家に配当金が支払われる。「まさにウィンウィンの理想的関係」と、グエン総裁は嘯(うそぶ)いた。

グエンのあまりに的確なデフレ促進策により、日本経済は一時、物価下落率が5%を超える強烈なデフレーションに突っ込んだ。深刻なデフレを目(ま)の当たりにし、中央銀行の通貨発行を求める政治家、経済学者も多い。しかしグエンは「中央銀行の独立は、人類の知恵だ。中央銀行を独立させることにより、国家はようやくマネタイゼーション、つまりは

政府の財政を中央銀行が通貨発行でファイナンスする、という不自然から解放され、ハイパーインフレーションの危機から解放されたのだ。にもかかわらず、中央銀行に通貨発行、国債買取りを増やせと言う人々は、ハイパーインフレーションを起こせと言っているも同然だ」と反駁（はんばく）した。そして日本はその後も、デフレを進行させていく。

西崎は、甲斐を前に気勢をあげる。

「外国人に中央銀行総裁を任せるやなんて、この国の政治家はどこまでアホなんやろかと思うわ。お上がそんなんやから、ふつうのニッポン人がえろう必死になってきばっても、デフレから脱することができひんのです！　違いますか！」

「ご意見はもっともと存じます……しかしバンダルスリブガワン協定により、PU加盟国の住民は各国での労働に際し、内国民待遇を受けることと定められています」

PU加盟国の外国人を自国で雇用する場合に、自国民と同等の待遇か、あるいはそれ以上に優遇することが定められている。PU加盟国の住民は、加盟国内であればいっさいの区別を受けることなく、公務員になることが可能なのだ。件（くだん）の中央銀行総裁は、国会の同意人事である。つまり、グエンは日本の国会で同意を受けた以上、外国籍であることを理由に職務に相応（ふさわ）しくない、という理屈は通らない。

甲斐は淡々と説明するが、西崎の怒りが収まることはない。

「そんなんはこっちも重々承知や！　そやかて現実を見てください、デフレは深刻化する一方やから、ニッポン人は日に日に貧乏になってるんですわ。それは、なんですか。外人が日本経済の現状も知らんと、適当に、机上の理論で国家経営しとるからや。副局長の力で、ＢＯＪの中から声をあげることは、ホンマにできひんのですか」
「難しい、でしょう」
甲斐は言葉を重ねる。
「正直なところ、バンダルスリブガワン協定は、大エイジア連邦時代の改正上級公務員法と酷似しているようにも感じられます。私にしても国民同様、疑問に思う部分が少なくありません。しかし、駒ヶ根総理のお考えに逆らうというのは、私には……」
駒ヶ根は、中央銀行総裁に外国人が就任することを不安視する国民に対し、「経済自由化を進める以上、国境を超えたモノ、カネ、ヒトの動きに制限をかけてはならない。ＰＵ加盟国に対しては、国境も『自由化』すべきだ。それが、日本国に益をもたらす」と説明した。ＰＵ加盟により国境を超えたヒトの移動が自由化され、さらに内国民待遇をするということは、事実上、公務員職を含めたすべての職業の外国人への開放を意味している。
しかも、国民の安全を考慮し、設定されていた各種の「業務に必要な資格」までもが、「労働者の移動の自由を妨げている」という叫びに押されていった。中央銀行総裁といっ

た公務員職のみならず、自由化の波は民間資格にも及んだ。たとえば弁護士、会計士、中小企業診断士、税理士、社会保険労務士、弁理士、行政書士、建築士、測量士、不動産鑑定士、宅地建物取引主任者、電気主任技術者、電気工事士といった民間資格が、「ＰＵ加盟国の住民が日本で働く際の非関税障壁となりうる。日本語の資格試験に合格しなければ業務を行えないことは、バンダルスリブガワン協定における『労働者の内国民待遇』に反す」とされ、廃止、または内容の大幅な簡略化がなされた。また他国人が日本以外の国において取得した資格によっても、日本国内での開業が可能となった。結果として、現在の国内には、日本語の不自由な弁護士や会計士、コンサルタントらが溢れている。

むろん、単純労働者の移動も自由化されているため、東南アジア諸国などから日本国内の製造業に就職する若者も増えていく。

「総裁は結局、デフレ政策で日本国民を困窮化させて、人件費の切り下げに同意させようとしてるだけやないんですか？」

西崎の質問に、甲斐は沈黙した。ＢＯＪの重職にある自分では、表立ってグエンを批判することはできない。しかし西崎の指摘は正しいと、甲斐は薄々感じていた。

昨今、日本人労働者とＰＵ加盟国労働者とで、職を奪い合うというケースがとみに増えた。そして生計を維持することができない若者の多くは、公的サーヴィスを受注したグロ

ーバル企業に就職するのだ。その中でもとくに危険度が高い公的サーヴィス会社である自由ガーディアンズに就職することは、〝守護者行き〟と呼ばれている。多様な国籍を持つ社員たちが競争し合い、自らの所得を高めるために、危険な戦闘に喜んでその身を投じるのだ。

「甲斐君。友達やと思うから、あえて言わしてもらうで。ホンマは君も、わかってるんやろ」

それまでの投げつけるような口調は止み、親しみと悲哀の混ざったような声音を西崎は発す。西崎と甲斐とは、大学時代の同窓だったのだ。

「たしかにニッポンは、シナの属国ていう情けない立場は脱したわ。そやけど今の惨状を見てみい。単に支配者の顔がとって代わっただけやないか……こんな珍妙なニッポンを、祖国を、わしらは子孫に残す言うんか。ホンマに君は、それで、ええんか？」

甲斐には、答えるべき言葉を見つけることはできなかった。

昨日と同じ場所、同じ時刻。今日もやはり灯りのない病院前の橋梁。そのさらに暗い螺旋階段で、進は待っていた。

「進……」

懐かしい声に、進は振り返った。
「みらい」
かつて夢にまで恋い焦がれた女性が、姿を現した。自分の手がすぐにも届く場所に。昨夜は夢のままに終わってしまうかとも考えた。しかし今日ならわかる、これは現実の事象なのだ。
「こんな時代になると思ってた?」
今夜のみらいは昨日とは打って変わり、存在感がある。黒のツーピースに身を包み、懐にはおそらく短銃を忍ばせている。
「僕らの戦った意味は何だったんだろう、と思うこともあった。日本を奪還すると言って、僕らを導いたはずのGK。そのGKが、今はいったいどこに向かっているのか。まるで僕にはわからず、悩んだ」
ここで進は少なからぬ後ろめたさを感じ、みらいから目を離した。
「でも、それももういいんだ。言ってみればライジング・サンで過ごした日々は、子供の遊びみたいなものだったさ。大エイジアは悪夢だったろう、それに較べたら今はまさに天国だ。曲がりなりにも仕事があり、ご飯が食べられ、住む家もある。なにより僕らは〝日本〟という国名を取り戻したんだ」

「……本当に、そう思ってる?」
「……」
進が黙り込むと、みらいはごく小型のポータブルPCを取り出した。
「私は昨日の日中、自由ガーディアンズ本社に取材に行っていたの」
液晶画面に、自由ガーディアンズの外観の画像や、また、データらしきグラフや表が次々に映し出される。
「近代的で清潔な本社の陰で、多くの若者がむごたらしく命を失っているのを、あなたも知っているはず」
自由ガーディアンズ株式会社は現在、上海(シャンハイ)政府の艦船との銃撃戦を日夜繰り広げている。各種自由化政策により、貧困に陥った若者がガーディアンズに就職し、低賃金で国防任務に就(つ)いている。
またPU加盟国の若者たちが日本に流入し、やはり貧困の果てに、自由ガーディアンズに就職するケースも多い。自由ガーディアンズ側も、日本人社員の死傷が増えすぎると、世論から攻撃を受けるリスクが高まるため、最前線の任務にはPU加盟の発展途上国出身の若者を優先的に投入している。
さらには、自由ガーディアンズは国民軍ではないため、ジュネーブ協定による保護はな

い。自由ガーディアンズの職員たちは、〝傭兵〟に該当するのだ。ジュネーブ協定は、傭兵に対しては、条約第47条が規定する〝戦闘員〟としての待遇を認めていない。つまり捕虜になった場合、自由ガーディアンズ社員は、上海政府により処刑されることとなるのだ。

「自由ガーディアンズの防衛サーヴィス導入により、確かに自衛隊の負担は激減し、防衛費も大幅に削減することが可能となったわ。でも国防任務まで民間に委託することについて、国民からは批判の声が絶えないのも事実。それでもなぜ、自由ガーディアンズは公にはまったく責められないのか？　……それは、一部の有力政治家とガーディアンズが、深く結びついているから。自由ガーディアンズに投資しているグローバル投資家の中には、迂回投資をしている新党自由日本所属の政治家が多数、含まれているからよ」

したたか衝撃を受け、進は目を大きく見開いた。

「GKはいまや、罪びとを率いる神なのよ」

進の身体は震えた……全能なる神は立ち、我々を自由の下へ導きたもうた。しかし与えられた恩恵は、人の死までもが市場で取引される国。汗が一筋、進の背中を妙にゆっくりと伝い落ちていく。

「これが、私たちが欲しかった日本の姿？　進、ライジング・サンで過ごした日々が子供の遊びだったなんて、本気で言っているの？　GKの幻を否定できずに、今後も続く生を

惰性のうちに過ごすと、その齢ですでに決めてしまったと言うの？」
　こちらを見上げてくるのは、長年の夢であった女性、みらい。その人形のように整った顔から、進は目を離すことができない。
「まだ戦い続けている仲間がどこかにいるのではないかと、考えたことは、本当になかったの？」
　今度こそ、進の全身に鳥肌が立った。忘れていた感覚が肌に蘇り、長らく滞っていた血が通うのを感じる。
「進。あなたの指摘したとおり、私は昨夜、死のうと思っていたの」
　重大な告白をなすみらいだったが、しかし進は彼女の言葉ではなく、ただその瞳に捉われていた。みらいの薄灰色の瞳。確固たる意思を宿し、冷たく激しく光る、両の瞳。彼女に初めて出会った日から変わらず、いつかこの瞳を自分だけのものにしたいと、進は願い続けてきたのだ。
　みらいの唇がまた動く。
「でも、あなたの助けによって、私は生きてしまった。運命はあるのだと、私は思わされた……これはきっと、必然なのよ。革命の夜に花火と蠢く人々とをあなたとともに見たことを、私は今でも忘れていない」

腕を伸ばし、みらいは進の首を掻き抱いた。
「私は知っているわ、あなたがまだ自身のうちに乾いたほくちを置き去りにしていると。
そうよ、進、私たちの戦いはまだ終わってはいないのよ」
戸惑いながらも、進はみらいの背に腕を回した。当初は控えめに、しかし徐々に腕に力を込めていく。焦がれた女性の身体は予想以上に柔らかく、か細い。こんな小さな身体で、この5年を孤独に戦ってきたというのか。
帳の中に、夕日の残滓は確かにあった。進の頭上に、その鈍い光は再び差そうとしているのかもしれない。

第四章

奥羽の長い夜

ライジング・サン時代、大エイジア連邦の誇るフィルタリング・システムであったイントラネット・グレイト・エイジアの破壊工作に失敗し、当局に拘束された進は、「模範的エイジア市民になるべし」と、環境保護新法に基づく「環境対応措置」を施された。結果、進は生殖(せいしょく)能力を失った。生物として男として、最悪の絶望を身体に刻まれた……そのはずだった。

しかし今夜、進は、みらいの白い身体を見つめている。環境対応措置とは単なる洗脳であり、外科的な処置はなされていなかったという事実を、進は彼女から閨(ねや)にて教えられた。

「これはトップ・シークレットのひとつよ」

環境対応措置は、大エイジア連邦に公に刃向かった人間になされた洗脳処罰だったが、これは新党自由日本にとっても都合の良い法令だった。つまり独裁者にとって愛すべき国民とは、常に〝愚かな一般大衆〟であるのだ。よって崇高(すうこう)な目的を抱き生きようとする者は、筆頭の排斥対象となる。体制に牙をむき、環境対応措置を受けるような血気盛んな国民には、その後も静かな絶望のうちに生きていただくのが良かろう、と。だからこそ大エイジア時代の悪(あ)しき慣例であった環境対応処罰は、そのまま内容の変更もなく〝奪還された祖国日本〟に受け継がれ、現在も新党自由日本政権により維持されてきた。

みらいが総務省報道局を脱走してきて以来、ふたりは行動を共にしている。進にとっ

て、みらいはまさに自分に〝生〟を与えてくれた女神だった。しかしその崇高なる女神の身体には、全身ところどころに痣が浮かび上がり、進を少なからず困惑させた。他の部分が抜けるように白い陶器のような肌だけに、痣の青黒さはことさらに目立った。

熱い日差しが照り返す中、公用車は走っている。大きく車体が傾いで、進は顔をしかめた。高速道路にはあちこちにひび割れや凹みが目立つのだが、補修などまったくなされていない。どう見ても利用不可能な有様になっているというのに、だ。スピードを上げすぎればすぐに、タイヤは舗装の穴に嵌まり、車体が大きく跳ね上がる。……不快だ。それでも何とか一定以上の快適性を保持しようとすると、運転手は舗装の欠陥箇所を避けるために、忙しくハンドルを切り続けるしかない。

高速道路に立ち並ぶ道路照明灯は、鉄柱のそこかしこに錆が浮き出ており、ＨＩＤランプの破損したものも多い。しかし、たとえ電球が割れずにあったとしても、この地域への電力供給は滞っており、これら照明に灯がともることはない。さらに道路の向こうには、廃屋と思しき建物の点在するのが目に入る。木造家屋もコンクリート建屋も、すべてが等しく汚れ、もの悲しさを放っている。

一般道路脇に等間隔に立つ電柱は、いまだ多くが倒れずに残されている。しかし電線は

といえば、少なくない割合で切断され、地面にだらしなくぶら下がっているのだ。明らかに危険な状態である。しかしちょうどそのとき、進の眺めた方角に、その破損電線の真横を人が普通に歩いていくのが見えた。

「劣化した電線に触れた国民が、もしも感電死したら、それは明白に自己責任である」

ホウライ・チャネルで頻繁に使われるセリフを、進は自嘲気味に呟いた。

崩壊する国土、補修されないインフラストラクチャー。地方経済は壊滅的な状況に陥って久しく、かつては大きく響いていた地域住民の悲鳴も、今は沈黙の泥沼に沈んでいる。

……ここは日本だったろうか。

進は一瞬間、荒唐無稽な錯覚に見舞われ、首を振った。まるで紛争地域に迷い込んでしまったような感覚、しかし当然ながら、この地域は戦禍に見舞われてなどいない。そしてこの惨状は、なにも東北に限ったことではなく、日本国内のどの地方でも似たような光景が広がっているという。

日本の田舎の原風景を壊したのは誰だったろう。犯人は山ほどいるが、〝選挙制度改革〟も、その主要な戦犯だ。駒ヶ根政権が成し遂げた憲法改正という偉業により、参院は廃止され、衆院も定数３００の大選挙区制に変わった。つまり、小選挙区制が廃止されたのである。

大選挙区制が採用された理由は、いわゆる〝自由派〟に属する弁護士らが駒ヶ根政権に対し、「日本国憲法は人口比例選挙を定めている。投票時の一票の格差は最小限にしなければならない。そのためには、大選挙区制を選択する以外の解決策は存在しない」と、主張したためである。

日本国憲法の第十四条は、「第十四条 すべて国民は、法の下に平等であつて、人種、信条、性別、社会的身分又は門地により、政治的、経済的又は社会的関係において、差別されない」と定めている。なにも、「一票の格差は認めない」と書かれているわけではないのだ。だが、裁判所は繰り返し「一票の格差が存在することは違憲」との判決を下し続けた。当然ながら、自由派弁護士らによる「駒ヶ根政権は憲法違反の選挙制度を温存するのか」との声が通りやすくなる。その自由派弁護士らに煽られた一般市民までもが「一票の価値の平等を実現せよ」と叫びはじめ、とうとう日本の選挙制度は、大選挙区制に一本化された。

しかし、小選挙区廃止と大選挙区制導入は大きな問題を引き起こす。それはつまり、人口が少ない地域ほど、住民の声が国政に反映されづらくなる、という問題である。その結果が、これだ。

進は今、国土交通省官僚の職務の一環として、奥羽州へ視察に訪れている。進が職務に

就く昼間、みらいはどこかへ姿を消していた。ライジング・サン時代を彷彿とさせるしなやかな姿で、おそらく短銃を衣の下に2丁以上は忍ばせながら。目的も場所も告げずに静かに歩み去り、日も落ちてだいぶに経ったころ、また音もなく、みらいは戻ってくるのだ。進は当然、彼女の動向を知りたかった。が、行先を尋ねることは憚られた。みらいは今も昔も変わらず、他者を拒絶する空気をその全身から発散している。

　唯一、彼女が近くにいることを実感できるのは、空が宵闇に覆われる間のみだ。夜ごと、みらいの声が耳元で響く。

「私たちがいま一度立ち上がるべきだと、それ以外に道はないと、過去からの声が常に私に呼びかけるの」

　みらいの持つ、冷たくて同時に甘い、不可思議な声。その言葉を耳にするたびに、進は迷いに震える。すべて終わったこととして、この5年間を諦観のうちに過ごしたのだ。にもかかわらず、いったい今の自分に何ができるというのか。青い熱に浮かされた時期は過ぎ去り、消えたのだ。

「毎日、本当は心に思ってもないことを美辞麗句に包み、電波に乗せる。その役割を果たす自分は、間接的には犯罪に加担してさえいるのよ。人殺しも同然だわ。私は苦しくてたまらなかった、でも為す術もなく、中央政府のあやつり人形として務めてきた……でも、

やっとそこから逃げ出したというのに、いまだに苦しいのはなぜ?」

切ない声をあげ、こちらを見つめるみらい。その誘いに震えながらも、進はかつての華々しい戦闘の数々や、手に汗握る諜報活動を思い出した。そしてミッションの成功で得られた恍惚感、鮮明に蘇る勝利の記憶。さらには、今のGKの存在を思いもする。もう一度GKと話すためには、やはりみらいとともに、再び活動を始めるしかないのだろうか。

進が心底から「GKの本音を聞きたい」と願っているのは確かだった。GKがやはり日本のためを思い、あのときの高潔な魂を忘れていないなら、自分がそれを世に公表し、諦めている者たちに呼びかけるべきなのではないか。GKは今も変わらず日本国民の、いや、〝僕らの〟味方であるのだ、と。

しかしもしや、GKが完全に魂を売ってしまっていたとしたら? そのとき自分はどうすれば良い? ……知るのは怖い。知って絶望するよりも、昔の幻影に望みを託し、騙されたまま終わりたい。しかし、それでも……。

車は、奥羽州都である仙台に入った。

「一票の格差の存在は違憲」というポピュリズムが日本国にもたらした影響は大きい。それでも仙台は、まだいいほうだ。発電所の軒数も多い奥羽州、しかも仙台市内の送電線補

修は滞(とどこお)っていない。よって、曲がりなりにも電力供給は途絶えておらず、犯罪や火災発生時には警察サーヴィスや消防サーヴィスが供給される。街には古びたビルや家屋があまた並んでいるものの、完全な廃屋群となるまでには至っていない。

自由化政策に伴って大幅に縮小された国土交通省東北整備局は、周囲と同様に古びた2階建てビルディングに入っている。コンクリの壁には無数の雨染みが垂れ、場所によってはひび割れが走っている。先の震災で損傷を受けたままなのだ。予算が足りず、建物を補修することもできない。

進が公用車を降りると、建屋の中から中年男性が迎え出てきた。これより5日間、進の仙台視察を補助する役回りとなった、奥羽州正職員の穂高(ほだか)だ。

以前の地方整備局では、公用車の運転手は地元の人材派遣企業から調達するのが常であった。むろん、当時から、「震災発生時など、いざというときに命を懸けるべき地方整備局の運転手が、派遣社員で良いのか」という批判があった。しかしこの問題は、まったく別の道筋から解決された。予算不足にあえぐ地方整備局は、派遣業からの運転手調達を諦め、正規の公務員を運転業務に充てるようになったのだ。

「遠路はるばる、お疲れさまです」

進に向けて笑顔を浮かべて見せた穂高だったが、日に焼けた頬にはやけに皺(しわ)が目立ち、

生活の苦労すら感じさせた。穂高はれっきとした奥羽州の正職員だが、中央政府管轄の地方整備局に勤務している。奥羽州政府はリストラの一環として、中央政府の役所に人員を出向させているのだ。

予算削減で息も絶え絶えであるのは、中央政府も地方道州も同様だ。が、中央政府に属する役所のほうが、まだしも人員を雇用する余裕がある。昨年行われた東北整備局による運転手調達は、一般競争入札で実施された。整備局の入札に対し、複数の企業が応札したが、なんと奥羽州政府が最も安い価格で落札した。口減らしとしての意味合いも強かったため、値下げに躊躇(ちゅうちょ)がなかったのだ。したがって、運転手を務める奥羽州政府職員の給与は極めて安価である。

「それでも仕事があるだけ良いほうです。一時期の私は、本気で〝守護者行き〟を考えるほど、追い詰められていましたから」

穂高が淡々と語る背後、東北整備局の駐車場の掲示板には、古びたポスターが貼られている。「一票の格差は自由化の敵~国民のすべてに平等な権利を~」という文句が目立つ。大選挙区制導入時のポスターだ。すっかり色あせ、錆びた鋲(びょう)ひとつに辛うじて引っかかっている。

いわゆる「一票の格差問題」とは、地方住民の一票の価値が都市部住民のそれと較べて

大きい点を、問題視する声から始まった。小選挙区制時代、都市部と比較し、地方、とくに僻地の住民の一票の価値は、およそ3倍にまで達していた。地方の住民は、地元の公共インフラへの投資予算などについて、都市部住民に較べて3倍も有利に運ぶことが可能だったのだ。よって「日本にはムダな公共投資が多すぎる。都市住民が不利益を被っている」という意見が大都市を中心に上がり、一票の格差批判へと繋がっていった。

だからこそ駒ヶ根内閣により、道州制が導入されたのだ。大選挙区制の弊害として、地方の声が中央に届かなくなる点などどうでも良い。ただ「公共インフラの整備を、地方自治体が中央政府に頼っていること自体が誤りである。地元の基盤整備の問題は『自己責任』でもって解決すべき」という思想に基づいて、日本の行政システムにとっての自由化改革、〝道州制〟は実現した。

数ある経済自由化政策の内でも、とくにその真骨頂とも言うべき道州制。日本という国を、北海道、奥羽州、東京州、越陸州、東海州、中央日本州、瀬戸州、伊予州、筑紫琉球州、以上9つの道州に分け、おのおのに独立採算制を義務づけた改革である。中央政府は外交、防衛、金融政策の三本の柱に専念し、内政は道州政府に完全に移管された。道州制法案施行に伴って、消費税も地方税化され「地方自由税」として生まれ変わり、各道州の主要財源のひとつとなった。

建前では現在も、各道州政府は中央政府の総務省と連携の状態にあるとされている。しかし中央政府側に権限はほとんどなく、各道州の地域主権が成立しているのだ。たとえば、進ら国土交通省の官僚であっても、各道州政府の行政にかかわることはできない。今回の視察のように、地域の情報を集めて上層部に上げる程度が関の山だ。もっともこの作業も単なるルーティン・ワークとして行われているにすぎず、実際には、この報告内容に反応してなんらかの措置が講じられることもない。

道州制導入の結果、日本列島は、勝ち組と負け組の二色にはっきりと色分けされた。公共インフラの整備も各道州の独立採算で行う以上、東京州、東海州、中央日本州という〝勝ち組〟三州と、その他の〝負け組〟道州とでは、道路などの状態に大きな差が出るようになった。

進と穂高が言葉少なに車を走らせる中、静かな田舎街に、どこからかサイレンの音が聞こえてきた。音は徐々に近づき、突如、その音の主は姿を現した。側面に「皆様の安全を守る社会秩序維持株式会社」と銘打った大型バンが、横道から飛び出してきたのだ。穂高が急ブレーキをかけ、すんでのところで衝突は避けられた。進と穂高、ふたりは揃って顔をしかめ、無礼なその車体を見遣った。なんとこのバンが、昔で言うところの〝パトカー〟なのである。

聖域なき経済自由化政策が推し進められた結果、当然ながら警察や消防も民営化された。治安や消防といった公的サーヴィスは、各道州政府が民間の「社会秩序維持株式会社」や「自由消防活動株式会社」などと契約し、供給することとなった。そして現在、日本の治安維持サーヴィス、鎮火サーヴィスの市場では、複数の社が競合している。経済自由化の肝であった〝市場競争の導入〟が自然となされたのだ。

社会秩序維持株式会社は、国内最大の治安サーヴィス提供会社で、多くの道州において治安・警察に代わる業務を請け負っている、一民間会社である。株主の大半は、ＰＵ諸国に本拠を置くグローバル資本だ。社会秩序維持株式会社はむろん、株式会社として、株主利益拡大を最優先の目的に据えている。

「恥ずかしい話ですが」

けたたましいサイレンの音が遠ざかるのを見届け、穂高が口を開いた。

「うちの政府はとにかく貧しい。税収が著しく不足しているせいもあり、実はサーヴィス料の支払いを遅延させているんです。おかげで、治安サーヴィス・オフィスや治安スポットの統廃合が進んでいます」

「つまり、無警察、無消防地域が増えている、ということですね。そんな惨状に対して、サーヴィス供給会社のほうは、いったいどのような説明をしているんですか？」

進の質問に、穂高は重苦しい表情を浮かべる。
「社長である塩見氏の言を借りるなら、『需要がない地域に無理やりサーヴィス・オフィスを展開するなど、ムダの極致だ。利益が出ない事業に投資することはできない』とのことです……ええ、先月、彼は本当にこう言ったんです。さすがに、州政府職員を含め、地域住民も愕然としましたよ。塩見らの、いや、駒ヶ根内閣の目指す『聖域なき経済自由化』が何を意味するのか、ようやく我々にも理解できたような気がしてね」
その後も社会秩序維持株式会社は変わらず、オフィス統廃合を進めている。競合している社も数社あるにはあるが、社会秩序維持株式会社は最低10年間の契約保証の条件で、本事業を落札したのだ。契約を中途解約するならば、奥羽州政府は莫大な違約金を支払うこととなる。
「もちろん奥羽州には、違約金を払う余裕などありません。先ほども説明したとおり、警察・消防サーヴィス会社への利用料金までも支払えなくなっているほどなのですから。私の例のように職員の一部を出向させ、人件費削減を試みてはいますが、そんなの焼け石に水です。止まるところを知らない人口流出と経済低迷、税収は減り続ける、こんな有様の奥羽。サーヴィス料の支払いを延滞させている以上、社会秩序維持株式会社や自由消防活動株式会社から、『拠点を統廃合するのは当然』と言われても、致し方ありません」

暫くの沈黙の後、進はふと思いつき、
「他の道州からの支援は？」
と口にした。しかし穂高は、ひどく驚いたような視線を進に向けたのだ。
「いや……他の道州を助けるような、そんな酔狂な道州政府はあり得ません。皆が自分のことで手一杯なのです、それは私にも痛いほどわかります……。もちろん東京州には、他の道州とは桁外れの金銭的余裕があるでしょう。しかし仮に東京州知事が『奥羽州を助けよう』と呼びかけたとしても、おそらく州民のほうは納得しない。『なぜ自分たちの血税を、他の道州のために使わなければならないのか』と訴えるでしょう。それも、当然といえば当然の話です。秋川さんも、その辺りはよくわかっていらっしゃるはずだ」
諦観の域を通り越し、もはや達観しているかのような穂高の様子に、進は少なからずの衝撃を受けた。確かに彼が言うように、道州制に慣れた日本国民は、すでに異なる道州について〝他国〟にも近い意識を持ちはじめているのかもしれない。事実、省内で奥羽州の治安悪化をニュースで聴いた折、数人の職員が「だったら奥羽なんて田舎から出て、東京に移住すればいいじゃないか。EUだって何だって、人の移動は自由なんだからな」と口にしたのを、進は目の当たりにしたばかりだ。
一部のメディアや論客は、ＰＵ加盟国の住民について「自国民同様に、他国民について

も、地方参政権を付与せよ」と主張しているが、現在は辛うじて歯止めがかかってはいる。日本国民は、大エイジア連邦による統治時代に、異邦人地方参政権付与法の恐怖を骨の髄まで味わったからだ。道州制と異邦人地方参政権付与をセットで実現した場合の〝最悪のシナリオ〟に脅え、州知事らが頑なに反対しているのも大きく寄与している。しかしなんとか土俵際で踏ん張っている状況であり、いつこの法案が通ってしまうともわからない。そうなれば、日本の国家解体は一気に現実味を帯びてくる。

酷い話だ。本来であれば日本の原風景とも言うべき光景が広がるはずの、長閑であるはずのこの地で、進の心はあまりにも悲惨な現状を憂いているのみだ。

穂高の運転する公用車はここで、仙台宮城インターから高速に入った。このまま南下する予定なのだ。

インターチェンジにほど近いカーブを曲がると、空き地に人だかりができているのが目に入り、進は大きく伸び上がった。バケツやポリタンクをぶら下げた多勢の人が、一カ所に群がっている。

進の不審顔に、穂高が問われる前に答えた。

「井戸です。地権者の厚意により無料で使用できるので、水を求める住民が日ごと集まるのです」

さすがに進は言葉を失い、口元を手で覆った。嫌な汗が、脇を伝っていく。
人口流出とデフレ政策の直撃を受け、経済が著しく沈滞している奥羽。そういった中でも道州政府は、人命を守るためにライフラインの維持は果たさねばならない。電力、水道、ガスといったライフライン利用料を支払うのは地域住民だが、それとは別に、道州政府は「基本サーヴィス料」という名目で、税金の一部をライフライン供給会社への支払いに振り向けることが定められている。
仙台周辺のライフラインを担うのは、奥羽送電株式会社、自由水道供給株式会社、東日本ガス供給株式会社の三つだ。しかし奥羽州政府の三社への基本サーヴィス料の滞納が長らく続いた結果、各社は揃って小売り料金の値上げを始めたという。つまり奥羽州では、電気代、水道代、ガス代の容赦(ようしゃ)ない値上げが進んでいるのだ。
とくに、水道と下水道サーヴィスを受注した自由水道供給株式会社は、とかく様々な理由をつけては料金の値上げをなすことで悪名高い。自由水道供給の株主の多くは、むろんグローバル投資家である。いまや自他ともに認める最貧困道州である、この奥羽の地においても、利益の最大化を追求しているのだ。しかも水道補修コストを極限まで切り詰めているため、現在奥羽州の一部では、水道や下水道がまったく使用不可能である地域まで出はじめている。

しかも自由水道供給の公式見解として、「我が社の社名にもある『自由』とは、水を提供しない自由をも含んでいる」という文言が広く伝えられている。奥羽州のみならず、北海道を除く日本全国の水道インフラを運営している社であるにもかかわらず、である。当然ながら自由水道供給のユーザー、つまり日本国民は、「明日どころか今、この瞬間にも、通告なしで水道が止まるかもしれない」という状況を、痛いほど自覚させられた。

光熱費の上昇は、奥羽州住民の可処分所得を減らし、消費を直撃する。奥羽州の消費が減ると、当然ながら地方自由税が減り、奥羽州政府は政府支出をさらに切り詰めるか、あるいは消費税率を上げるかの選択を迫られる。政府支出を切り詰めれば、公共インフラがますます劣化し、警察や消防の統廃合が進み、ライフライン各社はさらなる値上げに踏み切るだろう。すると奥羽州からの人口流出の度合いは加速し、地方自由税収減少がさらにまた州政府財政を直撃する。この悪循環の構図を、奥羽は変えることができない。

現在、窮地に追い込まれた奥羽州政府は、奥羽州債を乱発行している。つまり、銀行から一時的に資金を借り入れて、この急場をしのごうとしたのだ。しかし、すでに財政破綻寸前の奥羽州債を引き受けようとする銀行は少なく、仮に貸してくれたとしても、たとえば10年債で20%を上回る法外な金利を要求されたりだという。

解決策としては、BOJが奥羽州債を引き受ける、つまり購入するしかないと考えられ

る。が、デフレ政策を貫くグエン総裁は頑なに拒否の姿勢を崩していない。また駒ヶ根も「政府財政は均衡が原則であり、プライマリーバランスは常に黒字でなければならない。競争に敗れた政府、企業、個人は、単純に自己責任と言うほかはない」と宣(せん)した。
　首相のこの発言を受け、さらに奥羽州からの人口流出は加速した。あとには無人化した地域が増え続けていく。
　限界集落どころか〝無人村落〟と化した地区は、犯罪者が身をひそめるには絶好の環境となった。そこに彼らが拠点を出て、地域住民に対してさらなる犯罪行為に及んだとしても、警察は決して現れないのだ。これは社会秩序維持株式会社の怠慢(たいまん)のゆえではない。サーヴィス・オフィスや治安スポットが遠すぎるから、つまり、不可抗力なのだ。
　この状況に業(ごう)を煮やした地域住民の中には、自力で武装し、無人村落の無法者たちの討(とう)伐(ばつ)に向かった猛者(もさ)たちもいる。しかし無人村落の犯罪者らは地元住民に襲撃されると、家屋に火を放ち、たちまちのうちに逃走してしまう。そしてやはり、消防サーヴィスは駆けつけない。為す術なく立ち尽くす地域住民の前で、炎は歓喜するように燃え盛り、周囲一帯は炭になった。
　これがはたして、先進国の姿なのか。GKの自由化政策は、愛する日本を発展途上国と化しただけではないのか。暗澹(あんたん)とした思考に支配されそうになり、慌(あわ)てて進は自分の女

神、みらいのことを思い浮かべた。
奥羽州に入って以降、みらいはひたすらGKを断罪している。だが進はといえば、かつての英雄をかばうことを続けていた。GKを疑うことは、進にとって半生を否定するに等しい。GKの理想を実現するために、自分は若い命を賭けたのだ。一時は敵に捕らわれ、環境保護という名の洗脳措置を受けてすら、進はGKのために、ライジング・サンのために戦うことをやめなかったのだ。
GKの日本に対する思いは本物だ。おそらく何者かに利用されているだけなのだ。進は力なく自身の主張を繰り返す。しかしそんな進に対し、みらいは薄く笑ってみせるのみだ。

仙台宮城インターから東北自動車道に入り、奥羽州を南へ下る。郡山には入らず、磐越自動車道を福島は会津方面へ向かう。福島とは、GKこと駒ヶ根覚人、日本国内閣総理大臣の故郷である。
GKの故郷というだけで、いつからか進はこの地に異様な憧れを抱いてきた。奥羽州といえば、何を措いても福島の名が思い浮かばれるほどに。かつては日新館という藩校を持ち、日本屈指の、もしかしたら世界屈指の硬派な教育を藩民にもたらしてきた、誇り高き土地。進にとって福島とは、GKの故郷という点を措いておいても、そういった歴史的観

点からも価値を認める場所だった。また、磐梯山、猪苗代湖の存在。雄大な自然に抱かれ、その土地で多くの志ある若者が高度の教育を受け、さらには気高い精神を育まれたのだ。

しかし進の前に広がっていたのは、荒野であった。むろん、家屋は点在してはいるのだが、そのほとんどが廃屋と化している。時折、人が歩いているのを見かけるため、無人化しているのではない。しかし人の存在の証明がかえって、廃屋のあまりに多いことの異様さを際立たせる。もしや、他の地域に較べ、貧困化が著しく進んでいるのか。

会津地域からは住民流出が続き、もはや共同体の維持すら難しい状態なのだろう。道路のアスファルトは、これまで以上に穴だらけだ。放置されてどれほど経つのか、その期間を考えるのにも嫌気がさすほどに。川に架かる橋梁の多くは老朽化が進み、通行止めのものも少なくない。橋を渡ることが叶わず、車はたびたび回り道をさせられることになった。

これでは、地域一帯が分断されたも同然であり、経済活動はますます縮小せざるを得ない。経済活動が縮小すると、奥羽州政府の税収が減る。税収が減れば、インフラの補修もままならなくなり、ますます人々が地域を去る。人々が去れば、さらに税収が減る。悪循環は無限に続いていく一方だ。

「ここだけの話ですが」
　穂高が声を低めた。
「最近、我が州では『通貨発行権』を求める声が出はじめています」
「通貨発行権、ですって？」
　耳を疑い、進の声は思わず上ずった。しかし穂高はあくまで淡々と、このとんでもない提案について説明を続ける。
「奥羽州に地域通貨『奥羽判』を導入し、日本円との間の変動相場の為替レートを設定しようという意見なのです。実際に実行に移すと、判の対円為替レートは市場により決定されることになり、１００％の確率で暴落します。為替レートが下落すれば、奥羽住民の所得水準を他道州に較べ大きく抑えることになりますから、その安い賃金を目当てに企業が進出し、経済が活性化するのでは、と。このような理由で、とくに経済界を中心に、独自通貨制を求める人が増えているんです」
　あまりの暴論にしたたか衝撃を受け、進は戸惑いながら口を開く。
「それでは奥羽州は、もはや国内の一道州ではなく、日本とは別個の国になってしまうのでは」
「ええ、秋川さん、おっしゃるとおりです。もしもそのように指摘されたとしても、否定

できない……しかも、それだけではないんです」
穂高はさらに声のトーンを落とす。
「独自通貨が無理ならば、せめて奥羽州と他道州との間の製品やサーヴィスの売買についても関税をかけるべきだと主張している人もいます。つまりは、道州関税です」
奥羽州と他道州との間に関税を設けることで、奥羽州企業は他道州やPU諸国の企業との競争から保護される。結果的に、奥羽州の経済は大きく成長し、人口も戻り、住民の所得が増えていく。それに伴い地方自由税収も増え、税収増により奥羽州債の返済もできるようになるという想定である。
返すべき言葉を失い、進は黙った。道州境を越えると関税がかけられ、通貨も異なるという状況。それでは、奥羽州は完全に〝別国家〟ではないか？　むろん、奥羽判という新通貨導入と為替レートの下落により、他道州からの輸入品の価格は跳ね上がることになり、住民の生活を圧迫するだろう。それでも現状の「州民がひたすら貧乏になっていく」状況よりは良い、と考える民が存在するのだ。
車は会津の街を越え、いつしか田舎に入り、今では猪苗代湖畔のすぐ脇の道路をゆっくりと走っている。広く穏やかだが、どこか打ち捨てられたようなもの悲しさを醸(かも)し、湖は沈黙していた。

穂高と別れた後も、進は奥羽州都仙台市に留まり続けた。省庁への連絡すら忘れ、ただみらいと抱き合い、長い時間を過ごした。
昼日中にホテルの窓から街を見下ろせば、気味の悪い光景が目に飛び込んでくる。間近に見える奥羽州州庁前に、数万を超えるデモ隊が集結しているのだ。
「奥羽州政府は地域通貨を導入せよ！　奥羽州政府は道州関税を実現せよ！　奥州藤原の再興を！」
と、途切れることなく叫び続けている。広場に蠢（うごめ）く人々は、一様に殺気を身にまとい、喉（のど）が潰れるほどの大声をあげる。
深刻な不況と人口流出が続く中、総理大臣である駒ヶ根から「それは自己責任である」と切り捨てられた奥羽の民の、汗にまみれた怒号。かつてライジング・サンのメンバーが求めた〝日出（ひい）ずる国・日本〟など、もはやどこにも存在しやしない。それどころか日本国の解体は、日々着実に進み続けているのだ。
それでも、隣に眠るみらいの存在は本物だ。こんな時代に生きていないのならば、ふたりはまるで、ただの幸福な恋人同士のようだった。
夜ごと、進は夢を見た。このままみらいと逃避行を続け、遠い土地で温かな家庭を築

く、そういう夢だった。これまで進が馬鹿にしてきた、幸福のモチーフにしがみつく奴らと同等の思考だ。すべての理想を諦め矜持を捨て去り、ただ目の前の唯物的な快楽を貪る。しかしそれも一瞬だった。ぬるい湯に浸かるような甘い夢想から醒めた進は、みらいの横顔を見て苦笑した。そんな絵に描いたような幸福な日々が訪れるはずは、ないのだ。

　つけっ放しのテレビからホテル室内へ、暗鬱なニュースが流れだす。地方のローカル局が、不穏な映像ばかりを電波に乗せている。

　州庁前でデモ隊が気勢をあげる映像、一部の過激派学生による東北大学の講堂占拠の映像。続いてレポーターによる奥羽衰退の現地取材動画の数々。奥羽の各地では人口ゼロの村が出現し、警察や消防オフィスの撤退、ライフラインの途絶といった事態が続いている。一般道はもちろんのこと、高速道路までもがメンテナンス不足。通行止めになった橋、トンネル、傾いた陸橋が続出し、奥羽州全域が分断されつつある。皆が細微に知り尽くす惨状を、いまさらながらに語る女性レポーターの乾いた声。

　にもかかわらず、次に画面に現れた有識者の男性は、こう言い放った。

「かつて日本国は、東北地方に莫大な国費を投入し、この地の復興に尽力しました。ところが怠け者の東北人は、地域経済を成長させなかったのです。現在の東北の酸鼻たる有様は、自ら努力することなく中央からの支援に頼りきっていた、奥羽州の自業自得と言える

でしょう」

経済自由化政策の理論的バックボーンとして、政府でも中枢に食い込んでいる男。黎明大学教授である千畳敷勇三教授は、よりにもよって国会の場で、この発言をなしたのである。

千畳敷の言い草に、堪らず進はテレビ画面を殴った。幾度も殴打を繰り返すうち、ふと気づくと、目の前の無機物の残骸はすでに声をあげなくなっていた。もう誤魔化せやしない。〝経済自由化〟の終着点とは、つまり、〝日本解体〟ではないか。

中央政府の冷酷な仕打ちを恨む奥羽州では、現在、「奥羽独立党」が人気を博している。奥羽独立党は、公には政党と名乗っているものの、その実像は明確なテロリスト集団だ。直近ではつい2カ月前、党員が福島県内の火力発電所を占拠し、東京州への電力供給を停止させた。実は東京州の電力供給は、奥羽州内に建つ発電所に完全に依存していたのだ。当然、東京州内は一時的にではあるが大パニックに陥った。しかしこのテロに対して、なんと奥羽の地は、州民による盛大な拍手喝采で溢れたのである。

経済が破壊されれば、社会も瓦解する。壊れた社会秩序の中、大衆は本能の暴走を支持し、歴史の流れは大きく捻じ曲がる。大衆による理性の箍が外れた行為の積み重なりが、緩慢な大河をも狂わせるだろう。

不幸になるしかない時代。僕らは明るい未来など期待してはならない。低空飛行の不幸の中で、不幸の度合いがこれ以上深まらないようにと、それだけを願い生きていくのが正しいのだ。

　進とみらいのうたかたの日々は、やはり長くは続かなかった。数日ぶりにホテルから往来へ出たふたりは突然、音もなく近づいてきた大勢の男に取り囲まれた。

　静まり返った街並み。みらいが進のほうへ手を伸ばし、腕を強く摑んだ。いったい何が起きているのか。皆目わからず、進とみらいは立ちすくむ。と、屈強な男らの向こうから、ある人物が姿を現した。陽光と熱気の生む陽炎のように、そこに立っていたのは。

　……GKだった。

　多数のSPをつき従えるGKは、相変わらず往年の名俳優のような整った造作のままに、こちらを見つめている。時の総理大臣が路上に姿を見せたにもかかわらず、周囲にはまったく騒ぎが起きていない。それどころか、辺りにはGKら以外の人影が皆無なのだ。この地区は仙台市の中心部であり、通常であれば人の波が絶えないはずなのに、なぜ？

　暑い。進の頭の中に浮かんだのは、照りつける日光を憂う気持ちだった。暑い。今、季節は、いつだったろうか。記憶は定かではない。これは現実か、それとも白日夢なのか。

いや考え直してみれば、なぜみらいは自分の横にいた？　彼女はなぜ、僕を愛してくれたのだ？　激しい感情の暴風雨が進の思考を支配し、次の瞬間、進は駆け出していた。状況がどうであろうと、どうでも良いのだ。今重要なのは、目の前に、自身の恋い焦がれたＧＫが立っているという事実だ。ＧＫと話したい。ＧＫの本当の言葉が聞きたい。ＧＫの、いまだに自分を気にかけてくれているという、その思いを確認したい。

進はＧＫに取りすがろうとした。しかしＧＫは進には一瞥（いちべつ）もくれず、静かに口を開いた。

「さあ帰ろう、みらい」

ＧＫは脚を進め、みらいの肩を優しく抱く。

「わたくしたちの家に」

言い終えると、腕の中の女性に向かい、柔らかな笑顔を見せた。

ＧＫは今、何と言った……？

進は、すぐさまみらいを見遣った。が、すでに彼女は以前のままの能面のような無表情に逆戻りしている。自分とともに過ごした日々のみらいではないと、進は即座に気づく。

進の額に脂汗が滲（にじ）んだ。ＧＫの後ろには、国土交通省の同僚であるはずの高尾の姿が見

え、さらに進の混乱を助長した。高尾は薄ら笑いを浮かべながら進に歩み寄ると、いきなり腹部を蹴り上げた。的確すぎる攻撃に進は嘔吐(おうと)し、くずおれた。すぐさま数人の男によって地べたに組み敷かれ、そのまま進の上腕部に注射針が深々と突き立てられた。もはや声もあげられず、横たわる。

痺(しび)れる身体。霞みゆく視界の片隅に、みらいの寂しげな後ろ姿が映り、それは徐々に小さくなった。

第五章

君たちには〝死ぬ自由〟がある

「あんなあ、千畳敷先生」
内閣官房参与の執務室で、西崎は苦々しげな声をあげた。ローテーブルを挟んだ反対側には、千畳敷が穏やかな微笑を浮かべ、ソファに腰かけている。
「先生の主張しやはった経済政策の路線にしたごうて、最低賃金制度が撤廃されて、自由賃金制度が始まった。そやさかい企業は、『時給1円』で労働者を雇用しても構わんことになったんや。あくまで理屈の上でやさかい、今でもおそらく、時給1円の企業ていうのは存在せえへんやろ。そやけど、私の知ってるとこでは実際に、時給125円ていう労働者は出てきてますよ」
西崎の訴えは続く。
「もっと言うと、自由雇用基準法とかいうのもありましたな。この無茶苦茶アホらしい法律のおかげで、企業は、労働者を自由に雇用して、あかんようになったら自由に解雇できることになりましたなあ。なんも予告せんと上司が突然、解雇や言うだけで、従業員は私物をまとめて即刻オフィスを出ていかなあかん。こういう解雇がホンマに人間にとって正しいと、先生は思わはりますか」
この5年の間に日本では、数々の労働規制についても、経済自由化の波に呑み込まれた。つまり、解雇規制や最低賃金制度の撤廃がなされ、いわゆる〝雇用の流動性〟が強化

されたのだ。これに伴い、日本国全体から、派遣社員または非正規社員という呼称が消滅した。仕事に従事する者すべてが正社員なのだ、しかし、この上なく不安定な。

「私らが若いときは、懸命に働けば働いたなりの所得を得て、普通に結婚もできて子供も育てられましたわ。それが今やどうですか。あんまりにも企業側の力が強うなりすぎて、労働者が働いても働いても給料はいっこうに上がらへん。真面目にきばってても、いつなんどき解雇されるかわからへん。そういう、えらい不安定な状況でみんな生きとる。先生は、これ、なんやおかしいなあ、と思うたことはありまへんか。なんでこんな事態になったんやろか、と」

　千畳敷が答える前に、西崎の横に浅く腰掛けていた男が、鋭い声を発した。

「千畳敷先生も西崎先生も、まどろっこしい会話など、もう不要ではありませんか。千畳敷先生、おわかりでしょう？　現代の日本国民の不幸は、すべて経済自由化による害悪です。他に原因など見当たりません」

　割って入ったのは、土木工学が専門の大学教授であり、かつ経済自由化委員会に席を持つ、真砂茜（まさごあかね）である。真砂は、茜という名前が似合わぬ頑健な男で、学生時代は剣道部主将を務めていたという。いまだ41歳と、教授としてはかなりの年若だ。

　真砂は駒ヶ根首相の意向によって、鳴り物入りで経済自由化委員会に招かれたはずだっ

た。経済自由化推進派の千畳敷と反対派の真砂を衝突させることで、駒ヶ根は、委員会内のバランスを取ろうとしたのだと。しかし蓋（ふた）を開けてみれば、委員会の実権はすでに千畳敷に完全に握られていたのだ。真砂の発言力などないに等しく、ほぼ座敷牢の状態に置かれた。

〝死んだケインズの信奉者〟または〝土建主義者〟などと陰口を叩（たた）かれる真砂は、経済自由化委員会のメンバーという立場にありながら、現在はインターネットを通じ、反・経済自由化の論説を発表し続けている。その論文を読み漁（あさ）った西崎は、真砂を信頼に足る人物と認め、以来、ふたりはやっと共に戦う同志を得た格好だ。

真砂の心強い応援を受け、西崎は勢いを増す。

「国民はますます貧乏になって、ちょっとの富裕層のみがますます金持ちになる。これが経済自由化の結果なんちゃいますか！」

「お待ちください、西崎先生。少し、私の考えを述べさせてください」

千畳敷は、ゆったりと右手を挙げた。

いかつい体格と近寄りがたい雰囲気の真砂に較べ、千畳敷ははるかに柔らかい印象を他者に与える。日本国を「経済自由化」という社会実験に放り込んだ張本人とはとうてい思えない、スマートな紳士ぶりを醸（かも）している。加えて、弁舌は極めて滑らか。国民は駒ヶ根

化を支持した向きもあったのだ。

「確かに、現在の日本はデフレが深刻化し、所得水準は下がっています。しかし、だからこそ人件費が下がり、日本企業はグローバルにシェアを広げ、利益を拡大させているのです。企業の業績が伸びなければ、デフレ脱却など夢のまた夢、ですね。

別に中央政府は、貧困層を放(ほう)っているのではありません。以前の生活保護制度は非常に非効率でしたから、その解決策として、『負の所得税』というベーシック・インカムを導入いたしました。負の所得税という効率的、近未来的な社会保障システムにより、日本国は、社会保障費拡大による経済破綻(はたん)、という不幸を回避できるのです」

〝聖域なき経済自由化〟によって、セーフティネットである生活保護システムも全廃された。「政府が貧困層の面倒を見るような甘い真似をしたから、生活保護費用は膨れあがった。最低賃金制度が撤廃された以上、給与水準さえ我慢すれば、誰でも仕事にありつける。それでも就職せず生活保護を受給していることは、単なる甘えにすぎない」というのが、経済自由化推進論者たちの言い分であった。しかし貧困層を放置しておくと、彼らは飢え死にを恐れて犯罪や暴動に走る恐れがある。そのためにこそ生み出されたのが、負の所得税である。

西崎は荒々しく千畳敷の言葉を遮った。
「負の所得税受給者が他の国民から何て呼ばれてるか、千畳敷先生は知ってはりますか？
『マイナス』ですよ、マイナス」
自由賃金制度、自由雇用基準法、さらにBOJ総裁の打つデフレ促進政策により、正規社員でありながら月収10万円未満の労働者が続出したことを受け、駒ヶ根内閣は負の所得税制度を導入した。生活保護、年金などの旧来の政策は廃止され、月の所得が12万円以下の日本国民に対し、高所得者層から一定割合を負の所得税として移転する、所得保証制度を創りあげたのである。
貧困層は、所得税を支払うのではなく受け取ることになるため、「負の所得税」と呼ばれるのだ。負の所得税を受け取る国民は「マイナス」という蔑称で、明確な差別を受けることとなる。その差別から逃れるために、自由ガーディアンズに志願する若者も多い。
苛立ちを隠さない西崎に対し、千畳敷はあくまで穏やかな態度を崩さずに答える。
「西崎先生は結局、『経済自由化は失策だった』とおっしゃりたいのでしょう。しかし、自由化が明確に成功を収めている分野もあります。たとえば、学校教育などを思い浮かべてください」
教育の完全自由化、民営化、株式会社化。駒ヶ根による「学校教育こそが国家の礎だ。

だからこそ国民は、『品質が高く価格が安い教育』を享受する権利を何よりも優先して持つ。日本の教育再生には、市場競争により顧客に教育内容を吟味(ぎんみ)させ、低品質な教育サーヴィスを提供する学校を淘汰(とうた)させることが必要不可欠だ」という声に従い、5年前、学校教育自由化推進基本法が成立した。つまり、学校について、株式会社制を認めたのである。国は民間投資家に対し、多様性と活力のある学校の設立を求めた。むろん、学校側は教育内容をおのおの自由に決めることが可能となり、国民側は子供を通わせる学校を自由に選択することができることになった。

　結果として、公教育の体制についてはこれまでの慣例を維持したものの、公立の教育機関はすべて民間法人に変更された。生徒を十分に集められない学校は、教師や設備について品質を下げざるを得ず、衰退していく。逆に多数の生徒を集められる人気校は、教師、設備の品質を高めることができる。学校教育の内容は各学校の裁量に任されており、中央政府は口出しすることができない。公立教育機関の完全な民間法人化に伴い、当然ながら教育委員会は廃止された。

　また、学校株式会社に対しては、ＰＵ加盟国の投資家は自由に株式を保有することが可能だった。したがって学校での教育内容に対しても、株主の意向が反映されるのが当然となった。株主の多くがグローバル資本家に占められたため、英語教育が大幅に拡充され、

新古典派経済学の教義を子供たちに教え込む学校も増えていった。

「学校教育の自由化により、グローバル競争に立ち向かえる人材を輩出することが可能となりました。グローバルに勝ち、生き残るためには、グローバルな教育を受けることが必須です。社会とは決して甘ったるい、優しいものではありません。戦いの連続に耐えるということが、社会を生き抜くということも同義です。それでも、その厳しい社会の中で、日本人に大きく羽ばたいてほしい！　だからこそ教育現場に市場競争を取り入れ、需要に応える教育をする必要があった。それがとうとう、現代日本で実現されたのです。我々は喜びこそすれ、どこに悲しむ要素がありますか」

またも真砂が、鋭く反論する。

「グローバルで勝つ云々は、あくまで企業の目的であって、国家や中央政府の目的ではありません。また、将来的にグローバルに活躍するであろう人材を多く輩出したところで、それがいったい何になるのですか。自身のルーツを愛せない人間に、どうして偉業を為すことができましょう？　この5年、日本の教育は、後退し続けてきたと言わざるを得ません」

真砂の声が凜と響き渡った後、

「……大エイジア時代の学校教育は〝日本否定〟が主やったけれど、今では〝国家否定〟

教育が主流になってしもた。この国は明らかに、前より格段におかしなってるんや……」
と西崎が呟き、室内は一気に、しんと静まった。その静寂に耐えきれなくなったのか、
ふいに千畳敷が口調を変えた。
「西崎先生、真砂先生。そんな、国民の代表たるあなた方までそんなに悲観的でどうするんですか？　豊かになるチャンスはあるんですよ。すべての日本人の前に、明るい未来は拡がっている」
何やら憐れむような表情すら浮かべ、千畳敷は西崎らを見つめる。
「勝ち組となる機会は、国民全員の前に、平等に開かれているんです。もしも日本国内に仕事がないのなら、狭い日本から飛び出して、世界で、グローバル市民として働けば良い。バンダルスリブガワン協定により、日本人はＰＵ加盟国内であれば何の制限もなく働ける。雇用の機会は、グローバルに、均等に存在しているのです！　にもかかわらず、自分は貧乏になったというのなら、これはもうその個人の自己責任ですよ。国がそこまで面倒を見きれますか？　財政は無限ではないのですから」
「……ようそんなベラベラ喋れるもんやなあ。あんたのお綺麗な言葉に、こっちは反吐が出そうやわ」
西崎の捨て台詞に、さすがの千畳敷も顔をしかめた。

西崎と真砂は一様に仏頂面を抱え、揃って席を立つ。まるで議論にならない。彼らは『経済自由化は正しい』という結論ありきで、それに沿う理屈を後から組み立てているにすぎない。そして、その結論が翻ることは決してないのだ。

ヴィオラの声。

邸内には先ほどから、弦楽器の演奏音が響いている。亡霊の咽び泣くような、女の弱々しい悲鳴の連続のような、暗鬱な調べ。

ここは首相官邸敷地内、内閣総理大臣公邸。公邸内でも最奥の部屋に陣取り、駒ヶ根がヴィオラを弾いているのだ。アルトの響きが、さして広くもない部屋の四方の壁にぶつかり、乱反射する。聴衆は皆無だ。自室にこもり、孤独のうちにこの楽器を泣かせるのが、駒ヶ根の唯一無二の趣味だった。

ヴィオラに触れたのは、いったいいつのことだったろうか。思い起こせば東京へ出て大学に進学してから、駒ヶ根は初めて、念願のヴィオラを習いはじめたのだ。その後、人前で演奏しても恥ずかしくない程度にまで弾けるようになっても、彼は決して他人に腕前を披露しようとしなかった。

駒ヶ根の脳裏には、今でもあの光景が痛いほどに焼きついている。湖のほとり。瀟洒な

洋館のテラスで、少女がヴィオラを奏（かな）でていた。山々に囲まれたこの密（ひそ）やかな場所、辺り一帯には百合の花が咲き乱れ、迫る芳香に俺は噎（む）せかえった。まったき静けさの中、ただひとつの例外として、ヴィオラの旋律（せんりつ）だけが湖面をはるかに渡っていった。遠い、記憶。

ふと我に返り、駒ヶ根は、自室の大扉がノックされていることに気づいた。続いて、野太い呼び声がドアの向こうから聞こえてくる。

「閣下」

官邸警備隊大尉の有明（ありあけ）だ。

「今、向かうよ」

いたって警戒することなく、駒ヶ根は応じた。この首相公邸に胡乱（うろん）な者が侵入することはまず不可能だ。敷地は高さ10メートルの壁にぐるりと囲まれ、中でもとくに公邸周囲は、有明大尉率いる官邸警備隊が常に厳戒態勢の警備を続けている。

官邸警備隊とは、駒ヶ根政権発足後に新設された、官邸警備を専門とする特殊部隊だ。隊長の有明は、ライジング・サン創設時からの駒ヶ根の信奉者である。自由革命とその後のライジング・サン解体に伴い、駒ヶ根は多くの人材を切った。そんな中にあって有明は、当時から今に至るまで駒ヶ根に仕えることを許された、数少ない側近のひとりだ。

ゆったりとした足取りで廊下へ出た駒ヶ根が向かったのは、自室の隣に誂（あつら）えられた小部

屋だった。その小さな空間の真ん中に、女性がひとり座っている。いや、正しくは、座らされているのだ。階級でいえば有明よりもはるかに上である総務省報道局〝准将〟。つまりは、涼月みらいである。

「……GK……」

みらいは悲痛な声を頻りに発している。しかし駒ヶ根はといえば、それをまったく気にかける様子もなく、

「有明大尉。暫く君は席を外したまえ」

と指示を出した。

「よろしいのですか?」

「ああ。5分……いや、10分間、わたくしと准将のふたりにしてくれるか。ただ念のため、扉前にて待機するように」

「かしこまりました、閣下」

有明が退室すると、駒ヶ根は、みらいの目の前に置かれた豪奢な椅子に身を沈めた。

「なに? なにか言いかけた? みらい?」

ごく気さくに話しはじめた駒ヶ根に、みらいは答える。

「ごめんなさい」

「謝(あやま)って済むことだと、思う？」
駒ヶ根は面白そうに、みらいの目を覗き込んだ。
「それでも言うわ、ごめんなさい、GK。……進は私たちの同志だった。大エイジアの支配下、彼は日本国奪還のために命を賭(と)した。情報委員会に囚(とら)われてすら、屈することがなかった」
「あのさ、おまえに言われなくても覚えてるよ。情報委員会に環境対応措置をされたのにもかかわらず、いっこうに士気が衰えない少年の姿に、俺がある種の感動を覚えたのもはっきりと、ね」
「だったら彼を許し……」
「待てよ！　みらいは何か、誤解してる」
駒ヶ根は大声でみらいの言葉を遮(さえぎ)った。
「進は今でも元気だよ。官職をクビになることもないしね」
「え？」
驚いたみらいが聞き返した。が、駒ヶ根はいかにも退屈そうな素振(そぶ)りで、卓上へ大仰に生(い)けられたフラワー・アレンジメントから、大輪のダリアを一本抜き取った。
「だいたい、彼が何の罪を犯したんだ？　奥羽に行ったのは省庁の公務だし、その後も仙

台に留まったのは、おそらく体調不良か何かだろう」
駒ヶ根はダリアのフューシャ色の花弁を一枚一枚、むしっては床に落とし、むしっては落とし、を繰り返している。すべてむしり終わり、周囲の床が花の残骸だらけになったのを見届けると、やっと彼は顔を上げた。
「なんだかさあ。みらいは俺のことを、悪逆非道な独裁者だと勘違いしてないか？　ははっ、悪逆非道な独裁者って、我ながら陳腐(ちんぷ)な響きだなあ！　あのさあ、大エイジア時代と違って、俺の日本は法治国家だよ？　法律を無視して彼を人治的に裁くなど、できるはずがないだろ」
「……そのとおりだわ」
「そうだよ」
駒ヶ根は随分と嬉しそうに言葉を紡(つむ)ぎだすが、その一方で彼の足は、靴底で花弁をまんべんなくすり潰しはじめた。青臭い匂いが立ち昇る。
「彼はすでに国交省の席に復帰してるよ。さすがに、同僚が自分を監視する任に就いていたことはショックだったかもしれないけどね。でも冷静に考えてみれば、この俺が〝知りすぎている〟奴らを何の措置もなく、野放しにしているはずがないんだよ。だからまあ、そこまで考えが至らなかった彼の自己責任だよね」

「自己責任、ね」

みらいの弱かったはずの声は、少し険を帯びた。

「最近、その『自己責任』という言葉がメディアや国会で頻繁に使われて、国民の間でも普通に飛び交うようになったわね。敗者や愚者は、自己責任だと……」

「当たり前じゃないか」

駒ヶ根は逆に驚いた風で、大きな眼をさらに見開いた。

「同じルールで戦い、勝者と敗者に分かれたんだ。当然、敗者は自己責任だよ。他に、なんて言えばいい？」

みらいは沈黙した。

〝聖域なき経済自由化〟の影響は、もちろん日本の医療システムにも及んでいる。WHO主催による健康達成度評価において世界1位を取った過去を持ち、世界に誇る国民皆保険制度を長らく保持してきた国、日本。その医療システムに対する〝自由化〟は、自由診療の拡大という形で行われた。

自由診療とは、国民健康保険制度の保険適用外の診療・治療を意味する。現時点ですでに、治療の過半は自由診療となっており、保険適用外である。高額化する医療費に怯える国民は、当然ながら民間の高額な医療保険に加入せざるを得ない。貧しさから、それら医

療保険サーヴィスに加入できず、国民健康保険のみに加入する国民は、質の悪い公的保険診療を受けるか、あるいは借金をしてでも自由診療を受けることになる。しかしたとえそこまでして自由診療を受け、病から回復したとしても、借金を返すことができなければ、自己破産に追い込まれるか、あるいは〝守護者行き〟の運命が待ち構えているのだ。つまり、日本における医療の平等は、すでに崩壊しているのである。

さらに酷いことに、救急車を管轄する各道州の消防局が民営化されたことにより、医療保険の種類により「救急車を呼べる人」「救急車を呼べない人」に国民が二分されてしまった。たとえば奥羽など負け組の道州では、国民健康保険料のみでは救急車の費用を賄えない状況だ。民営化された救急サーヴィスでは、患者すべてに事前の保険証券提示が義務づけられており、もしも十分な医療保険に加入していなければ、救急車に乗ることすらできないのだ。

「奥羽州からの帰り、日比谷公園で見た光景、あなたも覚えてるでしょう。医療格差に抵抗する人々の、必死のデモ」

日比谷公園前の大通りを、大規模デモ隊が横切り、GKやみらいらを乗せた車は暫し立ち往生した。医療費のあまりの高騰に、さすがに怒り心頭に発した低所得者層が、抗議してデモを起こしたのだ。デモ隊には、通行人が次々と飛び入りで参加し、最終的にその数

は5万人以上に膨れあがった。医療費高騰や医療格差に異議を唱える声は、すでに日本のマジョリティと化している。
「経済自由化を主導する千畳敷教授は、あのデモが行われたことを受け、『彼らには、死ぬ自由もある』と評したそうよ」
みらいの言に、駒ヶ根は大口を開けて笑い出した。
「ははっ、〝死ぬ自由〟とは、よく言ったもんだね。さすが千畳敷君、レトリックが秀逸だなあ」
かんらと笑う駒ヶ根に、しかしみらいは努めて冷静に語りかけようとする。
「GK、我らが日本国は、かつては世界最高水準と言われていた医療制度を失ってしまった。国民の多くは、高い医療保険に加入しなければ、普通に病院に行くこともできない。貧しい人は、医者にかかれないままに死んでいく。こんな社会、はたして正しいと言えるのかしら？　金銭的余裕がないがために病院に行けない人々も、やはり『自己責任』なの？」
「それはもちろん」
駒ヶ根は快活な笑みを浮かべ、
「自己責任だよ」

と言いきった。
「本人が努力して所得を増やせば、高品質な医療を受けられる。本人が怠けて、所得が足りなければ、できない。自明の論理だね。誰もが同じルールの上で競合している以上、結果を引き受けるのは当然なんだ、とね」
「……」
「千畳敷教授らはすでに、次なる医療制度改革について、ロードマップを提示してきている。これまでの改革は患者側に競争を求めるものだったが、これを病院サイドにも拡大するんだよ。ヴァウチャー制を中心とした自由医療制により、我が国の医療は世界最高水準にまで効率化が図れる、という寸法だ」
近々、日本国で導入が図られている「自由医療制」とは、病院に市場競争を導入することに主眼が置かれている。まさに日本の医療は、後戻りが不可能な改革へと足を踏み出そうとしているのだ。
まずは、保険診療点数制度が廃止され、ヴァウチャー制度に移行する。さらに、株式会社の医療機関の設立も認める。むろん、ＰＵ加盟国の投資家であれば、自由に日本国内に病院株式会社を設立できる。国民は配られたヴァウチャー、つまり医療券を利用し、選択的に病院で治療を受けることになる。医療機関側は国民に配られたヴァウチャーを獲得し

なければ、十分な医療補助金を政府から支払ってもらえない。むろん、ヴァウチャーは保険診療にのみ適用され、自由診療には使えない。

医療機関の株式会社化を全面的に推進するため、ヴァウチャーが集められない僻地から病院が次々に撤退し、都市部に移動していくことが目に見えている。また、大都市以外に立地する病院は、十分な医療補助金を得ることができず、医療設備が老朽化し、医療の品質は低下せざるを得ない。

「福島には、病院が存在しなくなってしまった地域があるそうよ。自由医療制を見越し、十分なヴァウチャーを集められそうにない地域から、早くも医療法人が続々と撤退をはじめている。ＧＫ、郷里の人々が苦しむ様を見るのは、あなたも辛（つら）いでしょう」

自由医療制がこのまま強行されれば、ＰＵ加盟国のグローバル資本の病院が、ある地域に進出し、高品質低価格の医療サーヴィスをコスト度外視で提供することで、周囲の医療機関をすべて廃院に追い込むケースも頻発することになる。むろん、ひとたび地域での独占的地位を確立してしまえば、その後は値上げを繰り返すことになるだろう。そして、値上げしても採算が取れないと判断した時点で、病院は容赦（ようしゃ）なく撤退する。結果、地域住民は医療難民となってしまうのだ。

みらいからの質問には答えず、ふと思いついたように、駒ヶ根は手を打った。

「そういえば、これほどの怪我をしたとあれば、みらいは病院に戻らなくてはならないね」
みらいの裂傷（れっしょう）だらけの四肢や、青黒く痣が浮きあがり腫れあがった顔面を眺め、ＧＫは軽い口調で問うた。
「……ありがとう」
しかしここで再度、ノックの音が大きく響いた。駒ヶ根の許可を受け、すぐさま有明が入室してくる。すると駒ヶ根はみらいに向け、またも満面の笑みを浮かべたのだ。
「いや。今思い出したのだが、涼月准将は確か、あの医院から脱走を企てたんだったね？ということは、わたくしとしてはもう二度と、君をあそこに戻すことはできない」
「……」
「これがどういう意味か、賢い准将殿にはおわかりいただけるね？」
「……理解いたしました、閣下。つまり、私が医療サーヴィスを受けられる場所は、今の日本国内には皆無になったということを」
声の震えを必死で抑え、みらいは駒ヶ根に応えた。
深夜零時というのに、西崎は自らハンドルを握り、憲政党本部へ向かっていた。６年前までの西崎であれば常に暗殺の危険と隣り合わせで、ひとりで車を走らせることなど禁忌（タブー）

であった。大エイジア支配が崩壊したことで、ようやく西崎は自由を取り戻し、今では精力的に全国を飛び回れるまでにもなったのだ。
憲政党本部前には、守衛が常駐している。ゲート前に着くと、西崎は窓を開けた。
「また呼び出されてしもたで」
「政務調査会長殿、お疲れさまです」
顔見知りの守衛は、とくに何の提示も求めることもなく、西崎を通す。憲政党本部エントランス前の駐車場に車を停めた西崎は、薄暗い照明の中を歩きだした。
「なんでこんな夜中に出て来なあかんのや」
西崎はひとりごちたが、彼を憲政党本部に呼び出したのはほかでもない、総裁の空木だ。組織の長からの依頼であるのに加え、深夜の呼び出しなど政治家であれば当たり前のことで、実は別に嫌がってもいない西崎である。
総裁室は4階だ。エレヴェイタ・ホールに向かおうとした西崎は、建物内部の異様な暗さに驚いた。いかに電力供給が安定しないとはいえ、ここは日本の政治の中枢である。憲政党本部内の照明もほとんど落とされているとは、さすがの西崎も初めての体験だった。窓から漏れ入る月の光を頼りに、エレヴェイタへと向かう。
そのとき、嫌な予感が西崎を襲った。なんだ？　自分の抱いた違和感の原因はなんだ

と、目の前の大きな窓ガラスを西崎は見直す。
そこには、西崎の背後十数メートルの位置に立つ、人影が映り込んでいる。帽子を目深に被り、布のようなもので顔を覆っている人物。そしてその人影は、ゆっくりと銃を構えたのだ。
「！」
咄嗟に西崎は身を捩った。と、首のすぐ左横を、銃弾が2発、通り過ぎるのを感じた。
……消音装置つきか。西崎の全身に、冷や汗が滲む。
初撃に失敗したことを悟ったらしい刺客は、すぐさま身を翻し駆け出した。一瞬間の躊躇の後、西崎も走り出した。その黒ずくめの後ろ姿を追いかける。窓枠に切り取られた月明かりが、時折その姿を浮かびあがらせるが、また次の瞬間には闇に沈む。それが幾度となく繰り返される。
とうとう刺客は廊下奥に突き当たり、迷うことなく目の前にあった扉を開けると、階段を上りはじめた。通常は使われない、修理業者専用の階段室だ。西崎も階段に到着すると、長い脚を最大限に活用して三段飛ばしで駆け上った。冷たいコンクリートの空間に、二種類の靴音が幾重にもこだまする。
「待てや、俺を狙う目的を言え！」

2階。3階。なぜ、誰もいない。なぜ、誰も来ないのだ。
4階に着くと、刺客は階段室からフロアへ出た。西崎もその後を追い走る。と、暗闇の中に、漏れ出る明かりが一カ所見えた。あそこか。西崎は護身用に忍ばせていた短銃を取り出す。懸命に身体を躍らせ、その重い扉を押し開けると、そのまま中に転がり込んだ。
「おらあ！　納得のいくハナシ、聞かしてもらうで！」
大声で叫び、西崎は内部を睨み回した。
と、西崎の全身から、一気に力が抜けた。西崎を囲む四方の壁には、過去の総裁たちの写真が飾られている。部屋の中央には巨大な楕円形のテーブルが置かれ、その周囲には革張りのソファ・セットが。さらに、広々とした部屋の最奥には高級感に満ちたデスクがあり、その向こうに腰かけた男がひとり、書き物をしている。
「……総裁」
顎から汗をたらし、西崎は大きく息を吸う。
「なにごとですか」
ようやっと顔を上げ、西崎の姿を見た憲政党総裁の空木は、ゆったりとした動作で立ち上がった。ここは憲政党総裁室なのである。
あまりといえばあまりのことに、西崎は力任せにドアを打った。

西崎から事情を聴いた空木は、すぐに秘書を呼ぶと、守衛室と最寄りの警察スポットに連絡を入れさせた。駆けつけた守衛のひとりに総裁室を守らせ、残りは1階フロアに向かわせる。間もなく、パトカーのサイレン音が聞こえてきた。さすがに首都の中心部とあって、社会秩序維持株式会社の動きも速いようだ。

「なんで本部がこんなガラガラなんですか？」

「そりゃあ、電力供給がこうも不安定とあってはねぇ」

空木は、つまらなそうに答えた。

「近ごろはこんな夜も多いんです。君、最近、夜の本部に来る機会が少なくなってたでしょう？　昔はそりゃあ、毎日のように職員が徹夜仕事をしていたものですが、今のようにいつ電気が落ちるかわからない状況ではね。いちおう、非常用発電機を入れて、万が一のときも電気を使えるようになってるけど、発電機の燃料費もばかにならないからね。党の予算も節約しましょうと、職員が早めに帰宅する日が増えたんですよ。企業献金は友党に集中しているし、我が党は大所帯のわりにまさに清貧そのもの」

「守衛の数も減ってるようやけど」

「今春、経理部長が主導して人員削減をしたんじゃなかったかね。それは君も知ってるで

しょう」
西崎は、大きく嘆息した。
「警察も到着したようやし、行ってきますわ。いつの間にかなくなってた鞄も回収せなあかんし」
「お待ちなさい」
扉に向かおうとする西崎を、空木が止める。
「事情聴取の前に、こちらを見ていってくれますかね。この件について君から意見を聞きたくて、こんな夜中に呼んだんだから」
この非常時になにを、という思いは心中に伏せたまま、西崎は仕方なく、空木から手渡されたノートＰＣの画面を覗き込んだ。

日本国奪還のため駒ヶ根政権に要求する7項目

1、駒ヶ根政権は日本国民の生活を破壊する経済自由化を即刻停止せよ

2、駒ヶ根政権は日本国の国柄を歪(ゆが)めるPUから即時離脱せよ
3、駒ヶ根政権は地方経済の衰退を招く道州制、大選挙区制を廃止せよ
4、駒ヶ根政権は日本国民を二分化する負の所得税を廃止せよ
5、日本国民は安定したインフラストラクチャーの下、安全な生活を営む権利を有する
6、日本国民は不平等、格差のない医療サーヴィスを受ける権利を有する
7、日本国民は健全な生活を営むに足る賃金を得て、働く権利を有する

前記7項目に賛同する同志よ、今こそ、声をあげよ
同志の賛同の声が、我らの真の力となるだろう
今こそ共に立ち上がり、〝日本国の戦後〟を終わらせるのだ

平成四十X年　八月十五日

真の日本奪還を目指す武装戦闘組織
ライジング・サン

「……何ですか、コイツら」

「私も先ほど報告を受けたばかりで、実はまだよくわからないのですがね、どうやら反・経済自由化の旗を掲げた団体らしい。インターネットで反政府を宣言するなんて、なにか子供の遊びみたいだけど、まあインパクトはあります」

「ライジング・サン……」

西崎はその名を口に出してみる。

「この声明が発表されてから、まだ13日。にもかかわらず、早くも国内外に約25万以上、ライジング・サンを支持するというサイトが出現しているとか。職員に調べさせてますがね、今現在も物凄(ものすご)い勢いで拡散している。これは、まだまだ伸びます」

空木はここで、声のトーンを落とした。

「ねえ西崎君、どう思いますか？　どうやら、友党を切り捨てる機会というか、空気が見えてきたと言いますかね。この先の我々の動向について相談したく、信頼する君を呼んだんですよ」

「友党て……新党自由日本を切る言(ゆ)わはるんですか？」

西崎は、まじまじと空木の顔を見つめた。極めて地味(じみ)な、いわゆる平均的日本人の外見

をした空木は、グレイのスーツの胸元に議員バッジをつけていなければ、とても政治家には見えない。居酒屋で部下の愚痴を聞いてやる、出世を諦めた中間管理職と言われたほうが、まだしも納得がいくほどの。

「総裁は、駒ヶ根内閣の経済自由化に賛成してたはずや」

「いやいや、賛成とか不賛成とかね、そんな簡単な問題じゃありません」

空木は顔をしかめて見せた。

「駒ヶ根君が初めて経済自由化を訴えたとき、これは素晴らしい政策だと、私はいたく感動しましたよ。でもね、どれだけ素晴らしい考えであってもね、その国によっては合ってるところもあり、また合わないところもありでね。そういった柔軟な視点からすれば、〝経済自由化〟は、少々急進的にすぎたのは否めません」

思わず怒りの感情が顔に出てしまった西崎を片手で制し、空木は続ける。

「むろん、西崎くんは立派だったと、私は誇りに思っています。経済自由化関連法案を通す際、君がきちんと理屈をもって反対し続けたこと、今でもよく覚えてますよ。『総裁はあのとき、賛成したじゃないか』とか言われたらそれまでだけど、しかし当時、駒ヶ根君の支持率は90%もあったんです。国民がそれを望んでたんです。憲政党総裁として、民意に逆らうなど不可能だった」

「……」
「とにかくね」
椅子から立ち上がった空木は、自分よりはるかに長身の西崎の肩を叩き、
「西崎君。このライジング・サンに接触して、状況を逐一報告してほしいんだ。結局、我が国を正常化できるのは、王道の政治しかない。国民目線に立った、本当に誠実な政治が、今こそ求められているんですよ。そのためにもこのライジング・サンとやらは役に立つと、私は踏んでいる」
空木はにこりと笑い、右手を差し出してきた。西崎は躊躇(ためら)ったが、しぶしぶ握手を交わす。
「それから、その短銃はここに置いていきなさい。事情聴取に向かうには相応しくないからね」
空木の指摘に、西崎は素直に従った。

東京駅丸の内中央口から100メートルと離れていない、日本産業クラブ。ちょうど5年前の夏の夜、この洋館のテラスにGKは降臨し、華々しい革命を成就させたのだ。当時の昂揚感を、進は今でも鮮明に覚えている。血に染まる群衆を浄(きよ)めるかのごとく、とめど

なく降る百合の花と、噎せかえる芳香。あれがすべての始まりだった。日曜の夜ということもあり、東京駅前は閑散としている。人影がほとんどないのに加え、彼らにことさらにもの悲しい印象を与えたのは、日本産業クラブがあまりにも薄汚れていたことだ。東京駅の目の前という立地の良さにもかかわらず、この建物はいまや完全な廃屋である。かつてのエスタブリッシュメントらの憩いの場も、現在は幽霊屋敷さながらだ。

進と、進に付き従う数名の若者は、鈍い軋音を立てる大扉をこじ開けた。施錠されてはいたものの、古びた錠前を壊すことなど進らには容易いことだった。かつては威容を誇った瀟洒な建物であっても、誰もメンテナンスをしない以上、徒に朽ち果てる一方だったのだ。日本産業クラブの劣化は、まるで今の日本を象徴しているかのようだ。

ロビーに入ると、天井近くのアーチ状の窓から月光が差し込んでくる。黴で変色した赤絨毯が一面に敷かれた大広間から、煉瓦造りの回廊を抜け、月光に透かされ埃が舞い光る中を電気室へと向かう。

電気室へ着くや否や、すぐさま乗鞍は配電盤の作業に取りかかった。実は乗鞍の本職は、電気技師なのである。

「仮に電気を復活させられたとしても、回線は死んでいるんじゃないか？」

恵那の質問に乗鞍が得意げに応える。
「自由革命のとき、総務省との間に専用の通信回線を設置した。先日総務省にもぐりこんで調べたら、向こう側の設備はまだ生きていたんだ。だから電気さえ戻れば、普通にネットにアクセスできるはずだよ。問題はむしろ、電力供給のほうだね」
ただ待っている身には随分と長い時間が経ち、若者らの身体には汗がしたたか流れ出した。恵那はヘッドライトをつけ、しゃがみ込んでいる乗鞍の背中に目を向ける。
「いつまでかかるんだ」
「今、終わった」
恵那は埃と汗にまみれた顔をぬぐい、立ち上がった。腰の高さの位置に設置されたブレーカーを、勢いよく上げる。
建物全体が身震いしたような音が響き渡り、どこかから機械的な低周波が聞こえてきた。
「OK、電気は戻った。停電もしてないようだし」
長い間放置されていたにもかかわらず、蜘蛛(くも)の巣を花嫁のヴェールのように被(かぶ)ったロビーのシャンデリアは、これといった破損もなく、天井から進らを見下ろしている。煌々(こうこう)と照らされる光を浴びながら、一行は中央の大階段を上った。広く誂(あつら)えられた踊り場を抜け、回廊を進み、懐かしい小ぶりの扉を入る。かつて、ライジング・サンの諜報部が置か

れていた部屋だ。中央に置かれた円卓を囲み、彼らは革命成功のため、日夜熱い議論を交わしていたのだ。
進は用意してきたＰＣを立ち上げ、埃を被ったパイプ椅子に腰を下ろした。床を這っていたケーブルのひとつをコネクタに差し込む。
「繋がったよ」
進のあまりの淡々とした宣言に、恵那が驚きの声をあげる。
「廃墟なのに、本当に回線が生きてるのか。妙な話だ」
「ライジング・サンが解散したとき、万が一、ここをもう一度使うことがあるかもしれないと思って、システムをそのまま残しておいたんだ」
早速に乗鞍が、すでに日課となっている、ライジング・サン賛同者サイト数を検索してみている。
「すごいよ、進。ついに30万を突破した。ひとつのサイトに名を連ねる人数を考えれば、おそらく支持者は優に１００万を超える！　いや１００万どころじゃないか、数百万、へタしたら数千万だ」
興奮して叫ぶ乗鞍に、進は軽く首肯してみせる。
あの日。みらいと引き離され、傷心を抱えたまま帰京した進は、翌朝、電話の着信音に

起こされた。国土交通省の直属の上司からだった。解雇されるであろうと予想していたにもかかわらず、何のお咎めもなく、淡々と業務を命じられた。まるで、有給休暇を消化した同僚が久しぶりに出省したかのように。

　しかも、同僚だったはずの高尾がぱたりと省に姿を見せなくなったのにもかかわらず、誰の口からも高尾の名は出てこなかった。進が久方ぶりに出省した時点で、すでに高尾の机は整理されており、そこに人がいた形跡は皆無だった。ごく自然に、彼が〝初めからいなかった〟ことが事実としてまかりとおっていたのだ。

　大エイジア連邦時代を思い出す。あの悪夢の時代、進の瞳には明確な敵の姿が映し出されていた。その敵とは、第一地域の国家主席、つまりは大エイジアの連邦主席だった。誰が見ても明らかな独裁者である連邦主席を打倒するために、進は自らの青春を日本国家に捧げたのだ。

　翻って、現在の日本はどうだ。大エイジア時代同様に社会が大いに歪められているのは確かであるのに、敵の姿は杳として見えない。かつての彼らの英雄、ＧＫが各種の魔の自由化政策を主導してはいる。が、ＧＫは別に独裁者ではない。単に選挙で選ばれて公選首相の座に就いているにすぎず、国民側は選挙制度を通じて首相の顔を挿げ替えることも可能なのだ。では、本当の敵は今、どこに？

物思いに沈んでいた進に、恵那が声がける。
「進、おまえはＧＫに代わり、ライジング・サンを再興するんだろう」
「ああ。ＧＫが間違いの神と化した以上、これを正すのは、ＧＫを神の座に押し上げた僕ら、旧ライジング・サンのメンバーの義務だ。そして、あの忌まわしい自由革命がこの場所から始まった以上、僕はまたここから戦いを始めたいんだ」
「新代表殿がそうしたいというならば、そうすればいい。俺たちは従うだけだ」
恵那は物憂げに顎鬚に手をやった。
「2年前の話なんだが。実は俺の祖母さん、国民健康保険にしか入っていなくて、倒れたときに救急車から受け入れを拒否されたんだ。代わりに近隣住民が協力して病院まで運んでくれたんだが、結局、手遅れで死んだ」
思わず返答に窮した進に、恵那は大したことではないと、軽く手を振って見せた。
「つまり、ＧＫの御代より前、さらには大エイジア時代より前の日本。そんな昔の日本は、きっとこんな風じゃなかったんだよな。おまえの言うとおり、ＧＫは明らかに道を誤ったんだ。そして、その事実に多くの国民が気づきはじめている。
俺は思うんだ……おそらく皆、おまえみたいになりたいんだと。すべてを擲ってでも〝正しい道〟を追い求める、おまえのやり方に憧れてる。普通の奴には絶対にできないよ。

なぜならそれは無鉄砲にしか見えないほど、恐ろしい茨（いばら）の道だからだ。しかし今、多くの賛同者が、できれば自分も進と同じ道を歩きたいと、そう夢を見てるんだ。だからさ」
驚いたことに、恵那は進に向かって軽くではあるが笑って見せた。
「おまえがライジング・サン再結集を呼びかけたことに礼を言うよ。俺も乗鞍も、たぶん他の多くの仲間も、気づいてはいたんだ。でも、動けなかった。動きたくなかったのではなく、どうしても動き出すことができなかったんだ。進、おまえはそんな俺たちに再び動き出すための理由をくれた。まあ、でも実は、まだ迷っている部分もあるけどね」
「恵那。本当に……」
本当に始めていいのか。と、進が言いかけたとき、扉の外に足音が聞こえ、若者らは、いっせいに身を固めた。恵那がバッグに手を突っ込み、短銃を引っ張り出した。進も愛用のナイフの柄（え）を握り直す。
しかし、動きはじめていた監視カメラの画面を覗き込んだ進は、小さく声をあげ、そのままもつれるような足取りで扉に駆け寄ったのだ。皆が止める間もなく、震える手で大扉を開け放す。
「進」
脳髄（のうずい）まで痺（しび）れるような、焦がれ続けた甘い声。扉の外、そこには声の主、進が求めてや

まなかった恋人の姿があった。
「みらい」
進は、乱れる呼吸をおさめようと、大きく息を吐いた。みらいの両手足には包帯が不器用に巻かれ、左目には眼帯を付けている。
しかし再会した恋人のような甘い会話などなく、みらいは恵那に厳しい視線を向けた。進が振り返れば、恵那は銃口をみらいに向けたまま、尖る警戒を解こうともしない。
「恵那、みらいは僕の味方だ。下がれ」
進の鋭い声に、恵那は逡巡した後、しぶしぶと銃をおろした。すぐにみらいは、声をあげる。
「恵那、あなたが私を疑っているのはよくわかるわ、でも今は後にして。それより皆、この部屋は駄目よ。すぐに警備隊に見つかって殺されたいならここでも良いけれど、あなたたちにはまだ使命があるのでしょう」
みらいはバッグから短銃を3丁取り出し、恵那に向かって投げた。
「私はこれよりあなたたちを、ライジング・サンの誇る隠し部屋に案内します。これは諜報部リーダーであった私が頑なに守ってきた、GKすら知らされていなかった、父の忘れ形見の設備よ」

みらいの成した言葉に、皆一様に武者震いをした。恵那でさえ、震えた。そうだ、みらいはライジング・サンの真の創立者の娘。GKを導いた涼月博士の、その遺伝子を確かに受け継いだ、地球上でただひとりの存在。かつての戦いの記憶がまざまざと蘇り、皆の血は滾りはじめた。俺たちならやれる、あの革命も俺たちが起こしたのだ、今こそ、俺たちの力で、再び日本を取り戻すのだ！

みらいは皆の先頭に立ち、颯爽と歩きはじめた。埃と黴にまみれ、蜘蛛の巣のあちらこちらに架かる通路であるのに、まるで黄金の道を行く王者のように、みらいの背中は誇り高い。進は眩しくみらいを見つめる。彼女こそ、僕の灰色だった人生を輝かしく照らす、まごうことなき女神なのだ。

かつて、大エイジア連邦という巨大な敵に挑んだ若者の力が、再び集おうとしている。GKに成り代わりこの僕が、国憂う志士の一団を率い、新たな戦いを始めるのだ。

みらいによって導かれた一行が得た、ライジング・サン諜報部の新執務室内に、進の宣言が高らかに響く。

「さあ、驕れる者へ、警告だ」

自由ガーディアンズCEOのアンドリュー・モラレスは、ビルの最上階にある自室から

東京の夜景を眺めていた。

モラレスは日本文化になど興味はない。それでもまだ京都や奈良の神社仏閣などには資産的価値を見出してはいたが、薄汚れた東京には何の思い入れもなかった。しかし、上空から夜景を眺めること自体は好んでいる。その理由は偏に、日本という国を上から見下ろしている快感に酔いしれるためだ。

と、突然、夜景の内の一角が暗くなった。モラレスはじっとその方角を見つめる。

「停電か」

興味もなさそうに呟いた後、またもモラレスの視界の内で、別の一区画が闇に落ちたのだ。ここでモラレスは椅子から素早く立ち上がった。自分の目の前で、東京の夜景が順に縮小していく。数十秒に一回の割合で、ある区画の光がすべて落とされていくのである。

窓ガラスに額がつくほど近づき、暗転する街を見つめるモラレス。その頭上から、突如、大きな音が鳴り響いた。

「港区芝浦地区、計画停電になります」

警報音の後、部屋は一気に闇に包まれた。が、すぐに非常灯がつく。地下の非常用発電機が動き出したのだ。モラレスは即座に秘書課へのホット・ラインを押し、叫ぶ。

「なんだ！　何が起きた！」

怒声が、ガーディアンズ本社内に響いた。

モラレスの叫びがこだまするころ、日本国東京州では、すべての州民が恐怖に陥れられていた。東京送電株式会社がハッキング被害に遭い、システム異常を起こしたのだ。注入されたウイルスによって、東京州全域への送電システムが「計画停電を開始すべし」と誤解したのだ。首相官邸を皮切りに、国会議事堂、新党自由日本本部、憲政党本部、各省庁と順に電気が落ちて行き、最終的に東京州全域のすべての送電が停止された。

照明が消えエアコンが止まり、異常に気づいた住民が建物から脱出しようとしても、エレヴェイタも停止する。すしづめのエレヴェイタに24時間にわたり閉じ込められた人々も多かったという。永田町や霞が関、または病院など重要拠点においては即座に非常用発電機が動きだしはしたものの、中には死者が出たところもあったかもしれない。すべての街灯が消え、信号も消えた道路では、交通事故が多発した。人々は脅え、極度の緊張から暴力行為に及ぶ者も続出した。

発電機のない建屋の電力回復には、一昼夜の時間がかかった。翌日の深夜、やっと電力が復旧すると、人々は安心を求め、テレビとＰＣ端末とに同時に電源を入れた。

しかし、ＰＣを立ち上げた人々が一様に目にしたのは、恐ろしい文言であった。

我々は本日　東京破壊計画　第一弾　を遂行した

これは警告である
すべての偽預言者よ　改心せよ
重ねて言う
これは〝警告〟である

ライジング・サン

第六章

顔のない独裁者

広大な敷地のうちに建つ、草木に囲まれた瀟洒な屋敷の奥で、ダリアの花をむしり、靴底で執拗に踏み潰す音が続いている。同時に、呪いのような呟きも。

「俺の名を奪うのは誰だ」

男の声。

「ライジング・サンは俺がつくったのだ……俺の功績を乗っ取るのは誰だ」

室内に充満する青臭い香とともに、低い声が続いている。

「できることが何もないとは、いったいどういう意味でしょうか。局長の口から直接、詳しい説明をお聞きしたい」

ライジング・サンによるテロ行為であった〝東京大停電〟の2日後の、9月1日。蜩の声が響く夕暮れ時。筑紫琉球州、旧宮崎県日向灘30キロの沖合を震源とする、マグニチュード7強の地震が発生した。海岸沿いの街を震度6強の揺れが襲い、およそ20分後には高さ5メートルの津波が襲来した。

この地域の建築物の多くは、震度6弱までしか対応できない非耐震化構造物であった。地震学者らは繰り返し「来たるべき大地震ではもたない可能性がある」と警告していた

が、道州制導入後の日向地域は困窮を極めており、州民の生命を守るための十分な投資を行うことなど不可能だった。海岸の家屋の過半が崩れ落ちたところに、津波は襲いかかった。巨大な水の壁は建物の残骸を呑み込み、沖まで浚っていった。

「真砂先生、道州制導入以降、すべての公共事業の権限は各道州に引き渡されています。我々には、他道州の事業にかかわる権限がないのはもちろんのこと、予算を振り分ける権利も持っておりません。現地は道路ネットワークが寸断され、救援物資の搬入もままならないという酸鼻たる状況、しかし、国交省にできることはない。ただ、現地の地方整備局から送られてきた情報を官邸に上げ、なんらかの裁断を乞うことは可能です」

真砂の来訪に対して苦しげに応じているのは、国土交通省道路局局長の中津川である。

「この瞬間にも、被災地では多くの日本国民が瓦礫の下に生き埋めになっています。今すぐに国交省が動けば、助かる人がどれだけいるか」

「だから、権限がないんです、我々には！」

中津川はこぶしでデスクを殴りつけた。

「……失礼しました」

すぐに己の行為を恥じたのか、中津川は謝罪の言葉とともに素早く頭を下げ、言葉を続ける。

「すでにＰＵ各国から『被災地の救援事業』について、ＰＵ協定に従い一般競争入札を実施するようにと、日本政府に圧力がかかっているのは先生もご存じのはずです。もしも我々に権限や予算があったところで、経済自由化の美名の下では、すべての公的事業の応札機会はすべての企業に等しく提供されなければならない、というのが大前提です。ここで一省庁が入札結果を待たずに被災地救援に乗り出せば、ＰＵ加盟国の企業のビジネスチャンスを潰すことになり、外交問題に発展してしまう」

苛立ちを抑えようと掌で顔を覆う中津川を見つめ、真砂も奥歯を噛みしめる。

現在の日本は、ＰＵ、つまり日本語に訳すところの「太平洋連合」の加盟国である。ＰＵとは、アメリカ主導で結成された統一市場同盟だ。駒ヶ根政権による経済自由化政策の一環として、自由革命後、日本は即座にＰＵという新たな世界秩序に組み込まれた。ＰＵ加盟国は、互いの貿易に際して関税を完全撤廃することと同時に、あらゆるサーヴィスについて、各国の独自規格ではなくＰＵ加盟国内の統一ルールを守ることが義務づけられている。文化的あるいは歴史的に意味を持つ独自規格は、自由貿易における非関税障壁と見做されるのだ。

さらには関税とサーヴィスの自由化のみに留まらず、資本の移動や人間の移動についても、完全に自由化された。ＰＵ加盟国間では投資が全面的に自由化され、バンダルスリブ

ガワン協定により、国境を越えた人の動きに対しパスポートの提示は求められない。つまり日本の国境検査も、対ＰＵ諸国の住民については廃止されているのだ。

５年前、経済自由化やＰＵ加盟を主導した黎明大学の千畳敷教授は、

「国内市場はＰＵ諸国に対し全面開放しなければなりません。モノ、サーヴィス、カネ、そしてヒトの、国境を越えた移動に関する規制の完全撤廃を完遂するのです。それこそが、未来を見据えた、真の〝開国〟です。我々の愛する日本企業に、世界で戦う力をつけていただくために、今こそ自由貿易に打って出ましょう。もしも自由化に伴い衰退する産業が出たならば、その産業は日本に残るべきではないと判断せざるを得ません。有史以来２６００年の歴史を持つ誇り高い民族、日本人は、強い産業をさらに強化し盤石と成し、弱い産業は潔く諦めて他国に任せれば良い。それが、民族の知恵でしょう」

と熱弁を揮った。彼の美しい言葉は、多くの一般国民を思考停止させるほどの魔力を持っていた。結果として、民衆からのさしたる抵抗もなく、医療や介護、建設や土木、金融、保険、運送、法務、会計、観光、不動産など、あらゆる産業で必須とされていたビジネス上の要件が、次々に緩和もしくは撤廃されていったのだ。

しかし震災が起きた今、中でもとくに運送と土木の自由化は、日本国に大きな傷をもたらすことが白日の下に晒された格好だ。

運送サーヴィスの自由化においては、「5台以上のトラックを持つことが開業要件である」という規制が撤廃され、たとえばトラックを1台しか持たない外国人でも、日本国内で運送業を営むことが可能となった。とくに、発展途上国など国民所得が低い地域の住民が、トラック1台で日本に乗り込む〝ワン・トラック業態〟が爆発的に増えたのだ。PU加盟国からワン・トラック事業者がなだれ込んだ結果、人件費や単価の高い日本の運送事業者は次々に廃業していき、かつては6万社を超えていた事業者数がいまや100を割り込んでいる。しかもPU加盟により日本の投資に関する規制緩和がなされたことも手伝い、現在の日本の運送業界には、PU加盟国の外国人がハンドルを握るワン・トラック事業か、もしくは外国資本に席巻された大手企業しか残っていない。中小規模の国内資本の運送事業者は、完全に淘汰されたのである。

聖域なき経済自由化や規制緩和は、国家の安全保障を壊し、ひとたび非常時となれば、いとも容易く国民の生命や財産を奪うのだ。とくに、外資系企業は日本国とナショナリズムを共有しているはずもなく、日本国民のために命を張ることはない。日向大震災発生後、ワン・トラック業態の外国人事業者はもちろん、外資系大手国内事業者までもが、被災地への救援物資の運送を拒否したのである。「いまだ余震が続いている状況下、二次被災リスクを考えれば、被災地への輸送業務は割に合わない」というのが、その理由であった。

「地域に運送業者が存在しないために救援物資を運べないなど、これが先進国の姿でしょうか？　またそれ以前に、他国民であるから支援しないなど、それが彼らの言う〝地球市民〟とやらの理想とする人間像であるなら、私は彼らを軽蔑することしかできない」

真砂は淡々と自由化の弊害を騙り続けているものの、言葉の端々に滲む悔しさは隠せない。

運送事業に加え、ＰＵ加盟国は建設や土木サーヴィスについても「国境を越えた規制緩和」が実施され、公共事業の仕様書についてもすべて英語化が義務づけられた。自然災害大国の日本は、各地に建設企業が存続しなければ、災害発生時に国民の生命を守ることができない。それにもかかわらず、日本国は建設産業の自由化や規制緩和政策を推進し、他国の企業に対して市場を開放したのだ。

もとより日本は、公共事業の入札について外国企業を排除などしていなかった。ただ大規模プロジェクトを除き、大半の公共事業の仕様書は日本語で書かれており、各種の手続きが猥雑であり外国企業にとって敷居が高かったのは事実ではあった。ＰＵ加盟に際し、この2点が非関税障壁と批判されたため、日本国内の公共事業の仕様書について英語化が義務づけられ、同時に、各種手続きの簡略化が実施された。すでに数々の経済自由化政策によって公共事業の完全一般競争入札が実現していたところにきて、さらに仕様書の英語化と手続きの簡素化が重なり、ＰＵ加盟国の建設企業はいとも簡単に日本の公共事業入札

へ参加することとなった。
「まさに公平公正な公共事業の実現だ」と千畳敷は絶賛したが、日本人にとってのメリットは見つけ難い。日本国内津々浦々で、地場の建設企業や土木企業が倒産していった。もちろん都市部には日系資本の巨大建設事業者が残ってはいる。しかし各地域に根差した建設事業者は着実にその数を減らしたのだ。各道州政府が実施する事業のみならず、一般事業もすべて仕様が英語化され、PU加盟国のコスト競争力が高い土建企業が参入してきたのである。外国企業との競争に敗れた地元企業の廃業が相次ぎ、日本国の自然災害に対する安全保障は、みるみる弱体化の一途を辿った。

そして、一部の心ある識者らが警告していた、最悪の事態が起こる。日向大震災が発生したにもかかわらず、地元の土建業者が全滅していたのである。結果的に、州政府の懸命の努力にもかかわらず、被災地の救援活動は遅滞するどころが、いまだ始まりすらしない有様だ。

それでも、九州北部の都市部を拠点とする大手土建業者が、日本国民としての義侠心を発揮し、なんとか被災地に入ろうとした。が、日向地域には高速道路網が整備されていなかったのである。自治体の予算不足を理由に高速道路の建設が遅れ、旧宮崎県地域には、いわゆるミッシング・リンクがそこかしこに存在していた。一般道の多くが通行不能

になり、また迂回路としての高速道路もない。したがって当然ながら、目的地に辿り着けた業者は少なかった。さらには、九州北部の土建事業者では、被災地の微細な情報を持っているはずもない。情報不足の業者らが個々に行動することで混乱する事態を避けようと、日向地域の自治体の職員たちは、懸命に被災状況を把握し、筑紫琉球州政府に情報を送り続けた。筑紫琉球州政府は土建事業者らに救援活動の割り当てを指示したが、地元を知らない土建事業者が計画どおり効率的に動けた事例は少なかった。

震災発生から丸一日が経過した時点で、さらに恐ろしい事態が明らかになった。現地の消防事業を請け負う自由消防活動株式会社が、被災地に向かうことに難色を示したのである。

自由消防活動株式会社は、筑紫琉球州と消防サーヴィスについて契約した民間会社である。社会秩序維持株式会社などと同様に、株主の過半はグローバル資本だ。サーヴィス費用を支払えない道州では消防署の撤退が続き、火事が発生しても〝燃えるに任せる〟という地域が急増した。筑紫琉球州全域の消防事業を受注していた自由消防活動株式会社の代表はコスト・カッターとして知られ、不採算地域での事業縮小を次々に断行していた。結果、筑紫琉球州の中でもとくに困窮の度合いの激しい一部地域である旧宮崎県北部では、消防車が到着するまでに2~3時間を要するという事態にまで陥っていた。人々は燃え盛る我が家を見捨て、ようやく水が引いた海岸へ避難する以外に、命を長らえさせる術を持

たなかった。
　日向地区の消防事業をビジネスとしているにもかかわらず、自由消防活動株式会社は、州政府からの救援活動への出動要請に躊躇することを続けた。「大災害時の救援活動は、同地域の消防事業受注時の契約書に書かれていない」ということが、その理由だった。
「これが、道州制やＰＵ協定の成れの果てなのですね」
　込み上げる怒りを必死で抑えているのか、真砂の声は明らかに震えていた。
「先生のお気持ちは痛いほど拝察しております」
　中津川は、卓上の資料に視線を落としながら、言葉を選び選び語る。
「しかし現実問題として我々官僚は、予算と法律がなければ何もできない。逆の言い方をするならば、国家権力という巨大な権力を持つ行政府が、法律を無視して行動するなど、民主主義国家としては大問題なのです。しかしたとえば総理が非常事態宣言などをなして、『人道的観点から鑑み、いっさいの法規を度外視で被災者救援に善処せよ』と命じてくれれば、こちらも手の打ちようがある」
「ですから、今こそ駒ヶ根総理は非常事態宣言を行うべきでしょう」
　鋭く指摘した真砂に対し、中津川はやっと顔を上げた。
「もういい、告白しましょう……真砂先生もご存じでしょうが、あの、ライジング・サン

による『日本国奪還のため駒ヶ根政権に要求する7項目』。実のところ、私も内心では賛同しているのです」
「あの過激派の？　……そうなのですか」
硬い表情を崩さず、真砂は中津川を見つめる。
「彼らはテロリストだ。本来であれば我々のような立場の者が彼らの行動を支持するなど、あってはならないことです。しかし、国内の一地方で大震災が起きて、それに対して国交省が何もできないとは、いったいどういうことでしょう？　私は局長として、いや、官僚として、自分に腹が立って仕方がないのです。現在の日本では、中央政府から道州政府への支援の道は、法律によって完全に閉ざされてしまっている。むろんそれこそが道州制なのでしょうが、国民を見殺しにするシステムが正しいはずがない」
駒ヶ根はいったい、なにを考えているのか？　震災後の駒ヶ根内閣は、新自由国軍、これはつまり旧自衛隊であるが、この新自由国軍を現地に派遣することすらしなかったのだ。代わりに、筑紫琉球州自ら自由ガーディアンズに被災地救済の要請をしたと、一部情報が伝わっている。ところが自由ガーディアンズ側は、「災害復旧については契約を締結しない」という社内規定を理由に、救援出動を拒否したという。
「真砂先生。私は来月、局長を更迭(こうてつ)されることが決定しております」

中津川の告白に、真砂は大きく目を見開いた。

「私がライジング・サンを支持していることを、誰かが密告したらしいのです。州外の辺境の土木事務所へ出向となります……先生、日本人を救う方法はないのでしょうか？　本当に我々は、完全に無力なのか？　島流しとなる私にも何かできることがあるのならば、先生よりご教示いただきたい」

ホウライ・チャネルの街頭インタビューの動画を見たみらいは、込み上げる吐き気を必死に抑え込んでいた。先ほど、日向大震災について聞かれた通行人の女性が「筑紫琉球州の災害復興を興味深く見守っている。今回の筑紫の事例を参考にし、東京州は強固な震災対策を検討すべきだ」と語ったのだ。道州制が社会に浸透し、いつの間にか日本国民は他道州の住民について、同じ日本国民であることを忘れるようになっていた。とくに、道州間競争の勝ち組である東京州民が他州の苦悩を完全な他人事として捉えていることを、如実に表してしまったのが、件のコメントだった。

「彼女の言葉は気持ち悪い。でも政権のプロパガンダを盛んに喧伝してきた私のほうが、ずっとずっと気持ちが悪い」

日本国家が壊れてしまった。この自分もまた、報道局の准将として、駒ヶ根政権による

国家解体のプロパガンダ工作に加担してきたのだ。自分が生きていることで、父の愛した日本がバラバラにほどけ落ちようとしている。日々、みらいの絶望感は膨れあがり、留まるところを知らない。数カ月前には自死に身を投じようともしたが、よりにもよって、進に救われてしまった。なぜ？　偶然というには、あまりにも数奇な巡り合わせ。

今みらいがいるのは、新生ライジング・サンのメンバーが集う諜報室である。あの日以来、みらいはこの隠し部屋に居を移した。みらいと同様に省庁から脱走し、テロリスト活動のみを選択した進とともに、みらいはあるのだ。

被災地の救援活動には腰が重いというのに、駒ヶ根内閣は、道州制擁護のプロパガンダには余念がない。中央政府管轄の総務省報道局を中心に、東京発のすべてのマスコミにおいて、「日向大震災における救援活動の遅れは、決して道州制というシステムの問題ではない。各道州には独立採算で非常事態に備える義務があるにもかかわらず、筑紫琉球州はそれを怠った。つまり日向大震災の悲劇は、筑紫琉球州の自己責任である」という報道キャンペーンが頻りに展開されている。

昨夜のホウライ・チャネルにおいて、キャスターの女性はカメラに向かい淡々と語った。

「筑紫琉球州政府による救援活動の遅れで、現地では〝72時間の壁〟が迫っているにもかかわらず、建物の下敷きになったままの方が少なくありません。

筑紫琉球電力供給株式会社や、九州ガス供給株式会社など、各種ライフラインを担う社の対応も遅々として進まず、被災地ではいまだに多くの地域で電気やガス、水道が復旧していません。筑紫琉球州政府は各ライフライン事業者に向け警告を発していますが、事業者側は『震災復旧は契約にない』と反発しています。

州政府とライフライン会社との間で責任の押しつけ合いが行われる中、生命活動の限界である〝72時間の壁〟が迫っているのです。建物の下敷きになることを免れた被災者も、食料や水、電気も供給されない中で、なんとか命を繋いでいる状態です」

滑らかに原稿を読みあげる女性の姿が、全国へ、公共の電波に乗って流される。震災復旧という重要問題を、「州政府とライフライン会社の争い」に矮小化し、駒ヶ根政権の無責任ぶりから国民の目を逸らそうとしているのだ。

「閣下……」

ソファに倒れ込んだみらいに、九重が心配そうに声がけする。

九重は日本人とアメリカ人の混血であり、かつてはみらい直属の部下だった。進と再会する前、日々のストレスで体調が極度に悪化したみらいを、官邸直轄の病院に担ぎ込んだのは、ほかでもない九重だった。しかし5年ぶりに厳しい監視が解かれたみらいは、そのまま憑かれたように自殺未遂を起こし、果ては初の脱走にまで至ってしまったのだ。

日本屈指の要人である駒ヶ根覚人の長年の恋人であった、総務省報道局所属の准将であった、日本国営放送のホウライ・チャネルの看板キャスターであった女性。そして現在は、反政府姿勢を露わにしたライジング・サンの青年らとともにあるみらいに、九重は中佐の位を擲ち、ついてきた。

「この国は狂ってるわ。しかも他の誰でもなく、私たち自身が狂わせてしまった……私は、私を、憎んでいる」

言葉にしてしまったことで、みらいの絶望感はまたも高まった。それを九重は穏やかな声音で励まし、なだめる。徐々にみらいの動揺が和らいでくると、珍しいことに、九重が私的な意見を口にした。

「閣下。このような国、どうせ長くは続きません」

驚いたみらいが何も答えぬうちに、九重はさらに続ける。

「あなたの名前はみらい、〝未来〟です。お父上である涼月博士の遺した言霊は、あなたを裏切ることはない。私は信じています」

震災発生から10日が過ぎても、中央政府は責任転嫁のプロパガンダに明け暮れるのみだった。背に腹を代えられなくなった筑紫琉球州は、復旧事業に際し、独自でPU加盟国に

支援を求めはじめた。すると、ただちにＰＵ加盟国内において、インターネットを用いた入札が自由競争入札方式で行われ、アメリカのゼネコン大手が落札した。

しかし救援事業を落札した米ゼネコン社の救援隊は、待てど暮らせど被災地に到着しなかった。救援隊を出発させない理由について、なんと件の社の広報官は、「危険度の見極めができず、事業がコスト的に引き合うかどうか不明になったため」と回答したのだ。筑紫琉球州政府知事はすぐさま怒りのコメントを発表したが、米ゼネコン側は「筑紫琉球州政府と交わした契約書には、当社の判断で事業キャンセルが可能、と明記されている。当社は契約に従い、事業がコストに見合うかどうかの判断をしている最中だ。筑紫琉球州政府が当社に事業遂行を強制することは不可能であり、いざとなれば法廷闘争に持ち込むことも辞さない」と返した。筑紫琉球州政府と米ゼネコンとで取り交わされた契約は、日本国内法ではなくＰＵ協定という国際法に則っている。国際法を得意とするアメリカ人弁護士を相手に、筑紫琉球州政府が法廷闘争に応じても、勝利の目は考えられなかった。

日本国内からはもちろん、ＰＵ加盟国からも救援部隊が来ない中、現地では筑紫琉球州北部の土建事業者らの手により、復旧作業が細々と進められていった。食糧や水の不足は改善されず、弱い個体から順に死んでいった。

筑紫琉球州政府と米ゼネコンの復旧事業契約をめぐる騒動が報じられたころから、「も

しも、自分が暮らす道州で震災が発生したなら、自分はどうなるのか」という疑問が、多くの日本人の内に生まれはじめた。誰であっても、震災発生時に救援の遅れが原因で死ぬなど、想像したくない事態だ。

ホウライ・チャネルでは相変わらずプロパガンダが放送される中、このころ、政府の手が及ばないインターネットにおいて、ある論文が公開され、急速に拡散しはじめていた。経済自由化に異議を唱え、中央政府による日向地域復旧を求める論文である。書いたのは、ほかでもない、土木工学を専門とする大学教授、真砂茜であった。

「日本の国土面積は、世界のわずか0・25%にすぎない。しかし、M6以上の大地震の20%がこの地・日本国で起きるのだ。しかも国土は細長い弓形をしており、中央には脊梁(せきりょう)山脈が走っているため、川の上流から河口までの距離が極めて短い。さらに日本列島は台風の通り道に位置し、雨季も存在するがため、水害や土砂災害が多発する。

自然災害大国であるこの日本において、国民の生命や安全を守る公共事業を実施することは、中央政府に課せられた義務である。日本とは、各地域に地元の土建事業者が存在しなければ、天災などの非常事態発生時に民が生き延(の)びられない国なのである。にもかかわらず、経済自由化により我が国は、公共事業の事業主体を道州政府に完全に移管し、さら

にはPU協定をはじめとする様々な公共事業の自由化政策により、国内の土木事業者をないがしろにしてきたのだ。

原点に立ち戻ってみれば、政府の重要な役目のひとつに、国民の生命や財産を守るという点がある。一部の学者が机上でつくりあげた経済学に基づき、経済自由化なる愚策を推進し、中央政府の機能を最小化し、事前防災はもちろんのこと、大震災の復旧活動すら法的に制限している現政権。駒ヶ根内閣の経済自由化とは、明確に悪と呼びうる政策なのである。筆者は、経済自由化委員会に身を置く者として、駒ヶ根内閣の経済自由化を『今世紀最大の愚策』として糾弾するものである」

ネット空間を勢いよく泳いでいく、真砂教授の「経済自由化糾弾」論文。これに対し、千畳敷はホウライ・チャネルにおいて、

「地震や台風を恐れるならば、損害保険や生命保険をかけておけば良いのです。叡智持つ我々人類は、不測の事態に常に備える。その備えを怠る者が、自ら破滅を招くのでしょう。賢明な日本国民の皆さんは、愚民の地位に身を落としてはなりません」

と語った。千畳敷ら新古典派経済学者が信奉する教義の中には、「政府が国民を守る」という発想はない。国民を守るのは、国民自身である。すべての人間は最終的には〝個人〟

に分解され、すべての責任を自ら背負わなければならない。だからこそ、人間は競争に勝ち抜くべく努力し、社会や経済が進化する。非常事態だろうがなんだろうが、他者に頼るという発想を持っている時点で、彼らは怠け者なのだ、と。

例により温和な態度で語る千畳敷の姿に、寒気を覚えた者も少なくなかった。国民の財産や生命すらも〝数字〟や〝コスト〟で考えるならば、「いざというときに備えて、保険をかけておけばいい」で話が済んでしまうのかもしれない。しかし本当に、人の生命までをも、数字で割り切ってしまって良いものなのか？

経済自由化に対する批判の声は、もちろん政治家の中からもあがりつづけた。その急先鋒を務める西崎は、国会の代表質問の場で訴えた。

「世界屈指の震災大国であるニッポンで、いわゆる〝経済自由化〟政策によって、被災地に建設産業がない、民営化されてる警察や消防や軍隊は被災民を助けない、などと言うおかしな事態が起きとる。次の震災が自分の足元で起こったとき、自分も筑紫同様に政府から見捨てられてしまうんやないかと、一部の国民が怯えとります。駒ヶ根内閣は、即時、経済自由化宣言を撤回すべきやないんですか」

このとき、西崎の答弁に応じたのは駒ヶ根である。俳優のように甘い容姿、しなやかな身のこなしを崩さずに、駒ヶ根はマイクに向かった。

「すべては、民主主義の結果です。経済自由化のおかげで、我が国は世界屈指の効率的な国家となったではありませんか？　しかも、経済自由化を実現したのは、紛れもない、国民自身だ。
西崎先生、少し時間をください。既得権益にまみれた国会議員に向けてではなく、わたくしは、日本国民に向け語りかけたいのです」
駒ヶ根は、国会論戦を生中継しているホウライ・チャネルのテレビカメラに向かい、しっかと視線を合わせた。
「国民の皆さん。皆さんのデモクラシーの結果によって、わたくしは公選首相となり、経済自由化を実施いたしました。……国民の皆さんに、わたくしは訴えたい。皆さんは輝かしい島に住む、素晴らしい民族だ。だからこそ、世界に羽ばたける、世界で戦える人材に育ってほしい！　それが、日本のポテンシャルを信じているわたくしの、日本国民への心からのメッセージです」
綺麗ごとの羅列。駒ヶ根の弁舌に騙される者は、この国の中にどれほど残っていたのか。政府によるプロパガンダ工作の甲斐なく、日本国民の多くが、道州制やＰＵ協定、さらには経済自由化について疑問を持ちはじめた。インターネットを中心に、真砂や西崎ら、反・経済自由化を叫ぶ論客を支持する国民の声が、静かにではあるが高まっていく。

むろん、ライジング・サンの支援者も増え続けている。
支持を表明するサイト数が激増していることも背中を後押しし、進らは第二の警告を発することを決断した。筑紫琉球州への救援がまったくなされないことを受けての、体制へのさらなる警告である。

偽預言者へ第二の警告である

本日17：00より、ライジング・サンはマス・メディアへの攻撃を開始する
この攻撃の意味をどう受け取るか、それは施政者の気概（きがい）にかかっている
賢明なる者であれば改心し、筑紫琉球州民へ国家としての救いの手を差し伸べるであろう

真の日本奪還を目指す武装戦闘組織
ライジング・サン

犯行声明がネット上に流されると、あまねくマスコミ関係者は慄然（りつぜん）とした。まさしく戦々恐々（せんせんきょうきょう）と、方針もまったく立たぬままとにかく奔走し、何らかの手立てを打とうとした。そして、多くの日本国民が固唾（かたず）を飲む中、指定の時刻を迎えた。時計の針が午後5時ちょうどを差した、その直後。

東京州内のすべての企業や家庭に設置されたテレビとラジオの電源が入り、すべての受信機のすべてのチャネルから、けたたましい男女の声が流れ出したのだ。

『ドロシー、これを見てごらん』

『まあボブ！　素敵なデザインのフード・プロセッサね！　でもボブ、私は仕事が忙しくてキッチンに立つ暇などないわ。料理も苦手だし』

『働く女性であり、子供を三人持つ君にこそ、打ってつけの代物（しろもの）さ。このフード・プロセッサさえあれば、あらゆる家庭料理の下ごしらえを数分で済ませることができるんだよ』

『いつも主人そっちのけで外食ばかりだった問題を、解決できるってわけね』

どうやらアメリカ発の通販番組と思われるものが、放映されているのだ。爆弾テロや火

器による攻撃などを想定して心づもりをしていた東京州民は、啞然とテレビやラジオを見つめた。とくに報道関係者の落胆ぶりと言ったら、目も当てられないものだった。

『プロセッサひとつで、あらゆるご家庭の栄養不足を解消！　お申し込みはこちらまで、今すぐコール！　これで家庭の愛情不足も同時に解消、夫婦仲はさらに円満だ』

『すてきだわ』

『ニュー・ベイビーを授かる日も遠くないね』

『いやあね、ボーブ！』

白々しく重ねられる明るい会話と、出演俳優のどぎついまでの嬌声に、人々は虚しさとともにテレビ画面を見つめ、あるいはラジオ受信機を見つめた。しかも、30分程度で終了となるこのフード・プロセッサの番組だったが、一回目の放映が終わった途端、またも同じ番組放映が始まったのだ。先ほどと寸分違わぬ内容、フード・プロセッサの宣伝劇のみが、ただ延々と繰り返されるのである。

実は駒ヶ根政権は、非常事態に放送電波を独占するシステムを用意していた。このシステムを、ライジング・サンに乗っ取られたのである。国営放送はむろん、民放にしても、

官邸からの強制割り込みに抵抗する術を持たなかった。結果、すべてのチャネルにおいて、まったく同一の通販番組が放送される事態となったのだ。
テロから幾日が過ぎても、この現象は変わらなかった。相も変わらず受信機からは、ボブとドロシーの笑い声が響いてくるのだ。テレビとラジオという二大マス・メディアの情報源としての価値は、東京州内においては事実上、消滅したと言える。東京州民が頼るべきは、インターネットのみとなったのである。

そんなある日の夕刻、ライジング・サンの新課報室に訪問者があった。憲政党所属の衆議院議員で、銀狼というあだ名を持つ西崎。そして、経済自由化委員会の一員でありながら、反・経済自由化の最右翼でもある真砂だ。
真砂の発表した反自由化論文の存在が、西崎と真砂という政府関係者と、反体制レジスタンスであるライジング・サンを繋いだのだ。ネット上での幾度かの探りあいの後、とうとう、今回の会合は実現した。
「なんで涼月みらいがここにおるんや」
西崎は開口一番、至極もっともな感想を漏らした。みらいが駒ヶ根政権のプロパガンダ流布に多大なる貢献をしてきたことは、日本人であれば知らない者はいない事実だった。

恵那が身体を硬くし、乗鞍(のりくら)でさえ大きく唾を飲んだ。
　みらいをかばうように、すかさず進が前に出る。
「僕はライジング・サン代表の〝ススム〟。みらいは、僕の恋人です。彼女も僕らとともに日本奪還を為すために、総務省准将という高位を捨て、レジスタンスに加わったんです。僕は……僕は、いつか彼女との幸せな暮らしを手に入れるために、僕は今、戦っているんだ」
「なんや、えらいデカいこと始めたわりに、抱いてる希望は普通やないか」
　遠くを見るような目をして黙った西崎に代わり、真砂が話を繋いだ。
「初めまして、皆さん。こちらは衆議院議員であられる西崎亨先生、私は真砂茜と申します。日本国民を苦しめている魔の巣窟(そうくつ)である、経済自由化委員会、あの委員会の末席を汚(けが)しています。失礼ながら……あなた方の団体は過激派だと聞いていたのですが、まるで、普通の若者の集まりのようにも見えますね。メンバーはたった四人？」
　真砂から屈託ない笑顔を向けられ、みらいは咄嗟(とっさ)に目を逸らした。彼らは、政権内部の人間である。みらいと駒ヶ根との私的な関係についても、間違いなく把握しているだろう。
「ぎょうさん聞きたいことはあるんやけど、まあとりあえず、本題に入ろか」
　西崎と真砂は、２週間後に計画されている反自由化集会へ協力を求めるため、〝新時代

の国士〟として国民から絶大な支持を集めつつある、ライジング・サンを訪ねたのだ。真砂の説明によると、彼らの反・経済自由化の主張に、全国の国民、企業、組織団体から支援の申し出が殺到しているという。つまり、日本中の心ある人々が駒ヶ根政権の経済自由化政策に疑問を抱き、しかしなにもできずに苦しんでいたところに、ライジング・サンや西崎らが登場したということなのか。それら団体に参加を呼びかけようとしても、政府関係者である自分たちには表立った行動は禁忌(タブー)だ。そこで、ライジング・サンの能力が必要となったのだ。

　西崎による反自由化デモ開催の概要説明が終わると、真砂が、

「続いて、なぜ国民が今動き出さなければならないのか、その意義について、述べさせてください」

　と断り、四人の若者に向けて話しはじめた。

「結局、今回の大震災で明らかになったのは、現在の日本政府が日本国民を守る気もなければ、その能力すら持たないという事実です」

　駒ヶ根政権が道州制を採用している以上、震災等の自然災害の復興の責任は各道州政府にある。そして、現実の日本が道州制を民主主義により導入した以上、大震災が発生した際に中央政府に救援してもらえないのは、まさに正しいのだ。道州制とは、もとより「各

道州の公共サーヴィスを、各道州が自己責任で実施すること」が原則なのである。
つまり、現在の日本国民の閉塞感、恐怖感を醸成した責任者は、日本国民自身なのだ。
駒ヶ根政権は、政権発足直後から常に民主主義に頼ることで、国民にとってはラディカルな改革を推進してきた。国会の答弁において駒ヶ根が「すべては皆さんが民主主義で選んだ結果だ」と語ったのは、論理的には完璧に正しい。経済自由化も、道州制も、ＰＵ加盟も、すべては民主的なプロセスを踏んで実行に移された。駒ヶ根内閣は経済自由化を遂行するに際し、国会を極めて重視していた。国民に直接訴えると同時に、彼らの代議士である国会議員と話し合い、法律を成立させることで、数々の改革を成し遂げてきた。結果的に、日向大震災で数千を超える国民が見捨てられ、市場原理が、国民を守ることよりも上位に置かれている事実が明らかになったのだ。

ではいったい、市場とは何なのか？　市場競争は、確かに国家の行政に較べて効率的だ。しかし市場とは、人間が生きる上での手段のひとつにすぎないはずだ。市場競争を激化させることで、人々が豊かになり、幸福を摑めるならば正しい。そうでなければ、間違っている。ただ、それだけの話だ。

しかし日本国民は自由革命というショックの中で、過激なまでに市場競争を追求する政権を選択してしまった。政府の目的は、市場競争のみを追求することではないのではない

か。市場競争でシステムを効率化してしまうと、非常事態が発生した際に対応不可能になるのではないか。人間は金銭に換算できるものばかりではなく、文化、伝統といった共同体の基盤に囲まれていなければ、健全に生きていくことなど不可能だ。すべてを競争に晒し、潰れる者は自己責任。すべての国民にとって、すべての他者が競争相手であるような社会が、はたして真っ当と言えるのだろうか。

真砂の解説が終わると、西崎が言葉を繋いだ。

「大エイジア時代もえらいバランスを欠いてたけど、今のニッポンは昔とはちごうて、最悪にバランスを欠いとる。民間と公共、もっと言う(ゆ)たら共同体と個人が、その時点で適切なバランスを探りあい、妥協を重ねて、あかんようになったシステムは補修しながら、それでも残さなあかん価値のある古いモンは守る。こういう言葉はあまり濫用(らんよう)したないけど、それがいわゆる〝保守〟というもんやないんか？　細かい検討と補修を繰り返すんが面倒やから言(ゆ)うて、『全部抜本的改革を』とグレイト・リセットしてしもたんが現在のニッポンで、そやから国全体が狂っとんねん。

だいたい、自由革命って名前からしてなあ、何でそんなごたいそうな呼び方せなあかんねんと当時も思おたけど、今考えると、あれはやっぱり革命やったんやな。ほんで、システムをゼロから再構築する革命とやらが、民をどんだけ不幸に陥れるか、ニッポンジンは

今、やっと理解しようとしてるんやと思うわ」
西崎の言葉に、進らは素直に首肯した。
伝統や既存のシステムにすがりつく必要は、必ずしもない。しかし、だからといって「政府の補助がなければ生き残れない伝統など、不要だ」と事業仕分けを突き詰めていくならば、日本国の象徴であり宝である〝皇統〟でさえ無用ということになってしまう。
今の日本は、大エイジア連邦時代と同様に狂っているのだ。日本国に革命をもたらした、GKも狂っている。そして、GKを日本国の最大権力者に押し上げた責任は、自分たちにある。もちろん、GKの手法が民主主義の原則に則(のっと)っている以上、最終的な責任者は日本国民だろう。しかし、GKが神となるための最大の功労者とは、まさに過去のライジング・サンだったのだ。
「私の論文の拡散により、数々の自由化政策が日本国民にとっていかに悪魔の所業(しょぎょう)であるのか、その理論的な裏付けが、一般民衆に広まりはじめました。そして西崎先生の政界でのご活躍により、政治家や省庁、また企業経営者らの意識も高まりつつある。ここで君たちのような、失礼ながらあまり権力に近くない若者であり、かつ反体制活動家の代表であるライジング・サンが、我々の仲間として名乗りを上げてくれるなら、おそらく、我々は大きな時代のうねりをつくり出せると思うのです。どうか、ご協力をお願いしたい」

真砂は、その頑強な体つきに似合わぬ紳士的な素振りで、四人の若者に頭を下げた。

西崎と真砂との会談を終えた1時間後には、進と恵那と乗鞍は、日比谷集会の周知拡散に取りかかった。実はこの時点ですでに、ライジング・サンへの支持を表明するサイト数は70万を突破していたのだ。署名数で言えば、300万人を優に超えていた。2週間後の日曜日、日比谷公園に、たとえば10万人程度の支持者を集めるのは、さほど難しいことには思われなかった。

以前、ライジング・サンの諜報部副長であった恵那は、当時からこの手のネット工作を専門としていた。恵那の仕掛けにより、日比谷集会の情報は日本中のネット・ユーザーに伝わっていく。情報はノードからノードへと拡散していき、最後には民衆の手元に落ちる。ネットから飛び出した情報は、現実世界の海を泳ぎ、無限に拡散し続けていく。

そしてちょうどこの日は、日向大震災による死者数が、やっと発表された日でもあった。すでに死者数は、実に3万人に達していた。むろん、今後、全容が明らかになるにつれ、この数字は増え続けていくのだろう。ここまで一貫して筑紫琉球州へ援助の手を差し伸べなかった駒ヶ根政権に対して、もう警告の時期は過ぎたと、進らは判断せざるを得なかった。

「集会の前に、駒ヶ根政権が筑紫琉球州に為した仕打ちがいかに残酷であったかを、駒ヶ根と東京州民に知らしめておく必要がある。それこそ、骨の髄まで」
怒りをことさらに滲ませる進の言葉に、反対できる者はいなかった。満場一致の上、即時、サイバー・テロ三種が立て続けに実行に移されることが決定した。
まず手をつけたのは、保険サーヴィスの破壊である。東京州民の健康保険、医療保険を区ごとに管理していた保険データ・センターの各支店をハッキングし、すべての保険加入者データを「保険料未払い」と改竄。むろん、政治家や官僚も含む、すべての州民である。
保険料未払いということは、病院で通常の医療行為を受けられないだけでは済まない。たとえば救急車を呼んだとしても、救急隊員が検査器に保険カードを差し込むと「保険料未払いにつき、救急サーヴィスを提供することができません」と警告音声が流れるのだ。高額保険商品の保険料を一度の延滞もなく支払ってきた者でさえ、救急車から乗車拒否されるのである。絶命するか否かの瀬戸際にあった患者は、それこそ真の絶望を知っただろう。
続いてのテロ目標は、物流と人的移動の断絶だ。東京州内のＥＴＣシステムを一括管理していた、東京物流監視センターのシステムを乗っ取り、東京州に入ろうとするすべての車両が「通行料未払い」となるよう設定した。

すでに東京州内では全高速道路はもちろん、大型一般道を含めた多くの道路、橋梁が、ETCにより課金通行となっていた。それらすべての通行バーが閉じられ、物と人の移動が断絶されたのである。外部から東京州に入るためには、鉄道を使う以外に方法がなくなった。また、閉ざされた有料道を回避するために、無料の一般道に車両が集中した結果、史上最悪規模の大渋滞が発生する。まったきまで物流が崩壊した結果、店舗の陳列棚からは商品がみるみる消えていく。

三段階目のテロは、ライフラインの停止であった。民間会社である東京水道供給株式会社の課金管理システムに入り込み、全東京州民が水道料金不払いであると設定した。すぐさま、州内の全企業、全家庭において、水道供給が止まった。事ここに至りて州民は、生命の危険を肌で感じはじめる。

底のない恐怖に駆られ、テレビの電源を入れるが、相も変わらず画面では「凄いだろう、ドロシー」「素敵よ、ボブ」と不毛な男女の会話が繰り返されている。なにかに促されるように、人々は自然とインターネットにアクセスした。そして迷い込んだネット世界において多くの人は、日比谷にて大規模集会が開催されることを知る。サイバー・テロの首謀者がライジング・サンであることを再確認し、畏怖の念とともに、少なからぬ怒りの感情を覚えすらした。

テロを三段階にわたり断行した進は、激しい昂揚感とともに秋の夜空を見上げた。革命の夜を思い出す。
あの日、自由革命が始まった夜。当時のライジング・サン諜報部のメンバー十数人に宛てて送られてきた、一通のメールの存在。そしてその後、夜風の中にふたり語ったとき、みらいが胡乱の男を撃ち殺した、記憶。進の目の前で、みらいはいっさいの躊躇もなく、短銃の火を吹かせたのだ。
大エイジア連邦時代も、一貫して日本に居住していた進とは違い、みらいは幼少時をアメリカで過ごした。生を受けたのは日本国内だったが、大エイジア連邦成立の直前、愛国派への迫害から逃れるため、父である涼月忍に連れられ渡米したのだという。その後すぐに日本は、大エイジアに完膚なきまで制圧され、主権国家の誇りを名実ともに失った。
日本を心から愛し、必死の抵抗を試みようとした涼月博士。彼からの善意の資金提供によって、反連邦組織ライジング・サン設立の構想は練られはじめた。しかし抵抗運動には必ず、旗頭が必要だ。そこで白羽の矢が立ったのが、涼月の下へ出入りしていた日本国籍の好青年、駒ヶ根覚人であった。駒ヶ根、つまり〝GK〟がライジング・サンのリーダーになって以来、みらいは諜報部長の任に就き、日本国内のエージェントに指示を出し続けた。

みらいの言葉は、日本で活動するライジング・サンの末端メンバーを魅了した。みらいの美しい託宣に促され、祖国のために戦う若者の心は鼓舞され、ひとつの目的へと自然に衝き動かされた。進が大エイジア連邦のフィルタリング・システム「イントラネット・グレイト・エイジア」の破壊を目論み、当局に囚われ環境対応措置を施されてしまったのも、元を辿ればみらいの声に従った結果だ。進はみらいの命令によって、男としての自尊心を極限まで剝ぎ取られ、その後の5年間を灰色の中に生きてきたのだ。

第一次ライジング・サンのメンバーらを、ただの駒でしかないように扱った、残酷なみらい。ときに少女のように無邪気な仕草で、周囲を翻弄するみらい。自由革命の夜に見せた、まるで殺し屋そのものの冷徹なみらい。進の腕の中で泳ぎ、蠱惑的な笑みを漏らすみらい。

いったいどれが本当のみらいなのかはわからない。ただ進にわかるのは、自分は近い将来この女性と〝普通の幸せ〟を手に入れる、という予感だけだ。

進の闘争心は、さらに喚起された。張りのある声で、堂々と宣する。

「最後のテロだ。これで総仕上げ」

空が白みはじめ、夜明け間近となったころ。日本国中すべてのテレビ・ラジオからいっせいに、同一のニュースが流れはじめた。上海福建連邦の艦隊が東京湾に迫っているとい

う報せである。この時点ですでに、新自由国軍のシステムまでもが進らの手の内に落ちていた。「識別不能な艦隊が東京湾に接近中」というアラートに従い、戦闘機が現場に急行しても、しかし艦影が見えることは決してない。

騒ぎが最高潮に達したところで、ライジング・サンは犯行声明を、テレビ、ラジオ、ネット等、進らの技術でアクセスできるすべてのメディアに配信した。

私は新生ライジング・サン代表のススムである
日本国民よ、立ち上がるのだ
最後の審判のときは近づいている

同志よ、我らの声に応じよ
我々は真の日本奪還を目指す者
暁（あかつき）の今こそ、ここに記す
我々の名は〝ライジング・サン〟

「日比谷集会という、政治集会を企画しているそうだね」
黄昏どきのＢＯＪ企画局副局長室で、甲斐と西崎が向かいあい、ソファに身を凭せている。
「なんや、久しぶりに人を呼びつけた思たら、お小言かいな！　そやけどな、今回ばかりはやりたいようにやらしてもらうで」
西崎は笑った。
「外敵の脅威にすらまともに立ち向かえへん、情けないことこの上ない駒ヶ根政権。その堕落ぶりを目の当たりにした国民は、ライジング・サンが現れるていう日比谷集会にこぞって駆けつけることになる。そこではたして、何が起きるんか？　群衆が政権に総攻撃をかけるかもわからん、そしたら内戦勃発うことで、それこそ数日後、俺の命はこの世にないやろな」
「……西崎。僕には本当に力がないんだ」
思いつめたように、甲斐は口を開いた。
「実のところＢＯＪの職員のうちには、苦しんでいる者も多い。そしてＢＯＪのみならず、各道州の地方銀行にだってね。少なくない人数の者が、一般の日本人や中小企業を救

いたいと真剣に悩んでいる……でも僕らにはなんの力もない。呆れるほど、自浄能力を持たないんだ」

西崎は何も応えずにただ煙草を咥え、火を点けた。すると甲斐は、

「僕にも一本くれるか」

と問うてきた。

「意外やな。おまえ、遅うに子供授かってから、煙草やめてたんちゃうんか」

「ああ、吸うのは久しぶりだ。京都で過ごした学生時代を思い出すよ。あのころの日本は良かった」

ふたつの白い煙が窓から飛びぬけ、秋風に乗り、空を遠くまで渡っていく。

「お互い、あれからいろいろあったし、齢もいってしもた。時代は変わっていくわけや」

煙草を灰皿に押しつけると、西崎は立ち上がった。夕日は室内を切なく照らし、徐々に翳りを帯びていく。

日比谷集会の開始時刻を間近に控えているにもかかわらず、課報室内で依然パソコンに向かっている進に、恵那が声をかけた。

「一世一代の大勝負の日だっていうのに、なにやってるんだよ。俺らはもう武器の用意も

完璧に済ませたぜ。今は昔と違ってライジング・サンには戦闘部がないんだ。諜報部員全員、自分の身は自分で守らなくちゃならない」
「わかってる、でもみらいから頼まれた仕事なんだ。もう取り掛かって10時間ほどになるかな……いいところまでは到達してるんだが」
進専用の火器をいくつも抱える恵那がＰＣの液晶を覗き込んだとき、ちょうどみらいが入室してきた。
「そろそろ教えてくれるかい。こんな辺鄙な場所まで入り込んで、僕らに見せたかったものとはなんなのか」
進の問いに、みらいが答える。
「ガーディアンズのシステムの最奥に隠されているものとは、自由ガーディアンズ株式会社の株主名簿よ」
すかさず恵那が、鋭い声をあげた。
「それはすでに公開されてるだろうが」
もっともな指摘を受け、みらいはおもむろに、ふたりの青年の目を真正面から見据えた。
「〝本物〟の株主名簿よ。ディスクローズされているものとは違う、一部の既得権益者だけにアクセスが許された、正真正銘の」

みらいの解答を聞くと、恵那のそれまで白けていた表情が、俄(にわ)かに熱を帯びはじめた。
「なるほど、戦死を『サーヴィス提供』と言って憚(はばか)らない自由ガーディアンズの、真の株主名簿。隠されるべきビッグ・ネームが並んでるってわけか」
「『秘密の花園』……これかい」
システム内の迷路を次々に踏破し、どうやら最も堅牢な扉の前に降り立ったらしい進は、息を詰めるように口にした。即座に恵那は、2枚のメモリカードを取り出す。
「早急にダウンロードを済ませたほうがいい。日比谷集会スタートまで、あと1時間だ」
「了解」
ギャラリーが見守る中、大きく重い扉を押し開く。内容を確認する余裕もなく、とりあえずダウンロードを済ませようと、進は手を速めた。
無事にファイルを保存し終えたとき、突然、振動が諜報室を襲った。地面を突き上げるような衝撃が起こり、部屋を激しく震わせたのだ。またも地震かと疑った恵那が椅子から跳ね上がり、窓に駆け寄る。
「なんだ、これは!?」
恵那の背中に後ろから抱きつくように、進とみらいも窓外を覗(のぞ)く。すると彼らの視界に入ってきたのは、想像だにしていなかった代物(しろもの)だった。東京駅前広場に、20台近くの装甲(そうこう)

車が停まっている。見る見るうちに扉が開かれ、見覚えのある制服を身に着けた屈強な体格の男らが、機銃を片手に次々に飛び出してくるのだ。

「官邸警備隊……」

みらいが、呆然と声を発した。日本産業クラブの正面扉付近から、白煙が上がっているのが見える。迫撃弾か何かを撃ち込まれたようだ。

進は慌ててポータブルPCを鞄に放り込んだ。みらいは、メモリカードの1枚を恵那に投げ、残り1枚を自分の内ポケットに滑り込ませる。階下から軍靴が踏み鳴らされる音が聞こえてきた。部下に指示を出しているらしき大声も伝わってくる。

「すぐにここを捨てるわ。地下道から大手町へ向かうのよ！」

「待て、まだボディ・アーマーが……」

「そんな時間はないわ！」

みらいは先頭を切って部屋から飛び出し、細い廊下を駆け抜けた。慌てて恵那が隣室にいた乗鞍を大声で呼び寄せ、三人の若者はみらいの後を追いかけた。

「クラブの北側に、父のつくった逃走用通路がある！　警備隊より早くあそこに辿りつければ、確実に安全な場所まで出られるわ、だから今は頑張って！」

階段を下り、広い回廊を走りはじめたとき、四人の後ろから、一部警備隊の足音が迫る

のが聞こえた。全力疾走に息を切らしつつも、乗鞍は白煙筒を背後に放り投げた。続いて進と恵那が手りゅう弾を順に投げ、数秒後には大きな爆音と悲鳴が辺りに響き渡った。

倒れた隊員の向こうで、機銃の引き金が引かれたようで、連続的な銃声が若者を襲う。銃弾が天井(てんじょう)を嘗(な)めていき、シャンデリアを飾るクリスタルがはじけ飛んだ。頭上から煌(きら)めく破片が無数に降る中、必死で足を動かし続ける。

幾つもの角を曲がった末、とうとう廊下の突き当たりに、目当ての扉が見えてきた。対テロ仕様と思(おぼ)しき、堅牢な鉄の扉。みらいが鍵を開け、続いて恵那が渾身の力でもってノブを回すと、狭い階段室が姿を現した。手りゅう弾の残りを廊下に向かってすべて放り投げた後、扉を閉じる。扉の裏側には7つの閂(かんぬき)があったが、若者らは力をこめ、すべての閂を押し込んだ。そしてすぐさま螺旋(らせん)階段を振り返り、みらいから順に階下へと向かう。

ほとんど落下するような勢いで階段を駆け下り、その場に倒れ込んで息をつこうとした、と、そのとき、頭上で妙な音がした。咄嗟に見上げた四人の前で、なんと天井の一部が剝(は)がれ落ちようとしていたのだ。すぐさま両脇に飛びのく。

凄まじい音が止(や)み、目を開けた進らの前にあったのは、大きな石の塊だった。なんと、進とみらい、恵那と乗鞍とを分断する、巨大な壁が生まれていたのだ。ここにきてライジ

ング・サンは、完全に二手に分かたれてしまったのだ。
「恵那、乗鞍、逃げて！　生き残って！」
みらいは叫ぶと、進の手を握りしめた。
「この、株主名簿はどうする!?」
「安全な場所で開いて！　内容を知ってどうするかは、恵那に任せる！」
巨壁の反対側へ向かって大きく叫び、みらいは走りだした。進とみらい、ふたり連れ立って、酷い臭いの充満する地下道を走り抜けていく。
遠い場所から、銃声が聞こえた。身体が恐怖に強張るが、必死で自分を鼓舞し、とにかく走り続ける。
もはや自身の感覚に、現実感がない。自分はつい最近まで、単なる国土交通省の官僚にすぎなかったのだ。それがいまや反体制の旗頭として、機銃で武装した官邸警備隊に追いかけられている。いつ命を失ってもおかしくない、この状況。握りしめたみらいの手指の感触だけが、今が現実であることを教えている。
みらいの指示のままにさらに扉を幾つか開け、古びた梯子を上りはじめる。マンホールの蓋を開けて外界に飛び出すと、夜空に浮かぶ白い月をバックに佇む、皇居の荘厳な立ち姿が見えた。日比谷通りを南に駆ける。警察サーヴィスのサイレンの音が聞こえてくる。

日比谷の交差点を越えると、公園内に入りきらず道路まで溢れる、大群衆が見えてきた。政府に抗議することを目的に、ライジング・サンの呼びかけに応じた人々だ。あと少しで支援者のもとへ辿りつける、と進が安堵しかけたとき、みらいはここで突然に立ち止まった。

「進、ここからはひとりで向かって」

「え」

一瞬、言葉を失った進に、みらいは断言する。

「私には、私のほうで果たさなければならない職務があるの」

視線を彷徨わせる進の頬を、みらいは両手で挟んだ。

「進、愛してるわ。奥羽の夏の夜を、私はずっと反芻してる。あの3週間の日々だけが、私の人生で唯一の、本当に幸せな時間だった……あなたが私を待っていたように、私も、あなたのような男が、私だけしか愛せない男が現れるのを、ずっと待って生きてきたの。だからこそ5年前、あの革命の夜にも言ったわ、私があなたを裏切ることだけは決してないと」

進の唇に、みらいは口づけた。まるでセックスのように深く深く、舌を絡ませる。永遠のように長く、同時に短い時が過ぎ去り、そしてみらいは耳元で囁いた。

「ねえ進、結局〝顔のない独裁者〟って、誰だったと思う？」

頭に熱が上り、ぼうっとする進を置き去りに、みらいは身を翻した。すぐにその後ろ姿は見えなくなってしまう。

ひとりになった進は、恐ろしいまでの心細さが自身に迫りくるのを感じた。みらいが、いない。僕の初めての恋人、僕の人生の女神が、いない。しかし今はただ、ひたすらみらいの指示に従い、日比谷公園に集まる人々をかき分けて進むしかない。必死で両足を交互に動かす。辺り一帯が、騒音で満たされている。

そのうち群衆がふいに途切れた。公園の広場の真ん中に急拵えの演台がつくりつけられている。その演台の裏には、見覚えのある白髪頭の男性の姿。その直後、西崎の視線が、進を捉えた。

「来てくれたんやな」

西崎は叫ぶと、すぐさま壇上に駆け上がり、大きく伸び上がった。

「ニッポン国民の皆さん、こんなええ日に、日比谷に集まってくれてありがとう！　ほな今から、ライジング・サン代表の〝ススム〟を紹介してもらうで！」

雑音が響く中、進は演台に近づいた。

そのとき。

「西崎！　てめえも裏切り者か！」
「いつから寝返った！　売国奴が！」
「いい気になるんじゃねえ、似非ライジング・サンが！」
群衆の雄叫びに、西崎は当惑しきった表情を浮かべた。しかしすぐに進の方向に手を振り、来るなと合図を送る。
大衆は自分たちを困窮に陥れた駒ヶ根政権のみならず、テロ行為や虚偽情報の拡散によって国民を恐怖に陥れた〝第二次ライジング・サン〟をも恨んだのか。駒ヶ根とともに進を断罪する声々が、そこかしこから大合唱を響かせる。
そのとき、誰かが演台のほうに駆け寄り、声をあげた。
「西崎先生！　ガーディアンズが！」
機銃の連続音が聞こえてきた。すると断罪の声は内容を変えた。
「自由ガーディアンズが来た！」
「ガーディアンズよ、ライジング・サンを駆逐しろ！」
「ススムを殺せ！」
呪いの言葉。深い意味もないままに血を欲する欲望。大衆はもはや、人間ではなかった。ただ対象を破壊することのみに捉われ、攻撃の陶酔と恍惚を得るために叫ぶ、動物の

群れだった。
西崎の中に、怒りと絶望の感情が嵐のように渦巻いた。
「おまえら、なんでおまえらは真剣に自分の国を守らんへのや！　俺もススムも、顔と名前を晒して、日本のために命かけとんねや！　……もうわかったで、おまえらを苦しめてる独裁者は、その実、誰や！　駒ヶ根か？　新党自由日本か？　アメリカかシナか？　それか……」
耳を劈くような爆音が、辺りに轟いた。

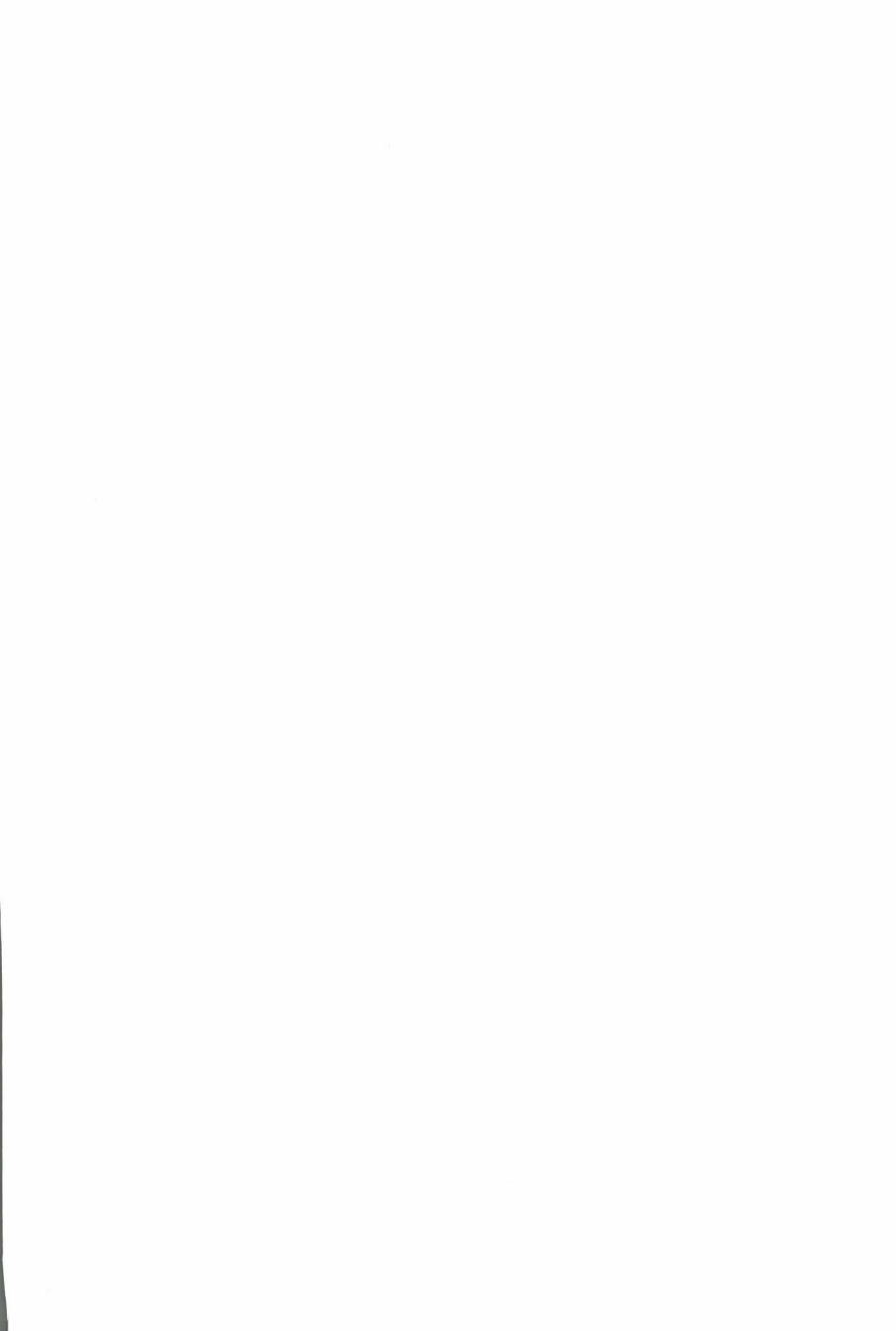
「待ちかねましたよ」
憲政党本部の総裁室で、空木は来客を出迎えた。
「今回はうまくいったようだね。西崎君の件ではあんなミスを犯したというのに」
「その節は失礼しました。しかしすぐに、次の機会が訪れるはずです。総裁にしても、あの時点で西崎先生が生き延びようが亡くなろうが、どちらでもよろしかったのでは」
「そうね、まあ、彼はいい男です。しかし〝政治〟には、明らかに向いていない」
空木はどうでも良さそうに返事をすると、すぐに声音を変えた。
「例のデータは？」

美しい白い手指が、1枚のメモリカードを空木に向かい差し出す。それを受け取った空木はたどたどしい手つきでファイルを開き、画面をスクロールさせた。
「ああ、目的の名が確かにあるね」

Gakuto Komagane　Prime Minister of Japan

空木は暫くの間、しみじみと画面を眺めていたが、ようやっと顔を上げた。
「これで日本は救われることでしょう。まことにありがとうございました」
にこりと笑い、情報提供者に声をかける。
「救世主も独裁者も明確には存在し得ない。愚民は自ら、己を縛る……いつの時代にも大衆とは常に愚かなものです。ねえ、涼月准将」

第七章

「私」という存在

白い花弁が舞う。俺の撒いた百合の花。
後に「自由革命」と呼ばれる政治動乱の牽引役を務めたのは、大エイジア連邦に対する抵抗勢力のひとつ、アメリカの全面的支援を受けた組織、ライジング・サン。ライジング・サンはシナ大陸の混乱の機を逃さず、大規模ゼネストを組織した。さらに、一部の工作員が第一地域の構築した大規模フィルタリング・システム「イントラネット・グレイト・エイジア」を破壊し、自由な情報をインターネット上へ流通させることに成功した。ライジング・サンの呼びかけは主にネットを通じて拡散され、祖国を取り戻すべく数百万の日本人が動きはじめ、国会議事堂包囲にまでこぎつけたのだ。
東京駅のすべての改札が開け放たれ、膨大な数の人が絶え間なく吐き出されている。幾多のプラカードが掲げられ、「祖国を我らに」と書かれた巨大な横断幕を持った一団が道路を横切る。「日本」の名を叫び続ける若者が、躍るように跳ね続けている。
突如、その大騒乱の中に、激しい歓声が沸き起こった。東京駅駅舎の真正面に建つ、レンガ造りの瀟洒な洋館。この洋館の2階のテラスに、この俺が姿を現したからだ。数名の屈強な武装戦闘員に囲まれ、しかしひときわ異彩を放つ、長身の姿。ほかでもない、俺はライジング・サンのリーダー、ＧＫなのである。群衆からは自然と、ＧＫコールが沸き

起こった。
しなやかな立ち姿。武装組織の長でありながら、攻撃性の微塵もなく、あくまで紳士的な男。人々の声援に丁寧に応え、両手を振り続ける。と、ここで俺はいったん後ろを振り返り、部下から大きな箱を受けとると、再び群衆に向き合った。そして手にした箱から、百合の花を撒いた。芳しい香りを周囲に撒き散らす、大振りの花。その無数の白い花弁が東京駅前に舞い、ただでさえ熱狂する人々をさらに眩惑させた。
俺の声に、俺の一挙手一投足に、人々が反応し、ひれ伏している。そうだ、俺にひれ伏せ、跪け。俺は勝たなければならない、俺を踏みにじったすべてのものに。

「まず、お亡くなりになった黒部先生に、心より哀悼の意を捧げたく存じます。……皆さん、わたくしは確かに、愛する日本国の再生のために、強行突破と無謀とを繰り返してきたかもしれない。しかしだからといって、犠牲が生まれて良いと思ったことは、ただの一度もないのだ！　わたくしは悔しい……人は、人は、その命は尊いのだ！」
俺の両眼からは、大粒の涙が溢れた。腹が立って仕様がないからだ。
「国民の皆さん、本当にこの死は必要だったのか？　そうではないだろう、黒部先生にも、長年連れ添った奥方、ご子息夫妻、さらには三人のお孫さんまでいらしたのだ……今

日の悲しみは、彼らだけのものではない、わたくしたち日本人すべての悲しみでもあるのだ！　そう、そうではないか⁉」

家族の話題を使えば民衆の受けが良いと、空木から指導された。その指示のとおりに演説をぶてば、人々は感動の涙に咽ぶのだから、俺は笑いが止まらない。……甘ったれた、お手軽な奴らだ。俺には、祖父母も親も、子もいない。慈しむべき家族など俺は持たない。

昨夜から、俺は一睡もしていない。眠りたい。目は著しく乾き、瞼が眼球に貼りついて仕方がない。おまえらは昨夜、さぞやよく眠ったことだろう。暇だから、働いていないからこそ、こんなデモや思想活動に没頭する気など起こすわけだ。

俺は働いている。身を粉にして、日夜眠らず走り続けている。それに較べ、おまえらの何と気楽なことか。常に赤の他人を旗頭に据え、追随して騒いでいれば良いのだから。おまえ、おまえ、おまえ。"おまえ"のことだ。

自身で行動を起こしてみせろ。企画し準備を進め遂行し、事後の総括までをもすべて。もしも失敗したならば、すべての責任をおまえ自身で負いたまえ。後始末の一切合財を、誰に頼ることもなく己の力の内に、処理をしろ。世間から不合理に執拗に責められて、その身を摩耗させたまえ。

俺を取り巻く群衆よ、おまえらは所詮ゴミである。おまえらはつまり、コロッセウムの

観覧席に座るクズでしかないのだ。おまえらは自ら演台に立つことも武器を取ることもなく、ただひいきの闘士を持て囃(はや)し、賭博(とばく)に興じている一般大衆にすぎない。それも最高程度に愚劣(ぐれつ)な、卑俗極まりない大衆だ。

俺には家族がない。いや、はるか昔にはもしかしたら、そんな存在を持っていたのかもしれない。しかし奴らは、真の家族などではとうていなかったはずである。

幼いころの記憶を辿るならば、4歳の時分の記憶が最も古い。あの夏の日、蜩(ひぐらし)の鳴き声が響く夕刻。薄汚れた台所の流しに、葡萄(ぶどう)が一房(ひとふさ)置かれてあったのだ。つやつやと照り光り、甘い雫(しずく)を無限に垂らす塊が、台の上に無造作に置かれている。俺はそれを一粒、急ぎ口に含もうとした。しかし指を伸ばした途端、頬を焼くような激しい痛みに襲われた。同時に、頭上から響く男の怒声に俺は震えた。ふと気づけば、俺の小さな身体は土間(どま)に転がり、砂を噛(か)んで泣いていた。

またある夜の記憶は、雑魚寝(ざこね)の布団のうちに泣く母親の姿だ。本来であれば守られるべき男から、したたか殴られたがゆえである。顔の左側、瞼(まぶた)から頬が大きく腫れあがり、みるみる腫れは酷(ひど)くなっていく。俺は母親を慰(なぐさ)めようと近づいた。しかし母は、ただあの野蛮(やばん)な男の荒々しい腕だけを求めていた。俺の小さな掌(てのひら)は、この女には不要なものだった。

それに気づいた俺は、女の容姿をあらためて眺め……耐え難い吐き気と戦うこととなる。この女は、俺の母親などではない。ただ薄汚れた醜女、欲にまみれ、ひたすら雄を求める動物にすぎなかった。両手足すべての爪に灰色の汚れが詰まっていた、それが俺の吐き気を催したのだ。俺は母を助けたかった、しかしそれは実現不可能な夢だった。

「何してんの？」
少女が俺に話しかけてきた。
「あんた、お祭りの日に学校にいた子だべ。もう他のみんなは帰ったがら。あんたももっと早く来ればよがったのに」
夏の日だった。辺りには鬱蒼と雑木が生い茂り、その緑の中に煉瓦の道があった。赤煉瓦に導かれ大きな門に辿り着くと、そこで俺はこの可憐な少女に会ったのだ。
俺の想像をはるかに超えた、美しい世界が、塀の中には拡がっていた。
俺は庭に通った。少女は変わらず俺を迎える。
ヴィオラを奏でるのが、少女の趣味だった。白い洋館のテラスに立ち、彼女は細く白い手指で、器用に楽器を操った。それは少女の咽び泣く声のように、静寂の湖畔を渡って

いった。白日夢(はくじつむ)。現世(うつしよ)のものではなく、天界の光景を見させられているのだと、俺は思った。

異世界から招かれたこの天使の名を、なお子、といった。なお子は会津(あいづ)の旧家の娘だった。彼女の祖父が猪苗代湖畔に持つ別荘に、この夏季休暇は預けられていたのである。

七月の終わり、小学校の校庭で催された夏祭りで、あの片隅で俺はこの少女を見かけたのだった。彼女は田舎の町には似つかわしくないほどに美しく、宵闇の中でまるで発光するかのように輝いて見えた。だからこそ俺は、彼女を天使とも思ったのだ。

天使から笑顔のおこぼれをもらいたくて、俺は夏中この山荘に、テラスの下に通った。

「わたしね、会津が大好きなんだぁ」

なお子は、俺によく語って聞かせた。

「会津は昔から大っきなお城があって、立派なあんちゃが育ったし、たくさんの文化が守られてきたんだから。わたしは自分のふるさとを、誰にだって自慢できる」

細い指で庭の草木を撫(な)でながら、なお子は俺を振り返った。

「つってもね、ここも好き……ちっと寂しいけど、湖も森も綺麗だがら。中でもわたしはここのお花が大好き、お花を摘んで部屋に飾るのが好きなんだぁ」

美しく笑うなお子こそ、俺には花に見えた。
いつしか俺は、なお子に何かを贈りたいと考えるようになっていた。そしてある日、思いついたのだ。百合の花。
そう、別荘の周辺には大輪の真っ白の百合がそこかしこに咲いていた。強い芳香を放ち、俺の指を誘う。この花を両手いっぱいに抱え、なお子に届けたなら。なお子は、彼女は、喜んでくれるだろうか？　いつもの憐れむような優しさではなく、本当に心の底からの笑顔を、俺に見せてくれるのだろうか？　……いつしか俺の中で、この夢が根づき、膨らみ続けた。
迷い、逡巡を重ね、しかし俺は止まり続けた。数週間ののち、俺は意を決して、なお子の家の周りの白百合を集めはじめた。百合は噎せ返るほどに強い香を撒き散らし、俺に迫った。それはまるで、気位の恐ろしく高い処女のようだった。不可侵の乙女を一人ひとり屈服させるように、俺の手指は、花の茎を次々に折っていった。
「！」
激しい痛みを背中に感じ、俺はうずくまった。追い打ちをかけるように、老爺の声が背後から響く。

「こら、ここは丹沢家さ敷地だ！　小僧、何してる！」
手にした熊手で、俺の背中をしたたか打ったのだ。じんと広がる痛みに、俺は身を捩(よじ)る。見る間に、集めた花はこの男によってすべてを奪われた。その口ぶりから、丹沢家の庭師だと俺にもわかった。

花盗人(はなぬすびと)は無残にも、清浄(せいじょう)の姫君のもとへ引きずり出された。ちょうどこの日は、夏季休暇の最終日だったのだ。車寄せで自家用車に乗り込もうとするなお子が、庭師と俺の存在に気づき、両の目を大きく見開いた。

これまで見たこともないような不可思議な表情が、なお子の顔に浮かびあがった。彼女はそして素早い動作で、後部座席に乗り込んだ。一言も、なかった。

走り去る黒塗りの車体を見送り、俺は自身が麻痺(まひ)していくのを感じた。これまでは悲しいことがあれば、心と身体は悲鳴をあげてきた。しかし、このときから、俺の内の、いっさいの感情が鈍磨(どんま)したのだ。すべては朧(おぼろ)で、凡庸(ぼんよう)だった。

以来、世界は終始、ぼやけている。

中学、高校と、地元の公立学校に通った。貧しい俺の家では、高校に行かせてもらえたこと自体が奇跡であり、大学進学などとうてい無理な話だった。高校を卒業した後、俺は

なけなしの金を掴み、東京へ出た。昼夜を問わず働いた。2年かかって学費を貯めて、帝都大学に合格した。

帝都のキャンパスへ合格発表に赴いたとき、俺はただただ恥ずかしかった。俺の周囲にいた奴らは皆、小綺麗な服装で肌艶が妙に良かった。いい家でいいものを着ていいものを食い、手塩にかけて育てられたのだと、彼らのまとう雰囲気が如実に物語っていた。それに較べ、俺はひたすら無様だった。

しかし無様な俺にも夢があった、なお子を手に入れるという夢だ。

丹沢、なお子。彼女は確かに会津では名の通った良家の子女だ、しかし日本国内全体で見るならば、垢抜けない田舎娘にすぎなかった。東京には華やかで賢い女が溢れていた。そんな都会で俺は成功し、俺の善意によって、お情けによって、田舎者の愚昧な処女を娶ってやるのだと。

俺は日ごと、なお子と挙げる婚礼の儀式について想像した。なお子はその全身に真っ白の百合の花を飾り、天使そのものの姿で、俺の腕の中に飛び込んでくる。百合の花の下には、真っ白の清浄の裸体があった。しみひとつなく、美しいことこの上なく、男を知らない潔白の乙女。

しかしなお子は、俺を裏切ったのだ。やはり田舎の旧家へ嫁いだのだと、風の噂に聞い

た。当然、俺は激怒した。俺のもの、俺の百合の花が穢されたのだ。真っ白の花弁に黒いしみが広がり、みるみる毒が回りはじめた。花首が茎から腐り落ちるのを待たずして、俺はアメリカに飛んだ。

百合。百合。百合の花が無限に舞う。

大学院生活を謳歌する俺をさらに喜ばせるニュースが舞い込んだ。大エイジアにより財閥解体が断行され、一定以上の財を有す家は、ことごとく資産没収の憂き目に遭ったのだ。さらには、なお子の夫は思想に難ありとして処刑されたと言う。俺は再度、なお子を得ようと発起した。

俺はなお子に宛て、手紙を認めた。

「わたくしは必ず、あなたを救ってみせます。あなたの祖国日本と、あなたのご家族とを、幸福にしてみせます。必ず迎えに行きます。何よりもかによりも、あなたを、幸せにするためにこそ」

書いたのは、ただ、それだけ。舞い飛ぶ、百合の花。幾千もの百合の花。

落ちぶれた女は、また俺の手元に落ちてくる。アメリカで俺は成功し、俺の善意によって、お情けによって、田舎者の愚昧な醜女を娶ってやるのだと。

百合の花は俺を裏切ることはない。

俺はダ・ヴィンチの筆による「受胎告知」を見つめている。額縁の中の小世界で、天使は告げる、主があなたとともにある、と。乙女は、美しくも恥じらい、笑みを浮かべた。男を知らない女。乙女は身ごもり、しかし彼女は清廉潔白。

百合の花が匂い立つ。芳しい、女の臭い。

反大エイジアを標榜する一大組織に接触し、涼月に引き合わされた。涼月に評価された俺は驚き震え、すぐさまライジング・サンのリーダーとなることを決意した。

しかし涼月は、道半ばにして死んだのだ。その後、日本奪還が無事に完了した際、俺はライジング・サン解散声明を高らかに発表した。

俺、俺、俺こそが、愛国者だ。大エイジア時代のみならず、それ以前の時代においてさえ、この国は腐り切っていた。俺があれほどに不幸であったのが、その何よりの証拠だ。この呪われるべき国全体の濁りを、穢れを、清浄の白布で拭ってやったのが、俺という存在なのだ。その勿体なき俺が、日本を取り戻すために身を粉にして戦ってやっているにもかかわらず、なぜこの国は俺の指示に従わず、誤った道筋を選びゆく？

新党自由日本、憲政党、アメリカ、シナ。自分はそれらをまったき統治の下に置き、正しく君臨したはずだ。有史以来、最も恵まれた状態で、日本の不幸な戦後を終わりにする心積もりだったのだ。邪心のかけらもなく、自分はひとえに日本のために、古き良き時代の日本を取り戻すためだけに、すべての「私」を犠牲にしてきたのだ。

プラトンが古(いにしえ)に説いた哲人政治を、人類史上初めて成し遂げるのが俺という男。無私無欲に徹し、すべての叡智(えいち)を兼ね備え、それでいて民衆を衷心(ちゅうしん)より愛す。キリストでさえ成し遂げ得なかった、このすべての民が幸福であるという理想社会を、俺が今こそ為してみせる。

それなのに、それなのにいったい、なぜ？　俺が欲しかった日本は、俺が求めた、あの夏の日本は、日々遠のいていく一方だ。

俺はボッティチェリの筆による「受胎告知」を見つめている。額縁の中の小世界で、天使は告げる、主があなたとともにある、と。乙女は、美しくも恥じらい、笑みを浮かべた。男を知らない女。乙女は身ごもり、しかし彼女は清廉潔白。

百合の花が匂い立つ。芳しい、女の臭い。

涼月が死んだとき、俺は心底怒っていた。
若き日、涼月は俺に言ったのだ。
「共に日本を救おう、悪の支配から日本国民を救おうではないか。君にならそれができる、私にはよくわかるんだ、君には天性のカリスマ性が備わっている。それは私には得難いものだ」
涼月が俺に向かい、右手を差し出してくる。
「君はおそらく、歴史に名を残す名君となるだろう……どうだい、もう決意してくれるね」
まるで理想の父のように温かかった、涼月の大きな手。俺は涙すら流し、固い握手を交わしたのだ。
しかし涼月は俺を裏切った。奴の持つ潤沢(じゅんたく)な資金とは、元を辿ればグローバル投資家のそれだったと俺は知らされた。祖国を救うべく立ち上がったはずの善意の男、涼月博士とは、単なる強欲企業の飼い犬、ロビイストにすぎなかったという事実。
「俺は純粋に日本を愛してるがゆえに戦ってきたというのに、あんたは日本人を裏切るのか！　あんたの身体に流れているのは、日本の血ではなかったのか！」
俺は叫び、その後……その後、どうしたのだったか。いつもここで、記憶の混乱が起こるのだ。思い出せない……いや、何かが脳裏(のうり)に浮かんでくる。

倒れる涼月。拡がる血の海。俺の手に握られていたのは、小さな果物ナイフだった。足下に倒れる涼月の背中には、無数の刺し傷がある。すべての傷から液体がしとどに流れだし、周囲を美しい緋色(ひいろ)に染めている。

ああ、俺は、涼月を殺した、しかし、なぜ、殺した？　今となってはもう、その理由がわからない。涼月。涼月。涼月。もう一度あなたに会いたい。あなたとまた固く熱い握手を交わしたい。そして、たった一度でいい、今のわたくしを褒(ほ)めてください。

俺はエル・グレコの筆による「受胎告知」を見つめている。額縁の中の小世界で、天使は告げる、主があなたとともにある、と。乙女は、美しくも恥じらい、笑みを浮かべた。男を知らない女。乙女は身ごもり、しかし彼女は清廉潔白。

百合の花が匂い立つ。芳しい、女の臭い。

大衆は、常に俺に要求し続ける。何かを為せば、すぐにまた次の要求が押しつけられ。ひとたび失策を犯したなら、途端に俺を叩くのだ。そしてまた、新たな要求が。終わりのない期待の波が、俺を呑(の)み込もうとする。巨浪(きょろう)が、俺を巻き込もうとすぐ背後まで迫っている。ひたひた、ひたひたと、静かに、着実に、迫っている。

大衆は常に無責任だ。絶大な声援とともに支持したかと思えば、容易く意見を翻し、攻撃する。

愚なる大衆よ、ではおまえらは、これまでいったい何を為した？　俺は、俺の顔で戦っている。おまえらは自身を安全な塀の内に置き、観覧席から高みの見物を決め込んで、そうでいながらにして身勝手に、顔を持つ者に対して指示を出す。

昨日までのおまえは、俺を崇拝していたではないか？　俺を救世主と仰ぎ、あなたこそ人生の師、世を救うカリスマであると、褒めそやしたではないか。それがどうだ、偽預言者の言葉にいとも容易く誑かされ、今日は俺を責め立てる。昨日までのおまえは、いったい、どこへ行った？

ああ、百合の花が舞っている、俺はこの百合の花の〝心的外傷〟に勝たなければならない。

なお子の、聖母の処女性を疑うな。俺は神の子、天の摂理から選ばれし、無償の愛を授けられし者。

幾億千の、ゆりの、はな。

日本を手にした男。救世主として崇(あが)め奉(たてまつ)られた男、ＧＫ……いや、何がＧＫだ。俺は駒ヶ根だ。ＧＫなど存在しやしない。俺は、駒ヶ根、覚人だ！　なお子。駒ヶ根だった俺を愛してくれたただひとりの人間、なお子。お母さん。なお子は今、どこにいるのだろう。なお子、早く出会えなければ、俺は壊れていくだろう。お母さん。なお子。君は今どこにいる。俺が狂気へ向かう運命を止めてくれ、なお子。

俺はここにいる。にもかかわらず、君らはなぜ偽預言者の下へ走りゆく？　俺に変わりはない。俺は、俺はここにいる！　あの日、初めて志を立てたあの日から変わらず、俺はここにいるのだ。俺はただ、なお子を助けたかった、彼女のバラ色の頬を、白皙(はくせき)の肌を、清浄の笑顔を守りたかった。なお子となお子の生家を助け、同時に日本を救いたかった。それは実現可能な夢だった。

俺は徐々にバラバラになっていく、瓦解(がかい)していく。なお子、助けてくれ。あの夏の、俺の人生で唯一の美しい思い出。まざまざと蘇(よみがえ)る、百合の花の芳香。あのころの俺はまだ、確かに人間だったのだ。

女は汚い、女は犯されるべき存在だ。奴らは容易く男に身体を開き、それで男を支配する。みらい、おまえは薄汚い。顔こそなお子に似て人形のように美しいが、中身はただの醜女、あの夜の母と何ら変わらない。薄い身体の奥に情欲の火を燃やし、他人の手によっ

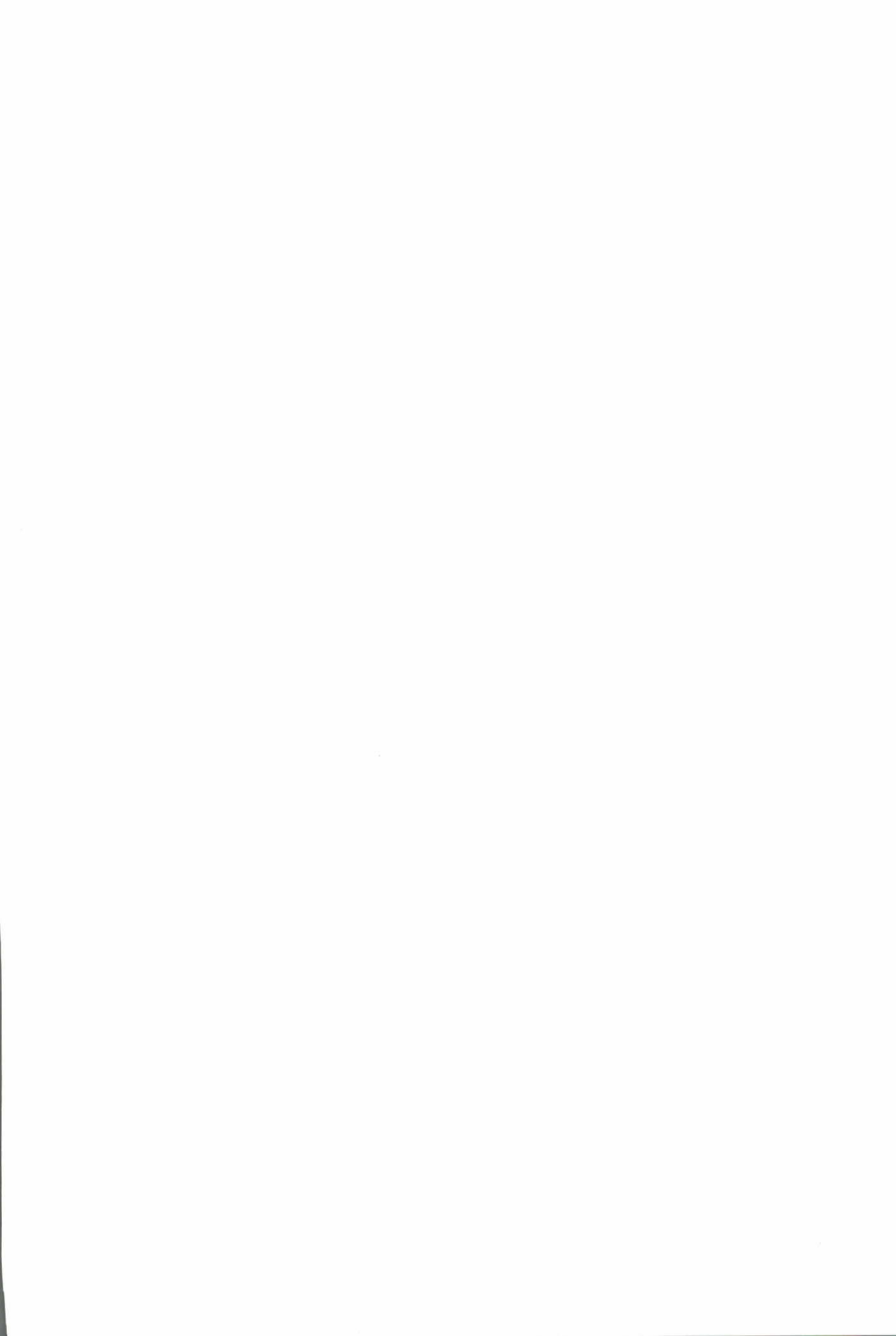
て犯されている。

倒れる涼月の姿が眼前に鮮明に蘇る。拡がる血の海、緋色(ひいろ)の海。ああ、俺は、涼月を殺した、しかしなぜ殺したのだ？　今となってはもう、俺も涼月と同類ではないか。単に奴らの飼い犬ではないか。

日々、俺は壊れていく。崩れゆく俺の姿を、常に「私」が見つめ続けている。私は、「俺」が狂うのを待っている。

助けてください、お母さん。臨界点に達するのも、もう時間の問題だ。

第八章

あまたの十字架

「皆、逃げろ！　走れ！」
叫びながら、進自身もやみくもに走った。目の端に、日比谷公園を囲む装甲車の一団が映った。カーキ色に塗られた車体に、ひときわ目立つ黒騎士のエンブレム。自由ガーディアンズ株式会社の実戦部隊である。
装甲車から傭兵が次々に飛び出してくる。迷彩色のつなぎを身に着けた、ガーディアンズの誇る一等級の殺人鬼の群れ。人種は、てんでバラバラだ。彼ら殺人鬼の中身とは、ＰＵ協定で日本に流入したものの職を得ることができず、〝守護者行き〟を選択した普通の若者なのである。
突如、機械的な声が公園内に響き渡った。
「我々は守護者ガーディアンズ。現在、園内に政権転覆を目論むテロリストたちが潜入しているとの報告を受け、出動しております。駒ヶ根内閣との治安維持特別契約に基づき、テロリストを拘束し、連行いたします。市民の皆さんは、各自の責任において身の安全を確保してください」
進は辺りを見回すが、すでにすべての人が悲鳴をあげながら駆け回っており、園内は大混乱の様相を呈している。と、突然、轟音が響いた。砲弾が演台を直撃し、巨大な炎の柱を立ち上らせた。装甲車からの砲撃である。

内堀通り方面から、鉄の塊が園内へ侵入を始めた。数十台もの装甲車が、市民の憩(いこ)いの場であったはずの場所を我が物顔に進んでいく。草木のみならず人垣までをも容赦なく踏みつける装甲車から、人々は怒号と絶叫をあげながら逃げ惑った。広い芝生の緑が、みるみる赤色に染まっていく。キャタピラーの下から聞こえてくる、肉と骨の潰れる音と、液体の飛び散る音。

紫煙(しえん)が砂埃と混じり、血の臭いとともに進の心身を取り囲んだ。ここはまるで戦場のようだ……いや、今自分が身を置くのは、紛れもなく戦場ではないのか？　進は激しくせき込み、心が折れそうになる瞬間を幾度も乗り越えた。……死ねない。こんなところでは、死ねない。みらいとともに幸せになるまでは、僕は絶対に死ねない！

猛煙の中から、ダーク・グリーンの制服をまとった男が姿を現した。どうやら日本人ではない。その、東南アジア系と思(おぼ)しき若者は、明らかに怯(おび)えていた。しかし何かに急(せ)かされるように、手にした機銃を構え直し、進に銃口を向ける。

咄嗟(とっさ)に進は大振りの石を拾い握りしめ、男の顔面に叩きつけた。体重が乗った一撃に、相手は背中から地面に叩きつけられた。進は馬乗りになると、引きちぎるように機銃を奪い取った。

炎と煙をかいくぐるように、とにかく走り続ける。ふと煙の少ない区域に視線を遣(や)れ

ば、樹齢数百年を誇る大木がことごとく引き倒され、無残にも燃えはじめている。その火花の散る様に気を取られた一瞬の隙に、あらたな傭兵が進の目の前に現れた。眼は著しく充血し、頻りに荒い呼吸を繰り返している。

きっと自分も彼らと同様に、憑かれた者の目をしているのだろう。進は手にした機銃を逆手に相手に殴りかかる。派手に上がる血飛沫。

「殺せ！　殺せ！」

辺り一帯に、死者の重なりが、肉塊の山が生まれていく。

大虐殺が発生している現場から、わずかに1キロほどの距離にある首相官邸。建物前の大通りを、治安維持サーヴィスのパトカーが幾度も通り過ぎる。サイレンの音は途絶えず、時折、爆発音がどこからか聞こえてくる。先ほど首席補佐官より「テロリスト拘束を目的に、自由ガーディアンズが日比谷公園に突入」と、報せがあったばかりだ。まるでクーデターでも発生したかのような緊迫した空気の中、邸内を補佐官らが盛んに走り回っている。

堪えきれず、駒ヶ根は笑いを漏らした。経済自由化に反対する国民が少なくないのは理解するが、彼らが行動を起こすとして、それがなぜ日比谷公園での集会なのか？　真に歴

史を変えたいのならば、経済自由化の司令塔である自分を攻撃すれば良いのだ。ただ群れるしかできない時点で、所詮、彼らの行動など飯事にすぎない。

　ふと着信音に気づき、駒ヶ根は携帯電話を耳に当てた。

「総理」

「千畳敷か。実は今、ちょっと面白いことがあってね」

「私も省内におりますから、騒ぎは存じております」

　騒動について言及していながら、千畳敷の声音は普段と変わらず、相手を深く安堵させるように優しげに響く。自身の持てる、言葉を自在に操る能力により、彼はこれまで多くの政敵を屠ってきた。その意味では千畳敷は学者などではなかった、彼の暗躍は、まさしく政治家のそれだったのだ。

「例の市民集会に自由ガーディアンズが突入し、実弾射撃を行ったそうですね。これは総理の指示による武力行使だと聞きましたが？」

「まあね。テロリストが一般市民のふりをして集会に紛れ込んでるというんだから、それは攻撃しなくちゃならないさ」

「おっしゃるとおりです。不慮の事故が起きてしまったなら、かえってそれを活用し、さらなる幸福へ飛躍するための材料と成せばよいのです。その意味でもぜひ、今回の日比谷

事件を活用し、経済自由化を最終段階に持っていくべきです」
「どういう意味だ」
「日比谷の件が報道されると、国民は大いにショックを受けることでしょう。かのミルトン・フリードマンは、『真の変革は、危機状況によってのみ可能となる』という名言を残しました。まさに、現在の日本は危機的状況の最中にあります。今やらなくて、いつ真の変革を成し遂げられましょう」
「なるほど」
千畳敷は弁舌滑らかに、経済自由化を完成させようと繰り返し、電話を切った。
「つくづく、凄い男だ」
駒ヶ根が呟くと、執務室の扉がノックされた。
「総理、空木憲政党総裁がお見えです」
秘書官に促され入ってきたのは、空木とひとりの女性だった。まるで政治家の秘書そのものの風貌をした細身の女性……変装こそしているが、駒ヶ根には見間違えるべくもない。駒ヶ根のもとから逃げ出した恋人、みらいである。
「総理、御無事で何よりです。日比谷公園が大変な騒ぎになっているようですが、聞くところによると総理自ら、自由ガーディアンズに治安出動を命じられたとか」

駒ヶ根はみらいからひと時も視線を外さず、食い入るように凝視している。そうでありながら、空木には手を振り、言葉の先を促した。
「総理。今日は折り入ってお目通しいただきたいものがありまして、伺ったのです」
空木が書類の束を差し出した。
「今も日比谷で暴れている傭兵の飼い主、自由ガーディアンズの株主名簿です。上場していないガーディアンズですから、もちろん非公開名簿ですけれどね。さすがの私も驚きましたよ、いざ株主名簿を見てみると、新党自由日本の議員の名がずらりと並んでいたのですから。
経済的困窮から〝守護者行き〟を選び、失意のうちに死んでいく傭兵。その命の代償として得た利益の一部を、配当金として新党自由日本の議員が受け取っている！　そして、ガーディアンズ株主名簿の中でも最大の大物が、まさか駒ヶ根総理、あなただったとは」
駒ヶ根は眉を上げ、ここで初めて空木を見た。
「総裁は何をおっしゃっているのかな。このわたくしが、自由ガーディアンズの株主？　他の新党自由日本の議員が株主になっていることは充分にあり得るだろう、騒ぐほどのことでもない。だが、ほかでもない、このわたくしが株主だとは？　総裁殿、少々おふざけが過ぎるようですね」

怒りを禁じ得ず、駒ヶ根は空木に剣呑な視線を送った。駒ヶ根覚人とは、現代日本の最高権力を手にした男。それほどの者がなぜいまさら、傭兵会社の株主に名を連ねるようなリスクを冒さねばならないのだ？　くだらない。金が欲しいならば、より楽な方法が世間にはごまんと溢れている。

空木は黙ってしばらく駒ヶ根を眺めていたが、さらに1枚の書類を取り出した。

「こちらの契約書。これは総理と自由ガーディアンズとの間で取り交わされた株主契約書の写しです。ご覧いただけますか……ここ、総理直筆のサインが入っています。

日比谷公園の一件で、自由ガーディアンズの正体が世界に知れ渡ることになるでしょう。件の殺人会社の株主という立場に君臨し、若者が死ぬ代償として巨額の配当金を受け取っていた。これは日本国のトップとして、言い逃れはできないでしょうな」

駒ヶ根は空木の手から書類をむしり取った。株主契約の文言の下に、自分のサインがある。日付は、2年前の6月10日。

「空木、貴様、どういうつもりだ？　これが本物だという証拠はあるのか？」

「ここでそれを証明することはできません。しかし原本は確かに、自由ガーディアンズ本社にも保管されていますよ」

そのとき、内線電話の着信音が響いた。駒ヶ根が受話器を取ると、秘書官が早口でまく

し立てる。

「閣下。官邸警備隊管制室から、例のライジング・サン代表の〝ススム〟が総理への面会を求めているとの連絡が入りました。いかがいたしましょう、姿を現したところで捕縛、いや射殺という流れでよろしいでしょうか」

駒ヶ根は期せずして、自分の呼吸が一気に荒くなったことに気づいた。込み上げる怒りに、手指が震えてくる。

「……連れてこい」

「連れ……？　それでは、面会を許可するのですか？　総理、しかし……」

「ここに、今すぐ、連れてこい！」

駒ヶ根が大きく一声叫び、受話器を置くと、執務室内は水を打ったように静まり返った。長い静寂が続き、やがて、どこからか足音が聞こえてきた。足音は、扉の前でぴたりと止まる。

「入れ」

扉が開かれ、そこに立っていたのは、進だった。

国土交通省官僚の秋川進であり、第二次ライジング・サン代表のススムである青年。全身は泥と煤にまみれ、服のそこかしこが破れている。右袖を染めた黒色は、きっと誰かの

酸化した返り血。硝煙の臭いを身にまとう彼の背後には、首席補佐官と官邸警備隊数名が無言で立ち並んでいる。まるで戦場から命からがら抜け出そうとしたところを捕縛され、独裁者の下へ連行されてきたテロリストのような。したたか傷ついた、若者。

駒ヶ根は補佐官を見遣り、

「下がりたまえ。彼は昔馴染みだ。進を『第一次ライジング・サン』に勧誘したのは、わたくしなのだからね」

と指示を出した。脅えきった体の補佐官が素早く姿を消すと、官邸警備隊も彼に倣ってドアの向こうに姿を消した。すぐさま、みらいが震える唇を開く。

「進、生き残れたのね」

しかし愛しいはずのみらいには一瞥もくれず、進は駒ヶ根に正面から向かい合った。

「日比谷公園で、多くの者が死んだ。自由ガーディアンズが、無防備な市民を大量虐殺した。あの襲撃はGKの指示だったとまことしやかに囁かれているが、それは、本当なのか？」

進の質問に対し、駒ヶ根はただ薄ら笑いを浮かべた。

「答えられないということは、事実なのか？　GKはこの5年間、確かに僕らの期待を裏切り続けた。それでも、自国民を殺すために軍隊を動かすなんて、そんな馬鹿な真似をす

る人間だとは、僕は思っていなかった」
「黙れ、進。では聞くが、ライジング・サンが行ったテロによっても、多くの市井の人々が無為の死に追いやられたんだ。おまえには、その罪の自覚はないのか？」
駒ヶ根が問い返すと、進は少しく身体を震わせた。
「ＧＫ」
いつの間にか、進の手には小ぶりのナイフが握られている。
「僕は確かに罪を犯した、もはや生きている価値はないのかもしれない。だが、それ以上に、あんたはこの国にとって生きていてはいけない男なんだ。僕らの英雄は、いつからか、日本を滅ぼす悪魔と化していた。
ＧＫ、あんたを権力の座に就けてしまったことの責任をとるために、僕の持てる特殊能力を最大限に行使し、サイバー・テロを行った。僕の能力だ……僕は、この能力がなぜ自分に備わっているのか、その意味がずっとわからなかった。しかし今やっとわかった、あんたを殺すために、日本を救うために、僕はここまで生かされてきたんだと」
言い終わると、進は駒ヶ根に突進した。
と、その瞬間、さして広くもない首相執務室に、銃声が響き渡ったのだ。大きく眼を見開いて、進は後方を振り返った。進の細長い体軀がゆっくりと傾ぎ、倒れていく。

「君がライジング・サンの〝ススム〟だったわけだね。なんとも、恐ろしい才能だ」

空木の後ろで、有明が銃を構えていた。いつの間にか、大扉は開放されていた。有明に続き5名の警備隊員が入室し、空木を守り囲んだ。執務室の床に、血溜りが広がっていく。

「私はねえ、急進的なことはすべて嫌いなのです。過激な行動とは、えてして、良い結果を遠のかせるものです。私は日本が好きです、そして日本という素晴らしい国に、今後も長く長く存続してほしいと願っている。そのためには、急進的にすぎる芽は早期に摘んでおくに越したことはありません。それが、日本という国から私が課せられた、美しい使命なのですよ」

通常時の気弱げな雰囲気を崩さずに、淡々と語る空木。ここで初めて駒ヶ根は、自分の地位が単なる軽い神輿(みこし)にすぎなかった事実に気づかされたのだ。しかし、すべてはもう遅すぎた。

柔和(にゅうわ)な笑みを浮かべ、空木は、倒れたままの進の背中に優しい声音(こわね)で言葉をかけた。

「ライジング・サンですか、君たちは良い働きをしてくれました。しかし、やはり若いね。ネット工作ができるのは、何も君たちだけではない。君たちが一方を扇動しているとき、必ず誰かが他方を扇動しているものなのですよ。だからこそネットは恐ろしく、同時に〝使いで〟がある」

しみじみと語ると、老爺は駒ヶ根を指差し、警備隊に命じた。
「ここにいる男を逮捕なさい。テロリストの青年と殺し屋の女、そのふたりをいちどきに殺害した極悪人として。そして同時に、日本国民を愛国者の仮面で騙し、私欲を貪(むさぼ)っていた下劣な守銭奴(しゅせんど)として」
みらいは身体を強張(こわば)らせた。空木が自分をも裏切ったことに気づき、即座に発煙弾を窓と床とに投げつける。立ち込める紫煙の中、窓ガラスが割られ、待機していた九重が室内に飛び込んでくる。みらいは呆然と立ち尽くすのみの駒ヶ根の頬を叩き、九重には進を抱えさせた。すぐさま、走り出す。
「逃げるのならば、全員射殺しても構いませんよ」
紫煙の向こうから、空木が官邸警備隊に指示を出す声が聞こえる。
三人は必死で走った。銃声が背後から無数に追いかけてきて、命中したひとつの弾丸がみらいの太腿に焼けるような激痛をもたらした。鮮血が溢れ出す。それでも懸命に、走り続けた。

辿りついたのは、ライジング・サンの隠し通路だった。マンホールを降りた場所で、九重が進を肩から下ろす。

「僕は、もうすぐ死ぬのかな」
「死なないわ、くだらないことを言わないで」
みらいは進の受けた腹部の傷をあらため、暫く黙った後、ただ片手でそこを覆った。
「僕は、子供が欲しかったんだ……みらいとの子供」
「……」
「みらいと僕の子供を幸せにできたなら、僕のくだらない人生にも、少しは意味があったんじゃないかって」
みらいは空いた手を伸ばし、進の汚れた頬にあてた。優しく幾度も撫で、その瞳を覗き込む。
「私とあなたは確かに、子孫を残すことはできなかった。でも、それが私たちにとって、どれほどの重大事だって言うの？　……私の子供は、あなたよ、進。ＤＮＡを残すためじゃない、腹を痛めるためじゃない、あなたを育てるために、私は生まれたんだわ！　これからの未来もずっと、あなたの成長を見守っていく。それが、子を成せなかった私の使命なのよ」
「……」
進は大きく噎せ、喀血した。その唇が、顎が、首筋が、鮮やかな緋色に染まっていく。

「……みらい、あの日から、僕ががむしゃらに戦ってきた意味は、あったのかな」
みらいは視線を泳がせた。これまで自分は、第一次ライジング・サン諜報部長として、あるいは駒ヶ根政権のプロパガンダ流布の工作員として、当意即妙の会話をなす能力によってこそ、この乱世を巧く渡ってきたのだ。しかし今、彼女に与えられたのは、人生で最も答え難い質問だった。自身の無力を目の当たりにし、みらいの両眼からは苦い涙が溢れ出た。
流れ続ける塩辛い水のヴェールの向こうで、みらいの恋人は急激に弱っていく。進からの言葉はもはやない。その視線は徐々に虚ろになり、暫くの後、彼はゆっくりと瞼を下ろした。そしてもう二度と、その瞳が開かれることはなかった。
みらいは、進の亡骸を掻き抱いた。まだ、温かい。身体は温かく柔らかいのに、もう彼の魂は異世界へと旅立ってしまった後なのか。みらいは声を押し殺して泣いた。咽びは空間に寂しく木魂し、煉瓦の壁に吸い込まれていく。
みらいの泣く様を見つめていた〝駒ヶ根〟が、その重い口を開いた。
「ああ、やっと、ここまで来た……」
GKが自由ガーディアンズに対し、日比谷公園に集ったテロリストの捕捉を命じた。そ

の際に、多少の犠牲はやむを得ないと伝えたら、モラレスは大いに喜んでいた。
駒ヶ根が自由ガーディアンズの株主のひとりであることは、疑いようのない事実だ。私は自らの意志で株主契約書にサインをした。駒ヶ根は、人殺しによる金儲けをサーヴィスと言って憚(はばか)らない、悪魔のごとき傭兵会社の株主なのだ。
みらい、ここまで来たね。ＧＫの暴走を止めようと、ふたりでここまで頑張ってきた。あの日、あの5年前の革命の夜。私は進たちに警告した、今度の独裁者には顔がないと。……結局私たちは、今度の独裁者には勝てなかったのだね。顔のない思想と、顔を隠した特権階級と、個別の顔を持たない大衆。彼らは一様に無責任だ、彼らは貪欲で、無責任だ！
……失敗に終わったとはいえ、私の役目は終わったようだ。やっと私は眠ることができる。長い、長い、戦いだった」
〝私〟は、〝俺〟とみらいとを見つめ、どちらの存在も愛おしいと思った。
進を静かに横たえると、みらいは服の袖を破き、自分の負傷した太腿をきつく縛った。顔をしかめ、痛みに耐える。そしておもむろに、駒ヶ根を見上げた。
「……もう、すべての記憶を持っているのでしょう」

夢から醒めたように呆然と立つ駒ヶ根を、みらいはとくと見つめた。
「あなたは私の父を殺した。あなたを決して許さないと、それだけを胸に抱いて、今日まであなたの奴隷となってきた。……私という生き物を支えてきたのは、ひとえに恨みの感情だったのよ。祖国の奪還などという崇高な目的のためではなかった。父を失ったあの日から、ずっと」
みらいの透き通るような声が、静寂の中に響く。
「あなたが持つ複数の人格の存在を知ってから、私は『日本のために』と口にする人を盲信することなく、冷めた目で見られるようになった。あなたの中の、もうひとりのあなたとともに、GKの暴走を止めるために、5年前から協力し戦ってきたわ」
「やめろ」
「ライジング・サンを立ち上げ、ひとり孤独に戦いを始め、民衆を熱狂させ、〝日本〟を奪還した。これはあなたにしかできなかった……理想主義者で、攻撃的で、他者の感情に鈍感で……その行動のすべての尻拭いを私に押しつけた、無邪気な悪魔の、あなたにしか。……でもあなたは、目的達成のためにはあらゆる努力を惜しまなかったわ。だからこそ人々は、あなたに大いなる夢を託したのよ。でもね」
みらいは強く、駒ヶ根を睨めつけた。

「最後に教えてあげる。鉄壁の理論武装とともに歩んできたあなたの唯一の誤算は、人の感情を甘く見すぎたこと。〝大いなる夢〟への熱狂も、現実社会の人ひとりの恨みには、決して勝つことはなかった、ということよ」

「やめろ！」

駒ヶ根は、両手で自身の頭を抱え、揺さぶった。そして、大声で叫んだ。

「頼む、やめてくれ。俺は、俺はもう、壊れてしまったんだ！　俺は結局、誰ひとりとして幸せにできなかった。俺は皆を幸福にしたかっただけだ、しかし、すべては裏目に出たんだ！　俺にはもう、もう、生きている価値などない！」

叫び声は徐々に小さくなり、嗚咽が混じり、最後には、ただ泣く憐れな男の姿が残された。蹲ったままに、泣き続ける。情けない声をあげ、全身を震わせ、涙と唾液を垂らす。

そのまま、どれほどの時間が経ったろう。瞼を腫らし、駒ヶ根は顔を上げた。

「……そうだ、みらい。今ここで、みらいの手で、俺を殺してくれ。それしか、もう、選択肢がないんだ」

「生きなさい！」

みらいが鋭く叫んだ。

「生きて、償って。それがあなたに課せられた使命よ。あなたと同様に、私も罪びと。

たくさんの人を殺したわ、多くの人を不幸に陥れ、国さえも壊した。だから私は一生、十字架を背負って、不幸のうちに生きていくと決めている。償いの生をまっとうすると決めているの」

　出血多量のゆえかふらついたみらいを、九重が腕を伸ばし支えた。ぐったりと身を凭せたまま、みらいは残った気力を振り絞り、駒ヶ根に宣する。

「だから、あなたも生きなさい」

　ゆっくりと身を翻し、みらいと九重は歩き出した。

　すると通路の脇に、誰かがしゃがみ込んでいるのが目に入った。……恵那だった。瓦礫の中にぼんやりと虚空を見つめたまま座り、恵那は口を開いた。

「乗鞍は死んだぜ」

　人差し指で彼方を示し、それから恵那は、きっと顔を上げた。

「いいか、散弾銃で撃たれまくって、ぼろ雑巾のように穴だらけになって死んだんだ！　同じ町で、同じ景色を見て育った。兄弟がない俺にとって、乗鞍はまるで俺の本当の弟みたいだった……おまえや進の浅はかな計画に乗ったせいで、俺の人生はめちゃくちゃだ、乗鞍はもう二度と戻らない……おまえ、おまえらのせいで！　俺の日本は！　俺の日本はもう、終わりだ！」

みらいを詰るだけ詰ると、恵那は顔を覆った。九重は大きく息を吸い、
「君たちの感覚からすれば、私にとっては日本もアメリカも同様に祖国と言えるのだろう。しかし、私はどちらの国に対しても特段の思い入れを持たない。それ以上に、一個人であるこの女性を大切に思っている。なぜ君たちは、それほどまで強く、国によって枷をつけられている？　はたしてそれが自由な生き方と言えるのだろうか」
と問うた。しかし恵那は九重に目を向けようともせず、微かな声で呟いた。
「ルーツを愛する感情に理屈などない……もういい、どちらにしろ、この国は終わりだ」

日比谷大虐殺から5日が経った、早朝の憲政党総裁室。西崎が扉を開けると、相も変わらずまるで置物のように、空木がデスクに座っている。
「西崎君、無事で何よりでしたね」
無言のままに西崎は重い身を引きずり、総裁室のソファに倒れ込んだ。銃声と悲鳴が飛び交う大混乱の中、西崎は日比谷公園から何とか脱出することができたのだ。流れ弾による傷は受けたものの、致命傷は皆無だった。
「そういえば、アンドリュー・モラレスは帰国したそうですよ。自由ガーディアンズ株式会社の親会社で臨時取締役会が開かれ、彼のＣＥＯ解任が満場一致で決まったそうです。

表向きには日比谷大虐殺の責任を取らせるといいますが、まあ実のところ、希土紛争の泥沼化で、彼の手腕が必要になったためでしょうね。モラレスは、軍事教練に関しては一級の専門家です。地球上から紛争がなくならないかぎり、彼のビジネスが縮小することもありません」

空木の話を上の空に聞きながら、西崎はぼそりと呟いた。

「ぎょうさんの方が死なはりました」

「報告を受けていますよ。真砂教授も、酷く負傷なされたとか」

「一般女性を助けようとして、ガーディアンズの砲撃でやられた大きい木の下敷きにならはったんです。意識は戻ったけど、障害は残るかもしれへん」

西崎は唇を噛んだ。窓外には朝もやが立ち込め、鳥の囀りさえ聞こえ来る。

「真砂教授はまた違う形で活躍されるでしょう。いや、私もさすがに疲れました……この10年、本当に長い戦いだった……急進的に過ぎる者を抑え、舵を取り続けるのは至難の業でした」

空木は眼鏡を外し、目頭を強く押している。暫しの沈黙の後、西崎がおもむろに口を開く。

「総裁、大エイジア時代からいっつも暗殺の危険に晒されとった俺は、ここまでなんと

か、生き長らえてきました。ほんまは、今回の日比谷集会で、俺は死ぬつもりやった。絶対に俺は撃たれて、敵の満願成就の場になるやろうと思とうたんです。そやけど、死なへんかった」

低いトーンで淡々と重ねられる言葉だったが、ここで、西崎の声が明らかに震えた。

「ライジング・サン代表のススムって若造。テロによる戦いが正しかったんかそうやないかは、俺にはわかりません、せやけど、あいつかてホンマにニッポンを救おうと、力ないなりに必死できばっとったんです。あんなエエ若モンが死んで、なんで俺みたいなんが生き残ってしもたんやろか」

「しかしね、これで日本が救われたのも確かですよ。駒ヶ根内閣は崩壊し、我々憲政党が再び返り咲きますからね。ガーディアンズの株主名簿の一件に、この惨(むご)たらしい日比谷大虐殺が重なったことによって、駒ヶ根と新党自由日本を政権の座から引きずり降ろすことができたんです。

先ほども言ったように、急進的なものは淘汰される、それが私の長い政治家人生の中で得た教訓のひとつです……ああ、そうそう、急進的といえばね、忘れないうちに伝えておきましょう。日比谷大虐殺の混乱に乗じて、君の友人の甲斐君、上司のサミュエル・グエンを殺したそうだよ。甲斐君もその場で即時射殺されたそうで、まあ、喧嘩両成敗(けんかりょうせいばい)ですね」

西崎は固まった。
「……今、何て……」
凍りついたまま、西崎は空木の顔をまじまじと見つめた。
突如、警報音がけたたましく鳴り響いた。

『警告。警告。警告。
上海福建連邦の艦隊が東京湾に迫っています。
警告。警告。警告。
大規模艦隊が東京湾に接近しています。
警告、警告、警告』

アラートが幾度も幾度も繰り返される。
「何だと！　上海が動いたのか!?　いや、またライジング・サンの悪戯（いたずら）……」
空木が跳ねるように立ち上がり、色を失って声をあげる。
「ライジング・サンは死んだ。もうホンマの開戦やな」
西崎も立ち上がったが、しかし反対に空木は、その場にへたり込んだ。

「もう無理だ、今度こそ終わりだ！　旧自衛隊は骨抜き、ガーディアンズも去った今となっては、いったいどう敵軍に立ち向かえというのか……この10年、私は日本を救おうと無私の精神で生きてきた、しかしもう……」

ただ声をあげるだけの老爺。西崎は猛然と走り寄り、そんな空木の襟元を摑み、体を起こした。

「あんた、何やっとんねん！　そんなんで国が救えるか！　ほら、立つんやで。幸いとニッポンには、まだ俺と真砂先生がいるやないか！」

「君は何もわかってはいない……まっすぐで純粋な者に、政治などできるものか。そんな危険な存在は排除しなければ、物事は前に進みはしないのだ」

「アホか！　まっすぐな熱情こそが土壇場では強いんや！　あんた、のらりくらり駒を動かして政界を渡ってきたあんたも、こっからがホンマの正念場なんやで。死なはったモンの代わりに、俺は最後の最後まであがいてみせんで」

西崎は空木をデスク前から押しのけ、ホット・ラインの電源を入れた。

駒ヶ根は、久方ぶりに故郷の町に降り立った。古びた懐かしい木製の駅舎。この街だけが、周囲の近代化から取り残されている。

駅舎から歩きだす。両の足は自然と、かつて自分が通った小学校に向かった。意外なことに、学舎は荒れたまま残っていた。廃校にはなったものの、解体する金もなかったのか。校庭の横には、神社の赤い鳥居(とりい)が幾つも見える。

続いて駒ヶ根は、なお子が避暑に訪れていた別荘の前に立った。臆面(おくめん)もなく、荒れ果てた姿を晒している廃屋。かつての美しい洋館の面影は皆無である。あの夏の、押しつけがましいほどに迫る花の芳香を思い出す。ここを、なお子とともに語り合ったのだ。草木花の中を、あの夏の日に。

駒ヶ根はテラスの真下に歩み寄ろうとした。すると、背後からうめくような、絞り出すような声がかかったのだ。

「……駒ヶ根?」

駒ヶ根が振り返ると、そこにあったのは、薄汚い老女の姿だった。

「本物だ、まっさかこんなとこで……なして、会っちまうだか……」

よろめくように歩み寄ってくる老婆を、駒ヶ根は威嚇(いかく)するように睨みつけた。

「近づくな」

すると老女はそれまでの弱々しさから一転し、しゃがれた怒声まで発したのだ。

「おめぇが、わだしの息子さ殺しただよ！　この、この、人殺しが！」

駒ヶ根は、手にしていたステッキを振った。
「俺に触るな、売女めが」
「……覚えでねのが」
駒ヶ根が振り回すステッキをものともせず、女は前に回り込み、大きく迫った。
「わだしは〝なお子〟……丹沢、なお子だ……！」
駒ヶ根は目を見張った。挙げていた拳とステッキが、行き場を失い彷徨った。いっさいの思考が彼方へと飛び去り、ただ目の前の醜女を凝視する。
「山火事さ起ぎで、家にも火が移っただ、だげんじょ消防車は来ねがった。わだしは小川から水さ掬って、必死にかけ続けだ。したけんじょ、そんなのひとっつも意味無がった。みるみる辺りに生き物さ焼げる臭いが広がった。わだしの目の前で、わだしの血を分けた者が順に焼げっちまった。脂が解け、肉さ焦げでいっただ」
ただれた女。駒ヶ根の襟を両手で摑み、激しく揺さぶる。瞳は濁り、手指すべての爪に灰色の汚れが詰まっている。これと同じ醜悪な女の様を、俺はどこかで、見た覚えがある。
「おめ、おめぇのせいだ！　ぜってぇ幸せにするとか、おめぇがわだしに語ったのは、あれは何だっただよ！」
駒ヶ根は、耐え難い吐き気を催した。

あとがき

日本が終わりの見えない不況に陥ってから随分と長い時が過ぎ、その間、多くの悲劇が起き続けたとも聞く。そういった中、世界を席巻しつつある、いわゆる「新自由主義」や「グローバリズム」が、いかに人間らしい暮らしを破壊する危険性を孕んだ思想であるか、この点をデフォルメし、エンターテインメントとして世に訴えかける。それが、今回の私のなすべき仕事だった。

学者でないどころか政治経済の専門家でもない私に、啓蒙の意を強く含む作品を書く機会が巡ってこようとは、3年前までは夢にも思っていなかった。本書は経済評論家の三橋貴明先生による企画のため、むろん、政治経済の問題をメイン・イシューとして筆を進めた。しかし、私が個人的に描きたかったのは、ひたすら人々の苦悩のありようだった。

主人公の秋川進は自由革命時、その年齢は19歳だ。本来であれば青春を謳歌し、人生でも素晴らしく充実した日々を持てるかもしれない、10代後半から20代前半の日々。その時

期を彼はレジスタンス活動に捧げ、男としての喜びまで完全に失って過ごしたのだ。それがはたして、幸福と言えるのだろうか。

子を持たない私にとって、作品は私の子供も同然だ。作品のみならず、作品の登場人物も私の子供であり、彼らを実際に生きている者のように深く愛している。彼らには幸福へ向かう道筋が無数に用意されていたのだ、しかし、様々の外的あるいは内的な要因により、不幸に向かって突き進んでいく。むろん、彼ら自身に罪はあろう。しかしもしも違う時代に、違う境遇に生まれ落ちていたならば、人並みの幸福を享受し、普通の生をまっとうしていたかもしれない。

人が破滅に陥っていくことは、それは悲劇である。傍から見ている者にとっては、なぜそのような誤った道をあえて選択するのかと、歯噛みすることも多い。が、誰も必死で生きているのだ。どの個体も、自ら不幸になろうと考えてその運命を選び取ったわけではない。皆、幸福になりたかったのだ。

このたび主要登場人物について、少なからぬ心的外傷を抱えている点をクローズ・アップして書かせてもらった。とくに、多感な男女にとってエディプス・コンプレックスをいかに乗り越えるかという問題である。このコンプレックスの存在が一部心理学者によるファンタジーであるか否かについては語らず、今はただ本作の材料のひとつとして扱ったこ

とのみ取りあげたい。
駒ヶ根の狂気の原因とは、非常に乱暴に論じてしまえば、〝父の悪夢の乗り越え〟、この一点に絞られるかもしれない。暴力によって妻や子を支配する男を見て育ち、世の中への恨みを蓄積させていった少年。貧しさと歪な家族形態に起因する精神的重圧により、彼は他者とまともな人間関係を築くことができない。そこに手を差し伸べたのが、なお子だった。彼女は駒ヶ根にとって恋人であり、母であり、不可侵の天使でもあった。過去に母を救えなかったトラウマを克服するために、母の姿をなお子に投影し、代替物として彼女を救いたかった面も多分にあるだろう。しかし同時に、駒ヶ根の持つ世間への劣等感を必要以上に刺激してしまうのもまた、なお子という存在だった。なお子は精神的にも物理的にも恵まれて育ったからだ。それがますます、駒ヶ根の狂気を深めていく。

　進にとって乗り越えなければならなかった壁とは、端的に性的不能の劣等感だ。これは運命の恋人・みらいの出現によって容易く解きほぐされた。私は進とみらいの奥羽の日々が羨ましくてならない。一生の内にこれほど濃密な恋を体験できる人というのも、少ないのではなかろうか。ましてや運命の恋人から「あなたは私の子供だ」と言われる。言われた進も、またそう宣したみらいも、同時に稀有な幸福の感覚を体験したことと思う。しかし、ボニー&クライドも同様だったが、心の猛るままに青春を過ごした若者がいざ悩みを

克服し普通の幸せを願っても、それまで重ねた罪が新たな人生の門出を邪魔するものなのだ。

さて、みらいである。みらいの抱える心的外傷とは、まずは父を殺されたこと、そして、その父を殺した犯罪者が世間では救世主として崇め奉られており、しかも自分はその虚像の神聖化に加担して生きている、という苦悩だ。ましてや、その犯罪者が自身の恋人でもあり、彼のさらなる犯罪を食い止めるために人知れず工作活動に邁進するというのだから、これは根深い。私では、彼女を救う手だてを思いつくことは不可能だ。いや、本作においては他の登場人物についても一様に救うことができなかったのだが、その中でもとくにみらいの懊悩は救いようがないものだった。願わくば、これからの人生を優しい人のみに囲まれて、傷を癒すことに使ってほしい。

生きることは、えてして悲劇である。私にしても自身の人生を振り返ってみて、正しかった選択を思い出すことなど至難の業だ。かえって、よくもこれだけ多くの挫折を繰り返しながらこの齢まで生きてこられたものだと、我ながら驚くほどである。「人はどんな境遇にあっても、やはり生きていかねばならない」。時に残酷にも聞こえるこの台詞が、苦労を重ねれば重ねるほど、より深い意味を持って私に迫ってくる。そう、私たちは、どんな不遇の中にあってもとにかく生き延びて、幸福の時を迎えるために歩を進めなければな

らないのだ。今すぐに100点を目指すのではない。今日50点ならば明日の51点を目指し、もしも明日が49点になってしまったなら、また明後日の50点を目指す。それが、生きる、ということなのだと思う。

だから、死なないのだ。死ななければ、いつか何かが見えるかもしれない。むろん、生きてしまったことで、明日に最悪の不幸を見る運命になるのかもしれない。しかしそれでも、私たちは自分に言い聞かせなければならない、死ぬな、一秒でも長く生きよ、と。

さてここまで語ったことと矛盾するようにも聞こえるだろうが、本書においては、進は必ず死ななければならなかった。この仕事をいただいたとき、まずもって決めたことが、「主人公である進を殉死（じゅんし）させよう」という点だった。彼がどう生きたかよりも、どう死んだかによって、不朽の英雄として民の記憶に刻まれるだろうと考えたからだ。進は死に、駒ヶ根は生き、しかし両者ともに不幸の道筋へ迷い込み、最後まで救われることはなかった。十字架を背負い生きるか、十字架に掛けられ絶命するか。罪を償っていることに変わりはないが、はたしてどちらのほうがより不幸であるだろうか。永遠の命題にも見える。

ただ、物語はあくまで物語だ。小説家ではない私個人としては、進が死んだことが残念でならない。できるならば〝現実世界の進〟については死んでほしくない、と強く思う。伝説になどならなくていい、歴史に名など残さなくていい。ただ、生き、そして、至って

当たり前の小さな幸福を見つけてほしいと、心から願っている。

本書は多くの協力者のご尽力により、形にすることができました。
まず企画と監修をいただいた三橋貴明先生。私ひとりでは絶対に取りあげるはずもない政治経済の題材を扱い小説を書けましたのは、ひとえに先生に出会った運命のゆえです。昨年秋ごろにこのオファーを正式に受け、実際に執筆が始まるまで多くの紆余曲折を経ましたが、何とか出版まで漕ぎ着けることができ安堵しております。また三橋先生が塾長を務める「三橋経済塾」の塾生有志の皆様からは、新自由主義思想が暴走した場合にどういった事態が起きるのか、という点について、多くのアイディアをいただきました。さらに三橋経済塾生の鈴木俊太郎様には、福島県の方言につきご指導いただき、物語に深みを出すことができました。心より謝意を表したく存じます。
今回も装画を担当くださいました、イラストレーターの鈴木康士先生。鈴木先生の絵は緻密かつ繊細で、卓越した天性のセンスに溢れています。このように感性豊かなアーティストが、本編をすべて読んだ上で装画デザインをゼロから提案し、描いてくださるのです。非常に貴重な体験をさせていただいておりますこと、改めて感謝申しあげます。
本作への推薦文をお寄せくださいました京都大学大学院教授であり現内閣官房参与であ

られる藤井聡先生、著者近影のイラストをお描きくださったアニメーターであり作画監督であられる平松禎史先生。両先生には日ごろから個人的に可愛がっていただいており、今回の作品を書く過程でもその親交から多くのヒントを賜りました。また私の極度の遅筆を許し激励の言葉をくださったＰＨＰ研究所学芸出版部編集長の白石泰稔様ならびに『Ｖｏｉｃｅ』編集部の白地利成様、制作を担当していただいた学芸出版部の細矢節子様、また京都弁につきましては、『歴史街道』編集部の佐々木賢治様、学芸出版部の櫻田真由美様にご協力いただきました。まことに有難う存じました。

そして何よりもかによりも、今まさに本書を手に取られ、なにがしかの思いを抱いてくださったであろう読者の皆様方に、心より感謝申しあげます。

※今回は登場人物の苦悩に的を絞り、跋文を書かせていただいた。政治経済の観点からの論説については、三橋先生の他の著作や、もしくは先生のブログ「新世紀のビッグブラザーへ」を参考にされたい。

平成二十五年十月九日

さかき　漣

〈著者略歴〉
さかき漣（さかき　れん）

作家。幼少時より多数の日本の伝統芸能に親しんで育つ。学生時代は哲学や美学などを主に学んだ。美術関係の職業などを経て、文筆業に。日本文化の保持に貢献したいとの思いから、執筆活動を展開している。三橋氏との共作に『コレキヨの恋文』（小学館）、『真冬の向日葵』（海竜社）、『希臘（ギリシア）から来たソフィア』（自由社）がある。

〈企画・監修者略歴〉
三橋貴明（みつはし　たかあき）

経済評論家、中小企業診断士。1969年生まれ。東京都立大学（現：首都大学東京）経済学部卒業。外資系ＩＴ企業、ＮＥＣ、日本ＩＢＭなどを経て、2008年に中小企業診断士として独立。経済指標など豊富なデータをもとに経済を多面的に分析する。単行本執筆と同時に、雑誌への連載・寄稿、各種メディアへの出演、講演活動など多方面で活躍している。著書に『ミャンマー驚きの素顔』（実業之日本社）、『国富新論』（扶桑社）、『「ＴＰＰ参加」を即刻やめて「エネルギー安全保障」を強化せよ！』（マガジンハウス）、『メディアの大罪』『韓国人がタブーにする韓国経済の真実（共著）』（以上、ＰＨＰ研究所）などがある。当人のブログ「新世紀のビッグブラザーへ」の一日のアクセスユーザー数は12万人を超え、推定ユーザー数は36万人に達している。2013年10月現在、人気ブログランキングの「政治部門」１位、総合ランキング１位（参加ブログ総数は約115万件）である。
http://ameblo.jp/takaakimitsuhashi/

顔のない独裁者

――「自由革命」「新自由主義」との戦い

2013年11月26日　第1版第1刷発行

著　　　　者　さかき漣
企画・監修者　三橋貴明
発　行　者　小林成彦
発　行　所　株式会社PHP研究所
東京本部　〒102-8331　千代田区一番町21
学芸出版部　☎03-3239-6221(編集)
普及一部　☎03-3239-6233(販売)
京都本部　〒601-8411　京都市南区西九条北ノ内町11
PHP INTERFACE　http://www.php.co.jp/

組　　　版　有限会社エヴリ・シンク
印　刷　所　図書印刷株式会社
製　本　所　図書印刷株式会社

ISBN978-4-569-80748-5

〈著者略歴〉

さかき漣（さかき　れん）

作家。幼少時より多数の日本の伝統芸能に親しんで育つ。学生時代は哲学や美学などを主に学んだ。美術関係の職業などを経て、文筆業に。日本文化の保持に貢献したいとの思いから、執筆活動を展開している。三橋氏との共作に『コレキヨの恋文』（小学館）、『真冬の向日葵』（海竜社）、『希臘（ギリシア）から来たソフィア』（自由社）がある。

〈企画・監修者略歴〉

三橋貴明（みつはし　たかあき）

経済評論家、中小企業診断士。1969年生まれ。東京都立大学（現：首都大学東京）経済学部卒業。外資系IT企業、NEC、日本IBMなどを経て、2008年に中小企業診断士として独立。経済指標など豊富なデータをもとに経済を多面的に分析する。単行本執筆と同時に、雑誌への連載・寄稿、各種メディアへの出演、講演活動など多方面で活躍している。著書に『ミャンマー驚きの素顔』（実業之日本社）、『国富新論』（扶桑社）、『「TPP参加」を即刻やめて「エネルギー安全保障」を強化せよ！』（マガジンハウス）、『メディアの大罪』『韓国人がタブーにする韓国経済の真実（共著）』（以上、PHP研究所）などがある。当人のブログ「新世紀のビッグブラザーへ」の一日のアクセスユーザー数は12万人を超え、推定ユーザー数は36万人に達している。2013年10月現在、人気ブログランキングの「政治部門」1位、総合ランキング1位（参加ブログ総数は約115万件）である。

http://ameblo.jp/takaakimitsuhashi/

三橋貴明

さかき漣

画：平松禎史

京都大学教授／内閣官房参与 藤井聡氏が絶賛&驚愕！

「過激な自由」がもたらす最悪の未来。
このフィクション……ヤバすぎです！

他民族によって奪われた「祖国・日本」を取り戻すため、
新たな指導者を戴く革命を成就させた日本国民。
だが、それは新たな戦いへの序曲に過ぎなかった……。

衝撃の近未来小説。

装画：鈴木康士

PHP研究所
定価：本体1,600円（税別）

さかき漣 著
三橋貴明 企画監修

PHP

「GKはいまや、罪びとを率いる神なのよ」
進の体は震えた……全能なる神は立ち、我々を自由の下へ導きたもうた。しかし与えられた恩恵は、人の死までもが市場で取引される国。汗が一筋、進の背中を妙にゆっくりと伝い落ちていく。
「これが、私たちが欲しかった日本の姿？　進、ライジング・サンで過ごした日々が子供の遊びだったなんて、本気で言っているの？　GKの幻を否定できずに、今後も続く生を惰性のうちに過ごすと、その齢ですでに決めてしまったと言うの？」
こちらを見上げてくるのは、長年の夢であった女性、みらい。その人形のように整った顔から、進は目を離すことができない。
（「第三章　自由を守る者」より）